932
SH12
9b

始

外164
932
SH12
P.19
84

トッレムハ

アーピスクエシ

久米正雄譯

新潮社出版

大正
12. 1. 9
内交

序

ハムレット、丁抹皇子の悲史曲が、沙翁劇作中に在つて其の位置必ずしも最上位に位ゐしてはゐない。併し乍ら所謂彼が遍在的創造力（オムニプレゼント・クリエエチヴネス）の圓滿なる表現として、第一の代表作たる事は、古今の批評家の萬口一致するところである。凡そ四大悲劇各々長所ありて、人によりて或はリア王の陰慘を好み、オセロオの詐欺を悦び、マクベスの深刻を愛するも、畢竟ハムレットが悲愴に哀愁を交へたる基調、抒情詩味に滑稽味を加へたる挿話、史曲にして而も性格劇たるに歸依する信者の多きには及びもつかぬであらう。

譯者は沙翁現代語譯の第二着手として、此曲の依囑を受けたのを非常な喜悦を以て迎へた。而して此の端嚴壯麗なる一篇を譯すべく餘りに粗笨輕佻なる現代語に跌きながらも、終始敬虔の念を持續して譯了する事が出來た。

譯語は嚴重なる意味に於て、現今用ゐられつゝあると云ふ定義の現代語にはなつて居ないかも知れない。それは主に劇の場面が宮中なるがために起つたことで、譯者も出來るだ

けの注意はした心算である。そして原作のブランク・ヴァアスを寫さうとして出來るだけ七五調のリズムを踏むやうにと思つたが、心に任せなかつたところが多い。私は時として沙翁劇は七五調を以て終始すべしと云ふ確信さへ持つことがある。併し今考へると、それが却つて此譯文の弊因をなしたかも知れない。記して以て大方の示教を待つとしよう。

大正四年五月

譯者識

第一幕……四
第二幕……四六
第三幕……八一
第四幕……一二五
第五幕……一六〇

ハムレット

シエクスピヤ作

久米正雄譯

曲中人物

クロオデ、アス。デンマアク國王、
ハムレット。先王の皇子にして現王の甥。
ポロニアス。侍從長。
ホレエシオ。ハムレットの友。
レエアチイズ。ポロニアスの子。
ヴォルチマンド。
コオネリアス。
ロオゼンクランツ。
ギルデンスタアン。
オスリック。
貴紳一人。
僧侶一人。
マアセラス。
バアナアドオ。
ハムレット

士官。

廷臣。

フランシスコオ。兵士。
レイナルドオ。ポロニアスの臣。
俳優數人。
道化方二人。墓掘男。
フォオチンブラス。ノルウェイ皇子。
將校一人。
英國使節數名。

ガアトルウド。デンマアク皇妃にして、ハムレットの母。
オフィリア。ポロニアスの娘。

其他貴族、貴女、士官、兵士、水夫、使者及び從者等數人。
ハムレットの父の亡靈。

場所　デンマアク。

第一幕

第一場　エルシノオア。宮城前の高臺

フランシスコオ部署についてゐる。そこへバアナアドオ入り來る。

バア。 其處にゐるのは誰だ。
フラ。 いや。それは此方から訊くのだ。止まれ、名をなのれ。
バア。 大元帥陛下萬歲。
フラ。 バアナアドオ殿か。
バア。 さうだ。
フラ。 あなたは一分も時を違はずおいでなさいました。
バア。 恰度今十二時を打つた處だ。行つて床に就くがいゝ。フランシスコオ。
フラ。 御交替を感謝いたします。嚴しい寒さで、心底から病み果てたやうな氣が致します。
バア。 看守中は靜穩だつたか。

フラ。鼠一匹騒ぎませぬ。
バア。宜しい。歸つて休め。もし途中で俺の看守對手のホレエシオとマアセラスに會つたら、急いで來るやうに言つて呉れ。
フラ。何だか足音が聞えるやうです……こら。待て。誰だ。
（ホレエシオとマアセラス入り來る）
ホレ。此の國土の朋友。
マア。同じく陛下の赤子だ。
フラ。では御機嫌よろしう。
マア。あゝ左様なら、忠勇なる軍人。誰がおまへと交替したのだ。
フラ。バアナアドオ殿が交りました。では御免下さいまし。（退場）
マア。おい。バアナアドオ君。
バア。おや。なに……そこにゐるのはホレエシオ殿ですか。
ホレ。まあそんなものだ。
バア。よくおいでなさいました、ホレエシオ殿。よく來て呉れた、善良なるマアセラス君。
マア。あの……今夜も又あのものは現はれましたか。

バア。まだ何にも見えませぬ。
マア。ホレエシオ殿はあれが單に吾々の幻影に過ぎぬとお云ひなさるのだ。さうして二度迄も吾々が見たあの怖ろしい光景を頭から信じようとしないのだ。それで俺は今夜のあの時刻を吾々と共に看守するやうに、勸めてお伴れ申したのだが、もし又あの幽靈が現はれたら、吾々の眼の正しい事を確め、言葉をかけさせようと云ふのだ。
ホレ。どうしてどうして、出やしないよ。
バア。まあしばらくお掛けなさいまし。そして二晩もつゞけて吾々が見たこの話に對して、そんなに城郭を築いてゐるあなたの耳を、改めて攻め落して見せませう。
ホレ。では一緒に腰でも掛けて、バアナアドオの怪談を聞くとしようか。
バア。外ならぬ昨夜の事でした。北斗星から西に當る、恰度あすこのあの星が、今燦めいてゐるあたりの天空を照らさうと、進路をとつた時、私とマアセラスとが此處に立つて居りますと、恰度時鐘が一時を打ちました……
（亡靈あらはる）
マア。叱つ。默れ。見ろ。又現はれたぞ。
バア。崩御なされた先王と寸分違はぬ御姿で……。

マア。ホレエシオ殿、あなたは學者だから、話しかけて御覽なさい。

バア。先王そつくりぢやありませんか。何か言ひかけて御覽なさい。

ホレ。全くよく似てゐる、俺は恐怖と怪異で慄へ上つて了つた。

バア。何だか物を言ひかけて貰ひたさうな樣子です。

マア。何か訊いて御覽なさい。ホレエシオ殿。

ホレ。汝元來何者なれば、かゝる深夜に横行するのみか、崩れましゝデンマアク故王陛下が屢々召して進軍し給ひし美しく勇ましき軍裝をかけて現はれたのだ。天にかけて命ずるぞ。語れ。

マア。氣に障つたやうだな。

バア。あれ、靜々と立去ります。

ホレ。停れ。語れ語れ。命ずるぞ、語れ。

（亡靈消える。）

マア。消えて了つた。返事をしたくなかつたのだ。

バア。どうです、ホレエシオ殿。あなたは戰へて、顏色が眞蒼ですな。これでは幻影に過ぎぬとばかりも云へないでせう。どうお思ひです。

ホレ。神前に誓つて云ふが、全く此俺の肉眼の正しい保證がなかつたなら、これを信じはしなかつたらうよ。

マア。先王陛下に似てはゐませんかな。

ホレ。おまへがおまへに似てゐるやうに。あの甲冑こそは先王が野心滿々たるノルウェイ王と一騎打をなされた時のにそつくりだし、あの御激怒の顏色は、嘗て談判破裂して、穩に騎りたるポーランド人を氷上に打懲らした時になされたと同樣だ。でも不思議な……。

マア。此通り前にも二度、萬象死したる此時刻に、吾々が看守してゐる傍を歩武堂々と通り過ぎました。

ホレ。とりわけて思ひ當る筋はないが、朧ろげ乍ら吾が考への大凡を云ふと、これは吾國に何か異變の起る前兆だ。

マア。それならば先づ、腰をお掛けなさい。そして御存じの方にお聞きしたい事があります。一體何故かやうに國中を擧つて夜な〳〵こんな嚴重な水も洩らさぬ警備に努めるのですか。それから何故日に日をついで大砲の鑄造を急ぎ、又は外國から夥しい兵器の購入れをするのですか。何故又あのやうに船匠共を驅り立てゝ、日曜日をも與へぬ苦役に從事させるのですか。如何なる大事が差迫つてこのやうな汗水流す急ぎ仕事を、晝夜分たず續け

るのですか。誰か教へて下さる方はありませんか。

ホレ。 それは俺が教へてやる。少なくともまあ世間の取沙汰はかうだ。つい今しがたも御姿をお現はしになつた先王は、おまへ方も知つてる通り、ノルウェイ王フォオチンブラスに御誇りを傷けられたのを憤つて、自ら進んで一騎打をなすつた。そして其場に於て夙に勇武の譽をとつてゐた猛き先王ハムレット陛下は、物の見事にフォオチンブラスを御斃しなすつたのだ。所が、豫ねて國法騎士道の掟に照して御批准なされた上、とり交したる契約によれば、ノルウェイ王は其身を失ふと共に、己れが領土を悉く勝利者に讓る筈になつて居つた。尤もこれに對しては吾が王も相當の領地を賭けられ、もし打勝たれた其時は、それがフォオチンブラスの相續に歸すべき筈だつたのを、同じ契約の明文に從ひ彼のが吾がハムレット陛下の御手に落ちたのだ。然るに此處に其子にして同じくフォオチンブラスといふ若者、血氣無謀の青二才ながら、ノルウェイの邊境に於て、此處彼處より食餌に群がる命知らずの無賴漢を驅り集め、何事か企てんとして居る樣子。これ必らず武力と暴言を以て、父が失つた舊領土を回復しようとするに他ならぬ事は、吾が國當局の人々には明白に解つた。で俺は、これこそ吾々が準備の主なる動機であり、此警備の原因、さては國内擧つて急ぎ騷いでゐる理由ではなからうかと思ふのだ。

バア。 私もきつとそれに違ひないと思ひます。それだからしてあの凶事を知らす怪しき姿が、昔も今も此戰の原因たる先王の甲冑姿を借りて、夜警中現はれるのも尤もであります。

ホレ。 眼に入つた塵のやうに、この些さな事も心の眼を惱ましてならない。昔榮耀榮華を極めし羅馬に於ても、大シイザアが兇手に斃るゝ少し前には、墓は藻脫けの殼となつて、墓衣を纏うた死者どもが羅馬の街上におめき叫び、星は火の尾と血の滴りを曳き、白日は光を失つて、ネプチュウンの領土なる大海をも支配するといふ月魄さへ、痛み呆けて終りの日が來たかのやうに蝕んだと云ふ事だ。それによく似た變事の前兆。運命に先だつ先驅、來らんとする不祥のしるしとして、共に天地の變象が、吾が國内の同胞に示したものに違ひない。や、靜かに、見給へ。あれ又あすこに現はれたぞ。

（亡靈再びあらはる。）

俺が遮つて見よう。祟を受けてもかまふものか。止まれ、まぼろし。もしおまへが聲を發し、或は言葉を云ひ得るなら、吾に語れ。もしそれを爲さばおまへの心を安らかにし、又は吾にも惠みとなる事があるなら話して呉れ。もし幸ひに前以て知れば、避けらるゝやうな國家の運命を知つてゐるならば云つて呉れ。でなくば人の云ふ如くに、おまへの存命

中、地中に秘藏して居つた、不義の財寶に思ひ殘り、魂魄となつてさまよふのか。それを語れ。

（鷄鳴く。）

停れ、語れ。お停めなさい、マアセラス。

マア。 此戟で打ちませうか。

ホレ 止まらなければ打ちなさい。

バア。 此處だ。

ホレ。 此處だ。

マア。 消えて了つた。

（亡靈消え失する。）

あのやうに氣高い物に暴行を加へたのは間違ひでした。空氣のやうに手答へもないものを、無駄に打ちたゝいたのは惡い戯れです。

バア。 物を云ひさうにしたところ、恰度鷄が鳴いたので……。

ホレ。 怖ろしい呼び出しを受けた罪人のやうに、怖れ戰いた樣子だつた……。聞く所によると、曉の喇叭手なる鷄が、高く鋭き聲音をなす喉を以て、日の神を呼び醒せば、その告げ

に從つて、水中と云はず火中と云はず、空中或は地中をも、さまよひあるく精靈が己が棲み家にひそみ隱るといふ事だが、其傳說の眞實を今あり〳〵と證據に見た。

マア。 誠に鷄の啼音で消え失せました。人々の言ふ事には、吾が救世主降誕祭の季節が近づけば、曉告ぐる鳥の歌は夜もすがら響くので、如何なる精靈も出歩く事なく、夜毎々々安らかに、星も祟らねば、妖怪もあだをなさず、魔女さへ魅力を失うて、聖く美妙な時となると申します。

ホレ。 それは俺も聞き知つて、半ばはまことゝ信じて居る。併し、見なさい、朝日が紅の衣を被づて、彼處に高き東の丘の露を踏んで登つて來た。吾々の看守もやめずばなるまい、そして、私の考へ通りに、今夜見た始末をハムレット皇子に申し上げようではないか。吾吾にはどうしても答へなかつた亡靈も皇子には口を聞くかも知れない。お告らせするに異議はあるまい。それこそ吾々の赤誠にもあたり、義務にも適ふのだ。

マア。 願つてもさうしたい所です。而して私は今朝皇子にお目にかゝる最も便宜な場所を存じて居ります。（退場）

第二場　城内の大廣間

（國王、皇后、ハムレット、ポロニアス、レエアチイズ、ヴォルチマンド、コオネリアス、貴族、從者等入り來る。）

國王。 吾が親しき兄上なる故ハムレット王崩御の記憶未だ綠の如く鮮かであるから、吾々は只管悲歎に暮れ　全國を擧げて哀愁の眉を等しく一つに顰めて居るのが相應であらうが、思慮を以て强ひて人情と鬪ひ、故王を哀惜しながらも、己れが身の本分を忘れぬのを賢しとしたい。それ故さきには吾が姉宮であり、今は皇后となつて、此軍國主權の固めなるガアツルードを、悲しみも混じる喜びを以て、……一眼には悅びの光を湛へ、一眼には悲しみの涙を流し、祝つて葬禮を送り、悼んで婚儀を迎へ、悲喜哀歡の重さを等しうして……吾が妃となした。尤もこれに就ては、諸子がよりよき智慧にもはかり、又始終十分の同意を與へられた事で、すべて予の感謝して居るところだ。さて次にだが、諸子も知つてゐる通り、此度若輩フォオチンブラス、吾を庸君と侮つてか、又は兄上の死によつて、國內騷亂と亂れ居ると思つてか、機至れりと夢想して……性懲りもなく煩はしき使者を送り、吾を屈服せしめて、嘗て契約の明文に從ひ、彼の父が失つて、吾が勇敢なる兄弟の手に歸した領土を回復せんとしてゐるのだ。彼に就ての事はそれだけ。さて話は又吾々に戻るが、今日のやうに呼び集めた用務といふのはざつと次のやうな事だ。卽ちかのフォオチンブラスが叔父なるノルウェイ王、身體の自由を缺いて床を離るゝ能はず、從つて甥の企てを知らずに居るらしく、又其企てには徵集募兵及び糧食の類すべてノルウェイ王が臣下より成れる事ゆゑ、玆に一書を遣はして是を差し止めさせようと云ふのだ。それには汝コオネリアス及びヴォルチマンドの兩名を、老ノルウェイ王へ此挨拶の使者として差し向けよう。但し王との交渉に於ては、此處に認めて置いた細目の範圍以外には、一切箇人的の權限を與へてはないのだ。さらば無事に行け、而して速に命を果して、忠勤をぬきんでゝ呉れ。

コオ。ヴォル。 如何なる御仰せにつきましても、忠勤を勵む所存でございます。

國王。 吾々とてもそれは疑はぬ所だ。では心から無事を祈るぞ。

（ヴォルチマンド、コオネリアス去る。）

さて今度はレエアチイズ、おまへはどんな報告をもつて居るのだ。何か願ひ事があると云つてゐたが、一體何だ、レエアチイズ。道理に適つた言ひ分なら、デンマアク王は無駄にはしない。レエアチイズ、おまへが願ふ事なら、おまへが乞ふまでもなく、此方から進んで遣はさずにゐられやうか。デンマアク王座とおまへの父との關係は、頭と心よりも親しく、手と口よりも密接なのだ。さあ何が望みなのだ、レエアチイズ。

レエ。 畏れ乍ら陛下。フランス國へ立歸るやう御許しが願ひ度いのでございます。陛下の

御即位に列して、微臣の赤誠を表はさんため、喜んで彼處より參りましたが、今日既に勤めも相果てました故、實を申せば、私の考へも望みも、再びフランスの方に傾いたやうな次第で、此上は伏して陛下の寛大なる御允可を乞ふのでございます。

國王。 それでもう父の許しは受けたのか。何うだな、ポロニアス。

ポロ。 陛下、彼は程よく繰り返し〳〵、私が澁々乍らの許しをもぎ取つて、とう〳〵彼の望みの上に餘儀なく承知の調印を致しました。何卒御許しを下し置かれますやう、偏へに御願ひいたします。

國王。 ではいゝ日を選んで發つがいゝ、レエアチイズ。時はおまへのものだ。心の儘に立派な日々を送れよ。……が、さてハムレット。甥ではなくて今は吾が子よ……。

ハム。 (傍を向いて) 表は親族以上だが、心は到底親類以下だ。

國王。 おまへの額には未だ雲が懸かつてゐるやうだが、一體どうしてさう沈んでるのだ。

ハム。 いゝえ雲どころか、日當りがよ過ぎて困る位ゐです。

皇后。 ねえハムレットや。おまへその暗い患ひの色を振りすて〳〵、吾が君になつかしい眼を見せてお呉れでないかえ。いつまでも眠瞼を垂れて、地下に眠つておいでの父上をお探しでないよ。おまへだつて知つておいでだらう。生あるものは必らず死に、現世を通り越して

劫に過ぎて行くのが常だと云ふ事を。

ハム。 えゝ。母上様。常でございます。

皇后。 そんなら何故、おまへにだけ常でなく見えるのだえ。

ハム。 見えるのですつて、母上。いゝえ、事實さう「ある」のです。「見える」なぞと云ふ事は知りません。母上様、彼の心を眞に表はすことのできるものは、ただこの墨汁のやうな外套でもなく、この定例の崇高な黑い喪服でもなく、强ひて作つた空嘆息でもなく、眼に溢れる涙の川でもなく、相恰曲げた愁嘆顏でもなく又は悲しみのあらゆる形式、樣態、外貌でもありません。ほんとにこれらのものこそ「見える」でせう。こんな事ならいくらも眞似が出來ますから。併し私の心の中にはそんな「見え」を超越したものがあるのです。こんなものは只悲哀の飾りや衣に過ぎません。

國王。 ハムレットよ。おまへがそのやうに父に哀悼の勤めを獻げてゐるのは、美しくもあり賞むべき性情であるが、併し玆に是非共考へなくちやならぬのは、おまへの父も矢張り父を失ひ、其失つた父も亦其父を失つたといふ事、さうして生き殘つた者は各々等しく親子たるの務めによつて適宜の間喪に服するといふ事だ。併し頑なに哀悼を續けるのは、神意に背く片意地の道でもあり、又男らしからぬ愁嘆だ。即ちそれは天に對して最も正しから

ぬ意志を示し、信仰の庇護なき心、短慮、無智、愚昧等をあらはすものだ。何故といふに、死はこれ必然の出來事であつて、しかも五官によつて感じ得る世の凡々事と一般であると知り乍ら、何故に氣むづかしく逆ひ、心に銘して歎くを要しようか。あさましい。このやうな事をするのは天に背き、死者に背き、自然に背いて、道理に最も悖つた業なのだ。父の先に死するは道理の極めて普通な事、世に初めての死屍あつてより今日まで、道理は常に「これ必然の事」と叫んで居るのだ。ハムレットよ吾が願ひだ。どうかそんな無益の悲嘆を地に投げすて、私をほんとの父と思つて呉れ。と云ふのは全世界をして、おまへが吾が最も直接なる王座の繼嗣であつて、又私が慈父に異らぬ恩愛で、おまへをいつくしむ事を知らしてやるためだ。かのウイッテンベルクの大學に再留學のおまへの意企は、吾が望みに最も違つて居る。だから賴む。枉げて此處に止まり、吾々の歡ばしげなる眼の前にあつて、重臣とも、近親とも、吾が愛子ともなつて呉れ。

皇后。 ハムレットや。おまへの母の祈りを反古にしないでお呉れ。妾はおまへがねて呉れるのを祈つて居るのだよ。ウイッテンベルクへ行かないでね。

ハム。 母上、努めてお吩咐に從ひませう。

國王。 はてさてこれは嬉しい佳い返事だ。では吾々と共にデンマアクに停まつて居て呉れ。妃よ、參れ。このハムレットが柔順溫和な承諾は吾が心に宿つて微笑んで居る。その嬉しさを祝はんため、只今より賀宴を開き、同時に祝砲を雲に放たう。さうすれば天も亦王家の萬歳を謳して、地上の霹靂に應へるであらう。さあ向うへ……。

（ハムレットを除いて、皆々去る。）

○**ハム。** おゝ、餘りに固すぎる此の肉が、融けて流れて露と變つて呉れゝばいゝ。でなくばせめて神の掟が自殺を禁めずにあつたらなあ。おゝ神よ。おゝ神よ。凡べて此世の營みが何といふ退屈な空虛な平板な無益なものに見えるのでせう。ちえゝ、あさましい。これこそ要らぬ雜草が實を結ぶまで生え茂つた荒庭だ。臭いもの穢ないものばかりが獨りで蔓つてゐる。こんなになつて了はうとはなあ。お亡れなすつてたつた二月、いやさうはならぬ、二月にもならない。あんなに傑れた大君だつた。それとこれとを比べれば日の神と半羊人だ。あのやうに母上を可愛がりなすつて、荒い風にも當てまいとせられた程だつた。それとは天地の變りやう。えゝ思ひ出さなくちやならんのか。可愛がらるればがらるる程、猶愛欲の念が募つてくるかのやうに、固くお縋りなすつてゐた母上が、何故また一と月と經たぬ中に……えゝ、そんな事は考へまい、考へまい……脆きものよ、おまへには女と名をつけてやる。小一と月、それを穿いてニオオベのやうに涙ながら父上の靈柩に從はせられ

た御靴も古びぬ間に、なぜ母上は……母上さへ……おゝ天よ。物の道理を辨へぬ獸さへもつと永く悲しむだらうに、……父上の弟ながら、私とハアキュリイズ程も似てゐない叔父上と結婚せらるゝとは。一と月經たぬ中にか。僞りに固めた涙の汐がする痛めた眼に赤さを殘して居るのに、婚姻なされた。おゝ何たる惡る速さ。かうまで巧みな素速さで邪淫の床に急ぐとは。これではきつと善い事はなく惡事の基とならぬ筈はない。併しもう舌を動かしてはならぬ。吾が胸よ、裂くるなら裂けるがいゝ。

（ホレエシオ、マアセラス、バアナアドオ入り來る。）

ホレ。 殿下には御機嫌宜しうございますな。

ハム。 おまへも健康で會ふのは嬉しいぞ。確かホレエシオだつたと思ふが、私の記憶の間違ひかな。

ホレ。 御言葉通り、相も變らぬ殿下の哀れなる忠僕でございます。

ハム。 これ、吾が親しき友よ。私はその名を取り換へるぞ。さうして何うしてウィッテンベルクから歸つたのだホレエシオ。やあマアセラスか。

マア。 殿下……。

ハム。 よく來て呉れた。（バアナアドオに）おまへもようこそ……で、一體何んな理由でウィッテンベルクから歸つて來たのだ。

ホレ。 のらくら根性からでございます、殿下。

ハム。 そんな事はおまへの敵が云ふのでも聞きたくはない。まして私の耳にそんな無理矢理を働いて、おまへ自身に對する自分の惡口を信じさせようとは、猶更だ。おまへがのらくらでない事はよく知つてゐる。だがエルシノオアでの用事は何だ。惡くすると發つ前に深か酒飲みの教授を受けるぞ。

ホレ。 殿下、私は御父君の御葬禮を拜しに參つたのです。

ハム。 どうか私を瞞さないで呉れよ學友。實は母上の婚儀を見るためであらう。

ホレ。 さう云へばほんとに矢繼ぎ早でございましたな。

ハム。 そこがそれ儉約、儉約さ。葬式につかふ炙り肉をすぐさま婚儀の食卓に飾る冷たい饗應だ。こんな日にめぐり合ふ位ゐならいつそ不倶戴天の仇と天國で會つた方が增しな位ゐだよホレエシオ。あゝ父上……何だか父上が見えるやうだ。

ホレ。 おゝ何處に、殿下。

ハム。 私の心の眼に、ホレエシオ。

ホレ。 私も曾て拜謁したことがありました。ほんとに氣高い王樣でございました。

ハム。どこからどう調べたつて、二度と似よりを見ぬやうな人であつた。
ホレ。殿下、私は昨夜先王にお目にかゝつたやうに思ひます。
ハム。お目にかゝつた、……それや誰に。
ホレ。殿下、先王あなたの御父君に。
ハム。先王吾が父君にだと。
ホレ。まあ暫らく御驚きを鎭めなすつて、御傾聽下さいまし。さすれば此兩士官を證人として、此怪異をば申し上げませう。
ハム。天の愛にかへても、その話を聞かう。
ホレ。二夜までも引續いてこれらの兩士官マアセラス及びバアナアドオが看守の折、萬象死した深夜の靜閑に、かやうな怪異に出會ひました。と云ふのはあなたの父君に似た御姿が、頭から爪尖まで、一寸の隙もなく甲冑を着て、兩人の前に立ち現はれ、嚴かな御歩調を以つて靜々と又堂々と傍を通り過ぎたのでございます。三度まで其姿は怖れ戰いてゐる眼前を手の屆くばかりの距離で歩きました。その間も兩人は餘りの怖ろしさに魂も溶くるばかり、口をつぐんで立つたまゝ、言葉を懸けようともしなかつたと申します。これを私にさも怖ろしげに祕めかくして物語りましたので、私も第三夜に共に看守を致して見ました。

所が兩人の云ふ通り、時刻も姿も、片言の相違もなく、その幻影は現はれ出ました。私はあなたの父君を知つて居ります。この兩手でもあれほどよくは似ては居ません。
ハム。で、その場所は。
マア。殿下、吾々が看守してゐる高臺でございます。
ハム。おまへはそれに話しかけて見なかつたのか。
ホレ。殿下、話しかけて見ました。けれども一言の答へもありません。併し一度何だか頭をもたげて、話したげな樣子で動かうとした事があるやうに思ひましたが、恰度その時曉の鷄が聲高く啼いたので、其音と共に急いで身を戰かし、忽ち消えて了ひました。
ハム。ても不思議な……。
ホレ。親王殿下、私がかうして生きて居るやうに、全く眞實でございます。而して吾々は殿下に之をお知らせするのを義務の一端と考へたのでございます。
ハム。さうあらう、さうあらう、……併し何となく氣がゝりだ。今夜も見張りをするかね。
マア。
バア。致します、殿下。
ハム。甲冑を着てゐたと云つたね。
マア。
バア。着けてゐました、殿下。

ハム。瞬天から爪尖までだね。

マア。バア。殿下、頭から足までゞございます。

ハム。では顔は見えなかつたね。

ホレ。いえ見えました。帽(かぶと)當が引上げてありました。

ハム。え、不興げに見えたか。

ホレ。怒つて居るといふよりは悲しんでゐるお顔付でございました。

ハム。蒼白(あをじろ)かつたか赤かつたか。

ホレ。いえ、大さう蒼うございました。

ハム。そして目をおまへたちに据ゑてゐたか。

ホレ。ちつといつまでも。

ハム。私もそこに居合はせたかつた。

ホレ。すればきつとお驚きなさるでせう。

ハム。違ひない違ひない。で長く停まつてゐたか。

ホレ。中加減な速さで百を算へる位ゐの間です。

マア。バア。いやもつと永い、もつと永い。

ホレ。私の見た時はその位ゐだつた。

ハム。髯は灰色であつたか。……でなかつたか。

ホレ。灰色でした。御在世中拜見した通り、黒い中に銀色を交へて居りました。

ハム。私も今晩見張りをしよう。恐らくは又現はるゝに違ひない。

ホレ。きつと現はれるだらうと思ひます。

ハム。假りにも父上の御姿を裝ふからは、たとへ地獄が口を開いて、物を言ふなと禁(とが)むるとも、きつと話しかけて見る心算(つもり)だ。ついてはおまへ方皆々に頼みがある。もし今までおまへ方が此の光景(ありさま)をかくして來たのなら、以後も沈默の中に收め、さうして今夜も如何なる事が起らうとも、胸に祕(ひ)めて口をつぐんでゐて呉れぬか。そのうちにはおまへ方の誠意に酬いる時もあらう。では左樣なら。高臺で十一時と十二時の間にまた會ふとしよう。

皆々。謹んで吾々の忠勤を勵みます。

ハム。いや、お互に誠心を示しあふのだ。左樣なら。

（ハムレットを除いて皆々去る。）

甲冑姿の父が亡靈。何から何までよくない事。さては匿(かく)れた惡行があるのだな。早く夜が來ればいゝ。それまでは鎭まつてゐて呉れ、吾が心よ。祕めた惡事の數々は、たとへ大地

を擧げて蔽ひかくすも、やがて人目に顯はれて來よう。

（ハムレット去る。）

第三場　ポロニアス邸内の一室

（レエアチイズとオフイリア入り來る。）

レエ。 必要な品々も積み込んで了つたし、もうこれでお別れだ。では妹よ、順風の吹く度、便船のある毎に、眠つてゐないで、きつと消息を聞かせて呉れよ。

オフ。 それをお疑ひなさるの。

レエ。 ハムレットさまの、あの可憐らしいお言葉は、ほんの一時の御浮氣で、若い血潮のた戯れと思ふのだよ。春淺き日の菫草は、早咲きではあるが萎みやすく、美しいけれど永くはもたない。香りも慰みも一瞬時で、只それだけの事なのだ。

オフ。 ではたゞそれだけの事と……。

レエ。 たゞそれだけの事と思ふがよい。といふのは元來人の成長は、筋肉や容姿ばかりでなく、此の五體の育つと共に、心神の内的作用も益々増大してゆくものだから、今こそ恐らく皇子はおまへを愛し、又そのお心の操を汚す穢ない悪意はよもやあるまい。けれども爾

を附けなくちやならんのは、彼の君の身分の高きを思ひ、御自分の意志さへ自分のものでないと云ふ事だ。皇子の御身はいはゞ御皇統の奴隷なのだから。下々の人々のやうに、勝手な振舞は出來ないのだ。彼の君の皇妃選擇一つに全國の安寧幸福が懸つてゐるのだから、自ら支配なさるゝ所の庶民一同の望みと同意とによつて御選擇が定まるのだ。だからたとへ彼の君がおまへを愛してゐると仰有るともその特別な御身分の許す範圍内で、御約束を實行なさるだけの事とあきらめ、信じないのが怜悧なのだ。それは所詮デンマアク中の聲がかりがなければ駄目なのだからな。もし輕々しく君が戀歌に耳を傾け、心から溺れ入つて、縱いまゝなる仰せもきゝ、二つとない操の祕寶を開いたなら、取りかへしのつかぬ名の汚れと思ひ廻らせよ。これは呉々も恐れなければならぬぞよ妹オフィリア。そして愛情の後陣に退いて、情慾の危ふき彈雨を避けるが肝心だ。慎み深い處女は月に素顔を見せるのさへふしだらな行だとしてゐる。淑德の化身でさへ世の誹謗は免れない。春の幼ない花の蕾は未だ開かぬ中から蟲に喰はるゝことがある。人も青春の曉、若さが露と滴る頃は、害なふ風に觸れ易い。よく氣をお附け。萬全は慎重に宿るものだ。若い中は自分から誤まる。外に誘ひ手はなくてもだ。

オフ。 その教訓の御主旨は私の見張り人として心にとめて置きますわ。けれどねえ兄さま。

よく世の賣僧がするやうに私には天國へゆく峻しい荊棘の路を教へて置き乍ら、自分は放埒無節制の人を眞似てプリムローズの咲き匂ふ艶めいた路をお辿りなすつたり、御自分の論しをお忘れなすつちや厭ですよ。

レエ。 おゝそんな心配はしなくもいゝ。これは長居をして了つた。おや父上がおいでだな。

（ポロニアス入り來る。）

二重の祝福を與へて下さるのは二重の御慈悲です。これは幸運にも二度の御暇乞ひができます。

ポロ。 未だ此處にゐたのかレエアチイズ。早く船へ行け船へ。見つともない。風はもうおまへの帆に充ちて、人々はおまへを待兼ねてゐる。さあおまへの祝福を祈るぞ。さうして此の聊かの訓戒を心に深く刻んで置け。腹に思つた事をたやすく口に出すな。辻褄の合はぬ考へを行つては不可ない。友に親しむのはよいが、決して狎れるな、一旦持つた友で、試驗濟のものは鋼鐵の箍でおまへの心に結びつけて置け。併しまだ孵つたばかりの羽毛も揃はぬ知り合と握手して掌の感じを鈍くするな。喧嘩の門に足を入れるな。併し一旦入つたら敵手に物を見せてやれ。どんな人の言葉にも耳を藉し、自分では聲を吝め。誰の意見をもとり入れて自分の判斷は藏つて置け。財布が許す限り身の廻りに金目をかけよ。併し異樣な風をするな。立派はいゝが、派手はいけないぞ。衣裝はしば〳〵人物を表はすもの、殊にフランス高貴の上流は此の道にかけての通と粋を極めてゐるのだからな。借り手にも貸し手にもなるな。何故と云へば貸金は動もすると元金と共に友を失ひ、借金は節約の鋒尖を鈍くするものだ。最後にこれが最も大切なる事だ。曰く「己に忠實なれ、然らば夜に日のつゞくが如く、自ら他人にも虚僞あらざるべし」だ。では無事で行け。私の祈りでこれをおまへの心に永く銘せしむるぞ。

レエ。 父上、では謹んでお暇乞を致します。

ポロ。 時刻が迫つてゐる。行け、下僕等が待ち兼ねてゐるではないか。

レエ。 オフィリアよ。左樣なら。今云つた事を忘れるなよ。

オフ。 わたしの記憶に錠をかけて、鍵はあなたにお渡しゝてもようございますわ。

レエ。 では左樣なら。

（レエアチイズ去る。）

ポロ。 オフィリアよ。兄はおまへに何と云つて行つた。

オフ。 それはあのハムレット皇子さまに就てゞございます。

ポロ。 はてさてそれはよく氣がついた。聞けば此頃から皇子がしげ〳〵とおまへの所へ御徴

行あつて、おまへも又おまへで大變自由に親しく言葉を交すさうだが。私に用心せよと知らして呉れた人のいふ通り、ほんとにそんな風ならば私は是非おまへに云はなくちやならぬ。おまへはぜんたい私の娘であり、愼まねばならぬ處女の身だといふ事をよく知つて居ないのだな。皇子との關係はどんなゝのだ。さあすつかり云つておしまひ。

オフ。 あの皇子様は此間から度々お優しい約束を仰有つて下さいました。

ポロ。 おやさしい。おや〳〵。そんな危ない目に夢にも會つたことがない未處女のやうな口のきゝやうをするな。おまへは今云つた皇子の約束とやらを信と思つて居るのか。

オフ。 どう思うてよいやら、私には解りません。

ポロ。 はてさてそんなら教へてやらう。おまへがそんな約束を正金のやうに考へて、いつかは拂つて貰はれると思ふのは、まるで嬰兒も同様の考へだよ。やくにもそくにも立たぬ身の卑下はもうやめて呉れ。でないと……駄洒落をつゞければ……やくざものに私をするのだ。

オフ。 父上、でも皇子様は眞面目な御様子で戀をおうちあけ下さいました。

ポロ。 へん、御様子でどころの話しかい。やめた、やめた。

オフ。 そして御言葉が僞りでない證據にと、凡そありたけのお誓ひをなさいました。

ポロ。 ふん、それこそ阿呆な林鳥を捕へる罠さ。私も知つてゐるが、血潮の燃え立つ時には、どんな出たらめの誓ひでも云ふものだ。娘よ。その燃え立つものを火と思ひ違へてはいけない。それは光りのある割に熱がなく、あまつさへ約束してる最中に消え失せるものだ。以後は處女の身だしなみに、遇ふのも少しは遠慮をしなさい。よし會見のお仰せがあつても、よく〳〵の事でなければ會はぬだけに高くとまつて居るがよい。さてハムレット皇子の事に歸るが、皇子の御心はたゞこれだけ、即ち未だお年も若し、おまへの身分とは違つて、もつと御自由に御振舞ひができるのだと思ふがいゝ。手短かにいへば、オフィリアよ、誓ひをまことゝ思つてはならぬ。誓ひは人を欺くためにことさらに神聖らしく經文を讀む女衒と同じく、衣の色と大違ひで、人にふしだらを薦める媒人のやうなものだ。ですべてをこゝに引つくるめると、解り易く云へば、今後は暫くの暇でもハムレットさまと言葉を交したり、語つたりすることは許さぬぞ。氣をつけて此命令を守れよ。ではもう行つてよろしい。

オフ。 はい。かしこまりました。

（兩人とも去る。）

第四場　高　臺

（ハムレット、ホレエシオ、及びマアセラス入り來る。）

ハム。 肌をつんさくやうな風だ。ひどく寒い。

ホレ。 全く刺すやうに鋭い風でございます。

ハム。 もう何時だらう。

ホレ。 まだ十二時には少し缺けて居ると思ひますが……。

ハム。 いや、十二時は打つた。

ホレ。 さうですか。私はつい聞き落しました。ではもうそろ〳〵亡靈が彷徨ひ出ようとする時刻ですな。

（奥の城内で喇叭の音、大砲の響がする。）

あれは何うしたのでせう。殿下。

ハム。 今宵は王が徹夜して宴席を張り、賀盃を擧げて、醉ひつ踊りつしどろもどろなのだ。而して王がラインの美酒を飲み干す毎にあのやうに銅鼓を鳴らし、喇叭を吹奏して、酒盃の勝利を稱へるのだ。

ホレ。 それが慣例なのですか。

ハム。 うむ、さうとも、慣例だ。併し、此地に生れてこの風習に馴れ切つてゐる私の心でも、守るよりは破るのを名譽と思つてゐる慣例だ。此頭を痛むる亂酒の習ひは、東西遠近に傳はつて、他國人の嘲り譏りを受くる基となり、吾々はみな泥醉漢と呼ばれ、豚と汚名を蒙つてゐるのだ。まことにこれこそ吾々がなし遂げた事の、いかに高きを極むるとも、それより名譽の心髓を奪ひ去るものだ。かういふ事は一箇人の場合にもしば〳〵ある。例へば何か生れついた疵があれば、素性の事を云々されるやうに……これは何も其人の罪ではない、天が選んで生ませたのだから……併しその天然の惡質が增長して、道理の牆壁を破り出たり、又はある癖が度外れに進んで、世にいふ行儀作法に適はぬ時、其人此缺陷の印章を負ひ、此天が與へた法被を着、又は定まる惡運の星を荷ふ間は……他に如何なる美德あつて……いかに純潔無比であつても、……此特別な誤ちからして、腐敗の譏りを免れ得ない。只一點の汚點のために、貴い全幅の本來を、我から毀つのは世の常だ。

ホレ。 御覽ください。殿下、現はれました。

（亡靈あらはる。）

ハム。 天に在す慈悲の神々も護らせ給へ……汝、たとへ聖靈にもせよ、惡鬼にもせよ、天の

瘴氣を齎らすとも、地獄の妖風を持ち來るとも、心は善くも惡るくとも、そのやうな疑はしき姿にて、現はるゝからには聞く事がある。私は汝とハムレットと、王と、父とも呼びかけよう。おゝデンマアクの大君よ。答を賜へ。私をして疑惑に心を破らしめ給ふな。それにしても何故、神聖なる儀式を盡して葬つた御死骸が、蠟をひきたる御墓衣を破り、又はなにゆゑ安らかに靈柩を收め奉つた御陵が、重々しき大理石の顎を開いて、君を此世に吐き出したのです。どのやうな譯があつたので、既に死屍ともなられた君が、再び隙もなく身を鎧うて、冴えてゆく月に立現はれ、夜を物凄くなさるのです。人心の達し難き思ひを以て、吾々自然の莫迦者を怖れ戰かせようとなさるのですか。云つて下さい。どういふ譯か。どうしてか。どうしたらいゝか……。

（亡靈ハムレットをさし招く。）

ホレ。 あれ一緒に來るようにあなたをさし招きます。何かあなたお一人だけに申したいやうな樣子です。

マア。 御覽なさい。あんなに恭々しい手つきをもつて、他所へ殿下を誘ひます。でも一緒においでなさいますな。

ホレ。 決しておいでなさいますな。

ハム。 こゝでは云はぬな。では從いてゆかう。

ホレ。 おいでなさるな。

ハム。 なに、恐れることがあるものか。こんな命は針と換へてもいゝ位ゐだ。それに此の私の靈魂なら、彼れと同じく不滅だから、どんな危害も加へられまい。又私を招いてゐるな。ついて行きますぞ。

ホレ。 いや殿下、水のほとりへ誘き寄せたり、海に突出た恐ろしい斷崖の頂に連れて行つて、何か怖ろしい姿と變じ、あなたの理性の力を奪つて、亂心に陷らせでもしたらどうなさいます。思つても御覽なさい。それでなくても千仞の海を見下ろし、脚下に怒濤の音を聞く所は、そゞろに人の心を眩惑させるではございませんか。

ハム。 まだ招いてゐる。お行きなさい。ついて行かう。

マア。 お行きなすつてはいけませぬ。殿下。

ハム。 手を放せ。

ホレ。 お氣をつけなさいまし。行つてはなりませぬ。

ハム。 吾が運命が呼び叫んで、この五體にあらゆる動脈をば、ネミアの獅子の筋のやうに固くしてゐる。未だ未だ呼んでゐるな。お放しなさい諸君。妨げをするとそれも亡靈の數に

入れるぞ。下がれと云ふに。……さあ行きなさい、ついてゆかう。

（亡靈についてハムレット去る。）

ホレ。 妄想に浮かされて吾をお忘れなすつたのだ。

マア。 おあとを追ひませう。お命令を聽いてゐては初まりませぬ。

ホレ。 ではついてゆかう。先はどうなるやら。

マア。 これは何かデンマアク國によくない事があるのです。

ホレ。 天がそれを御示しなさる。

マア。 それは兎も角、お跡をつけませう。

（兩人去る。）

第五場　高臺の他の一部

（亡靈、つゞいてハムレット入り來る。）

ハム。 何處まで連れてゆくのです。云つて下さい。私はもう先へは行きません。

亡靈。 ようく聞け。

ハム。 承りませう。

亡靈。 靑く燃え立つ苛責の焰に、吾が身を委ぬる時刻も間近かだ。

ハム。 あはれ、いたましき亡靈。

亡靈。 しばらく吾れを憐むをやめて、吾が云ふ事を眞面目に聽け。

ハム。 お云ひなさい。きつと聽きます。

亡靈。 聞いたらきつと復仇するのだぞ。

ハム。 何ですと。

亡靈。 吾れは汝が父の亡靈だ。深夜の僅かな間のみ、彷徨ひ出るのを許されてゐるばかり、

　　娑婆で犯した罪業が燒き淨められるゝそれ迄は、一日として火焰の中に純がれぬ事はない。

　　もしもあの世の煉獄の祕密を語るのを禁ぜられてないならば、吾が云ふ片言半句でさへ、

　　汝の心を慄かせ、若い血潮を凍らせて、兩つの眼を星のやうに、其眼窩から飛び出さしめ、

　　蓬と結んだ縮れ毛をわかつて、一本々々を怒つた針鼠の剛毛のやうに逆立たせるぞ。併し

　　永劫の火の國の事は血肉の耳に入れてはならぬ。聽け聽け、よく聽け。もしも汝の亡き父

　　を愛する心に變りがないなら……。

ハム。 おゝ神よ。

亡靈。 天に悖つた非道の弑逆に復讐せよ。

ハム。なに弑逆。

亡霊。凡そ大抵の弑逆に非道ならぬはないけれど、これは其中でも最も非道奇ツ怪至極、天に悖れる大弑逆だ。

ハム。さあ疾く知らして下さい。私は瞑想や戀の思ひよりも、猶早い翼を以て復仇に趨りませう。

亡霊。如何にもさうあらう。これでも感激しなければ、物忘れ川の岸に生えて、益なく肥ゆる雜草の鈍いにも劣つて居る。さあハムレットよ、聞け。吾が園内に眠れる間に、毒蛇が吾れを螫し殺したと、言葉巧みに拵へ出して、デンマアク中の耳をまんまと欺いたが、併しよく〳〵知れよ若者。汝が父を螫し殺した蛇は、今、王冠を頂いてゐるぞ。

ハム。おゝ吾が心の豫知した通り。あの叔父が。

亡霊。さうだ。あの不倫、あの姦淫な獸が、奸智の魅力と、邪悪の天賦をもつて……人を迷はす力があつてか……うはべは貞操無二と見えた吾が妃をば說き落して、恥づべき不義の快樂を遂げたのだ。おゝハムレットよ。これは又何といふ墮落だ。あの婚禮の式場で、交はした誓に少しも違はず、深く愛した吾をすてゝ、才能天賦の吾れより劣る、あんな醜類に心を移すとは。併し乍ら眞の貞操は、邪淫が天使の姿をかりて、誘惑しても心を動かさ

るゝ事なく、淫婦は鄙く天使と添うても忽ち清淨の床に倦いて、汚れた肉屑に思ひを寄せるものだ。併し待て。もう曉の風が匂ひ初めたやうだ。では手短かに云はして呉れ。いつもの習慣で午後になると、吾が園内に寢てゐる處を、汝の叔父は油斷を見澄まして忍び寄り、携へてゐた忌はしき毒液の小瓶から、血潮も腐らす毒水を吾が耳の穴に注ぎ入れたのだ。其毒水の効驗と云へば、人の血潮の大敵で、水銀のやうにすばやく五體のあらゆる血管を走り廻り、たちまち強い勢を以て、恰も乳に酢を注ぐと同樣、健かな鮮血を濁りこゞらして了ふのだ。そのやうな効目は吾にも起り、滑かであつた吾が全身は忽ちの中に瘡ぶたに蔽はれ、癲病患者に彷徨して、二た目と見られぬ醜い有樣……。先づ此のやうに寢て居るひまに、現在弟の手によつて、生命も、王冠も、妃をも、一度に奪ひとられた上、吾が罪業の花盛りに伐り取られ乍ら、聖禮も受けず、懺悔もせず、最期の聖油も塗らるゝ事なく、頭にすべての咎めを頂いて、裁きの庭に引出された。おゝ怖ろしい。怖ろしい。此上もない怖ろしさだ。もしも汝に心あらば、この恨を忍んではならぬ。デンマアク王家の閨床を、不義と破倫の巣窟たらしむるな。併し乍らかうは云うても、此復仇をなすに當つては忘れても間違つても母に害を加へてはならぬぞ。彼女は天に打委せて、己れが胸に宿る棘に刺し苦しませるがいゝ、では最早別れだ。螢らは曉の近きを知らせ顏に、儚ない光

を薄らめ初めた。さらばさらば。ハムレットよ、吾が吩咐を覺えて居れよ。

（亡靈消える。）

ハム。 おゝ天に在ますあらゆる神々。地上の神々も。外には……と、地獄の鬼神も。何を馬鹿な。しつかりして呉れ吾が心よ。それから汝もだ吾が筋肉よ。一時にどつと老い朽ちずに、しつかり此身を支へて呉れ。覺えて居れよと仰有るのか。覺えてゐますとも、哀れなる亡靈よ。此惑亂した頭にも記憶力のある限りは。覺えて居れと仰有るのか。云ふ迄もない。私の記憶の記入帳から、稚ない耳目が記して置いた、すべてのつまらぬ愚かな記錄、書籍より得たすべての格言、ものゝ形、過去の印象を悉く拭ひ去つて、吾が腦髓の書卷には、只尊靈の嚴命ばかりを餘事を交へず記しとめます。さうとも、天に誓つて……。あゝ、何といふ淺ましい女性。惡人、惡人、面に微笑は湛へても、實に呪ふべき惡人だ。さうだ覺え帳へ……書きとめて置くべきものだ、微笑みながら、微笑み乍らも大惡を行ふとは。ともかくも此デンマアクではさうに違ひない。（書きとめる）さあ叔父上、此通り書きとめたぞ。さあ此度は私の銘言を……うむ、「さらば、さらば。吾が吩咐を覺えて居れ」私はもう誓つたぞ。

マア。
ホレ。〕（奥にて）殿下、殿下。

マア。（奥にて）ハムレット殿下。

ホレ。（奥にて）天よ守らせ給へ。

ハム。 守らせ給へ。

ホレ。（奥にて）おうい、おい、おい、殿下。

ハム。 おうい。おい、おい。子供ら。來い〳〵、小鳥。

（ホレエシオとマアセラス入り來る。）

マア。 どうなさいました、殿下。

ホレ。 どんな事でした。殿下。

ハム。 おゝ不思議千萬だ。

ホレ。 どうぞお聞かせ下さい。

ハム。 いや、おまへ方は人に云ふから。

ホレ。 天に誓つて申しませぬ。

マア。 私も誓ひます。殿下。

ハム。 ではまあ何と云はうか。人間の心も一度だつて思ひよらぬ……が祕密にして呉れるだらうな。

ホレ。
マア。〕はい、天に誓ひます。殿下。
ハム。此デンマアク廣しと雖も、そこに住んでる惡黨で、世にも怖ろしい惡人ならぬ者は
ない。
ホレ。殿下、それんばかしの事を云ひに、亡靈がわざ〳〵墓を出てくるにも及びますまい。
ハム。うむ、さうだ。全く當つた。だからもうくだ〳〵しい事はきつぱり廢めて、互に握手
でもして別れたがよからう。人は何であらうが銘々に用事や慾望があるのだから。おまへ
方は、おまへ方に向いた務めを……又私は私の方で、まあ歸つて祈禱でもするさ。
ホレ。これは又亂暴な取りとめもない事を仰有います。
ハム。氣に障つたら堪忍して呉れ。心からあやまる。うむ、ほんとにあやまるから。
ホレ。何も氣に障りなんぞ致しませぬ。
ハム。いゝやある。聖者パトリックに懸けて、障りがある。しかも大障りだ。さつき此處に
ゐた幻影については、あれは正直な亡靈だつた……とだけ云つて置く、兩人で何を話し合
うたかは、聞きたからうが、出來るだけ堪へて呉れ。さて改めて云ふが、おまへ方は信友
であつて、一方は學者、一方は軍人だ。で一つ私の賴みを聞いて呉れぬか。
ホレ。何事ですか。承りませう。

ハム。今夜見た事を誰にも決して洩らして呉れるな。
ホレ。〕
マア。〕殿下、決して洩らしは致しませぬ。
ハム。いゝや、誓ひなさい。
ホレ。神かけて口外致しませぬ。
マア。私も神かけて誓ひます。
ハム。吾が劍にかけて。
マア。もう誓ひはとうに致しました。
ハム。ほんとうにこの劍にかけても。
亡靈。（地下より）誓へ。
ハム。おや、さうか、小僧さん、おまへもさう仰有るのか。そこにゐるのが正直もの。さあ
此方へ、……おまへ方も地中の聲を聞いたらう……さあ早く誓ひなさい。
ホレ。では本文を云うて下さいまし。
ハム。汝の見たる處を決して他言致しませぬと、吾が劍にかけて誓へ。
亡靈。（地下より）誓へ。
ハム。此處も何處もか。では地面を替へて見よう。こゝへ來なさい。おまへがたそして私の

剣に手をかけて、……汝が聽きたる處を決して他言致しませぬと、吾が劍にかけて誓ふのだ。

亡靈。（地下より）誓へ。

ハム。 よく云つた、土龍殿、おまへはそんなに早く地中を潜れるのか。立派な工兵だな。ではもう一度移らう信友。

ホレ。 これは〳〵不思議とも不思議だ。

ハム。 だから何にも知らぬ振りをして受け入れるがいゝ。ホレエシオ、此天と地の間には、おまへの哲學の夢想も及ばぬものがあるのだ。だがまあ來て呉れ。此處で、前のやうに、決してせぬと……さうすれば幸福が授からう……でこれから私は殊更に變つた性質になるやうな場合に、どんな奇怪な可笑しい擧動を私がしようと、其時腕をこんなに組んだり、こんなに頭を振つたり、何か疑はしい文句を云うて、「さう〳〵、私は知つてる」とか、「云はうと思へばいへる」とか、「話したければ」とか、又は「話してよければなあ」とかと、そんな曖昧な事をのべて、私の身の事を示してはならないぞ。これさへしなければ、おまへ方が大切の場合にきつと神明が加護を垂れて下さる。さあ誓へ。

亡靈。（地下より）誓へ。

ハム。 安心なさい、惱める精靈。……（兩人誓ふ）それでは兩人。私は滿身の愛を以ておまへたちに酬いるつもりだ。そしてハムレットの如き貧しき雖でも、おまへたちに友愛の情を示し得る限り、神の御心に適ふなら、なし得るだけは缺かさず酬いる。さあ一緒に城内へ行かう。而して必ず口に指をあて〻呉れ、頼む。……あゝ世の闘節が外づれてゐる。おゝ呪ふべき運命だ。私がそれをなほすために生れて來たとは。……いやなに、行かう。一緒に行かうではないか。

（皆々去る。）

第二幕

第一場　ポロニアス邸内の一室

（ポロニアスと臣レイナルドオ入り來る。）

ポロ。　では此の金と書狀を倅に渡して呉れ。

レイ。　畏りました、旦那様。

ポロ。　それから倅に會ふ前に、巧く立廻つて彼奴の行狀を探るのがいゝぞ。

レイ。　私もさう心懸けて居りました。

ポロ。　うゝむ、よし〳〵、よく云つた。いゝかな。先づ第一にパリイにはどんなデンマアク人がゐるかを聞くのだぞ。どのやうな、何と云ふ人がゐるのか、何として暮し、何處に住んでゐるか、どんな仲間と交際し、どの位ゐの費用がかゝるか。そこを遠廻しに訊き出して、對手が倅を知つてゐると解つたら、おまへの用事の必要以上に深く入つて、「私はあれの父も友人をも存じて居りますし本人も少しは……」てな事を云つて、倅とは遠い相識の

間柄でゞもあるやうに見せかけるのだ。よく解つたかなレイナルドオ。

レイ。　はい。よく解りました。旦那。

ポロ。　「少しは知つて居りますが、よくは存じませぬ」と云つて置いて、「併し、私の申しまする人ならばなか〳〵の亂暴者で、かやうか〳〵の道樂があります。」と好きな作り事を勝手に並べ立てるがいゝ。でも、倅の名譽を汚すやうな事だけは、氣を附けて云うてはならんぞ。併し、若い自由な青年には附物となつて知れ渡つてるやうな、放逸や亂暴や不埒なぞならかまひはしない。

レイ。　例へば骨牌なぞといふやうな……。

ポロ。　うむ。酒を飲むとか、劍を弄ぶとか、口論をするとか、喧嘩をするとか、それから女を買ふとかその位ゐまでは行つてもいゝ。

レイ。　旦那、それア不名譽にはなりませぬか。

ポロ。　なアになるものか。そこがおまへの手心次第なのだ。が其の外の惡口は、例へば彼が色にはだらしがないなぞと、決して云つてはいけないぞ。それは私の本意ぢやない。つまり倅の過失を、却つて自由の染色で、激しい心の閃めき出たもの、躾の足らぬ若い血の亂暴と、誰も認めるやうな具合に、手際よく吹き込んで呉れ。

レイ。 ですけれど旦那。……

ポロ。 どうしてこんな事をするかと聞くのか。

レイ。 はい。それが承りたうございます。

ポロ。 はてさてそれはかう云ふ了見だ。私は自ら天下の妙計と信じてゐる。即ち、製作中に少し汚れでもした物のやうに、おまへが伜にさういふ微かな缺點をつければ、宜しいかな、おまへの對手は圖に乘つて、現在おまへが探らうとしてる當人の前に云つた若氣の過失を犯したのを見た事があれば、きつとおまへに調子を合せて、まアこんな事になるだらう。「えゝおまへさんは」とか、「君は」とか「あなたは」とかと、國柄人柄によつて云ふだらう。

レイ。 さやうですな。

ポロ。 そこでだ。その男がだ。その男が……私は何と云はうとしてゐたのだつけな、確かに何か云はうとしてゐたんだが……どこでやめたのだつたかな。

レイ。 「きつと調子を合せて」……「君は」とか、「あなたは」とか云ふ處でございました。

ポロ。 うむさう〳〵。「きつと調子を合はして」だつたな。さうだ對手がこんな風に云ふのだ。「その御方なら知つて居ります。昨日も會ひました。いつかも……」それから「かやうかく〳〵の時も」とか、「かく〳〵の伴れで」とか、又はおまへが云つた通り、「骨牌で賭けをしてた」とか、「大虎になつてゐた」とか、「庭球で物言ひをつけてゐた」とか、でなくば又、「かく〳〵の店へ入るのを見た」……と云ふのは青樓のことだが……そんな事を云ふに違ひない。どうだわかつたらう。嘘の餌で誠の鯉を釣りあげるのだ。かうして吾々智略に富み、遠謀のある者は、いつも遠廻りをしたり、不意打を喰はして　搦手から本城を攻め落とすのだ。だから今云つた私の講釋勸告を、行つて伜に用ゐるがいゝ。解つたかな、どうだ。

レイ。 わかりました。

ポロ。 では無事を祈つて居るぞ、左様ならだ。

レイ。 旦那様も御機嫌よろしう。

ポロ。 おまへ自分でもよく彼の行狀を見てくるのだぞ。

レイ。 見て參ります、旦那。

ポロ。 そして彼には勝手な樂器を奏かせるのだ。

レイ。 よろしうございます。

ポロ。 では左様なら。（レイナルドす去る。）

（オフィリア入り來る。）

ハムレット

どうした、オフィリア。何事が出來たのだ。

オフ。 おゝお父様、ほんとに怖うございました。

ポロ。 一體ぜんたい何としたのだ。

オフ。 お父様、私がお部屋で縫ひ物をして居りますと、ハムレットさまがね。外衣の胸をはだけたまゝ、帽子もお冠りなさらなければ、靴下もよごれ、紐は解けて、踝まで下つたのもかまはず、シャツのやうに青白いお顔をして、膝をがたがた打つけ、怖ろしい事をいふために、地獄から放たれて來た人みたいに、それは〳〵情ない御様子で……妾の前へおいでなさいました。

ポロ。 おまへに戀ひ焦れて發狂なすつたのか。

オフ。 どうだか解りませんけれど、ほんとは、さうぢやないかと心配して居りますの。

ポロ。 皇子は何とお云ひなすつた。

オフ。 私の手首をとつて、固くお握りなすつたまゝ、腕の伸びるだけうしろへ身をおひきなすつて、別な方の手を額にかざし、肖像でもお描きなさるやうに、ぢつと私の顔を凝視めていらつしやいました。長い間さうしておいでなすつてから、了ひには私の手を一寸振つて、三度ほど頭をかう上げ下げしたのち身も碎け命も盡きるほどに、痛ましい深い嘆息をなさいました。それがすむと、やつと私の手を放して、肩越しに首だけ此方に向け、見ないでも道がわかるかのやうに、眼の救けをからずに出て行つてお了ひになりました。をはりまで、私を見つめたまゝ……。

ポロ。 さア、私と一緒についておいで。陛下にお目にかゝらなくてはならぬ。これこそ正銘の戀の逆上だ。凡そ天下の如何なる情念も人性を損ねぬものはないやうに、この戀の激しき情熱は身を亡ぼして了ふのみか、動もすれば心を怖ろしい企てに導く。あゝ殘念な事をした。して〳〵おまへはこの頃何かつれない事でも申上げはしなかつたか。

オフ。 いゝえ、父様、あなたのお云ひつけ通り、お手紙をつき戻して、お逢ひなさらうと云ふのをお斷りしただけですわ。

ポロ。 それが御發狂の原因だな。もつと注意もし判斷もしてあの時御様子を見なかつたのは殘念だつた。ほんの一時の戯れで、おまへを陷れようとなさるのだとばかり心配してゐたが……飛んでもない私の邪推だつた。あゝ失敗つた。とかく老人の思ひ過ごしと、若い者の無分別は世に有り勝ちだ。……さアさア陛下の處へ參らう。これは是非申上げなくちやならぬ。この儘秘めて置きでもしたら申上げて受くるお憎しみより、隱して受くる悲しみの方が、よほど大きくなるかも知れない。

（二人去る。）

第二場　城中の一室

（國王、皇后、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン、及び從者等入り來る。）

國王。 おゝよく來て呉れた、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン、今日かく取急いでおまへ達を呼び寄せたのは、久しく逢ひたいと思つてゐた上に、少し事を頼む必要があつたからだ。仄かには聞き知つたであらうが、此頃のハムレットが變りやうと云ふのは、外貌内心とも以前の俤をとゞめた跡がないのだ。あのやうに自分の理智を失ふまでに至らしめた事といふのは、父の死の外には何であらうか、私の夢想も出來ぬところだ。でおまへ方兩人へ頼みたいのは、幼ない時から一緒に育てられ、青年時代も共にゐて、氣心もよく呑み込んで居るのだから、しばらく宮廷に逗留し、ハムレットが對手となつて慰樂に誘ひ入れ、又は吾々が知らぬ事で、知つたなら療法もあらうと云ふやうな、彼が苦惱の原因を、折があつたら探つて呉れぬか。

皇后。 ねえあなたがた、彼は今迄も大變あなた方の噂をしてゐましたし、あなた方ほど彼の心の合ふ方はこの世にはきつと居りますまい。どうかしばらくこゝにとゞまつて、吾々

が望みの杖とも綱ともなつて、親切と好意の程を見せて下さいませぬか。すればあなた方の御參内は陛下の思召に適つた御禮をお受けなさいます。

ロー。 兩陛下には、吾々の上に無上の大權を持たせられ乍ら、畏れ多い御意の程を嚴命下さるのが當然でございますのに、御依頼なぞとは恐れ入ります。

ギル。 併し乍ら吾々兩人とも、仰せに從ひまして、微軀を獻じ、全力を盡して、陛下の足下に忠勤を勵み、嚴命を相待つ所存でございます。

國王。 感謝するぞ、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン。

皇后。 有難うよ、ギルデンスタアン、ローゼンクランツ。どうかそれでは今からすぐ、變り果てたあの子を見舞つてお呉れ。さア誰でも。この方々をハムレットの處へ御案内申すのだよ。

ギル。 天よ、願はくは吾々の參向と忠勤とが、皇子の嘉みする處ともなり、本復の一助ともならしめ給へ。

皇后。 おゝどうぞ神様。

（ローゼンクランツ、ギルデンスタアン數名の從者と共に去る。ポロニアス入り來る。）

ポロ。 陛下、ノルウエイへの使節どもが、喜び立ち歸りましてございます。

國王。 おまへはいつも乍ら吉報の父だな。

ポロ。 私めがでございますか。誓つて申しますする陛下。私は神明に對しましても、御皇位に對しましても、義務を守ること靈魂を守ると同樣でございます。だから探り出したやうに思ひます……でなくば私のこの頭腦はもう今迄のやうに策計の跡をも嗅ぎ出せなくなつたのです……いや確かにハムレットさま御狂氣の理由を發見いたしました。

國王。 おゝ早く話して呉れ、それこそ聞きたくてたまらぬところだ。

ポロ。 先づお先に使節の謁見をお許し下さいませ。私のしらせはその大饗の後に出る水菓子となすつたが宜しうございませう。

國王。 ではおまへからよくあしらつて、此處へ使節を連れてくるがいゝ。

（ポロニアス去る。）

ガートルードよ、今のポロニアスが話では、おまへの子が亂心の本源はすつかりわかつたさうだ。

皇后。 何だか疑はしうございます、爺の話とてもきつと父上の崩御とか、私共の早急すぎた結婚といふ位ゐが關の山でございませう。

國王。 うむ、どうだか問ひ訊して見よう。

（ポロニアスはヴォルチマンド、コォネリアスの二人を引つれ再び入り來る。）

これは皆々よく歸つて來て呉れた。ヴォルチマンドよ、さうしてあの、ノルウエイの兄弟からは何んと云うて來た。

ヴォル。 辭儀と好意を盡した最も鄭重なる御返事で御座います。はじめての謁見で、すぐさま使ひを遣はして甥の徵兵をお差止めになりました。それを王はポオランド征討のためばかりとお考へになつて居たのでしたが　詮議して見ると、陛下に對する謀反と解りまして、これ皆自らが老病不能のため、欺かれしものと御悲嘆なされ、フォオチンブラス追捕の使者を遣はされました。フォオチンブラスも遂にはその命に從ひ、ノルウエイ王より譴責を受けて、結局叔父王の前で以後陛下に對して決して干戈を動かさぬと誓ひを立てまして御座います。老ノルウエイ王にはそれを又いたく御喜びになり、年金三千クラウンを賜はり、前に驅り集めたる軍隊をポオランド征討に用ふるの許可をお與へになりました。それについての御願ひは、これに委細を認めてありますが（と書面を呈し）何卒この企てのため御領内を平和の通行御許し下さいますやう、途中に於ての安全を圖りまする條件はこの書に認めてございます。

國王。 それは頗る吾が意に適つた。間を見て篤と讀み、とくと考へてから返答しよう。まづ

それまでは兩人の骨折りに御禮を申すぞ。退つて休息するがいゝ。夜になつたら共に飲まう。ほんとによく歸つて來た。

（ヴォルチマンド、コオネリアス去る。）

ポロ。 まづ〳〵御用向も首尾よく濟みました。さて吾が君　お妃。そも〳〵君王の稜威とは何で、臣下の義務とは何か、又は何故晝は晝で、夜は夜、時は時であるかなどと論議いたしまするのは、單に夜、晝、時を空費いたしますするに過ぎませぬ。それゆゑ簡潔は智慧の心髓で、冗漫は手足又は外形の粉飾だと申しますから、私はごく手短かに申し上げます。皇子さまには御狂氣、……いかにも狂氣と私は申します。何故と云ふに眞の狂氣の定義を下しますのは、畢竟狂氣に外ならぬものゝ振舞ひではございませぬか。併しそれはそれと致しまして……。

皇后。 もつと要點を云つたらどうだね。言葉の飾りなぞよりも。

ポロ。 お妃、私は誓つて飾りなぞは毛頭致しませぬ。皇子が御狂氣、それは眞實でございます。眞實お氣の毒でございます。お氣の毒ながら眞實でございます。え、馬鹿な言ひ廻し、がもうこんな言ひ廻しはおさらばにして飾りなく申上げませう。では先づ御狂氣と假りに定めまして、さて殘る處は吾々がこの結果の原因……いや、と云ふよりはこの缺陷

の原因を發見致した儀でございます。何故といふにこの缺陷ある結果には原因がなくてはなりますまい。かやうで猶殘る處は、して又殘りはかやうでございます。お聞き下さいませ。私には一人の娘がございます。……と云つて私の手許にある限りの事ですが……それが子たる義務と從順とによりまして、御覽下さい、これを私に渡しました。どうぞよく御推量下さいませ。（と讀む。）

「天使とも思ふ吾が魂の偶像、上なく艶麗なるオフィリアの君に。」

これはわるい、まづい文句だ。「あでやかなる」はまづい文句だ。がまづお聞き下さい。あとはかうでございます。（讀む。）

「君が優れて眞白なる胸に、これらの歌を、かやう〳〵。」

皇后。 それがあの、ハムレットからオフィリアへ。

ポロ。 お妃、しばらくお待ち下さい。有體に申し上げます。（讀む。）

「星光らずとおぼすとも、
日は廻らずと思すとも、
まことを嘘と思すとも、
思すな、吾に戀なしと。

ハムレット

「おゝなつかしきオフィリアよ。われ此道につたなし。吾は字數を數へ呻く術には長ぜず。されど君を愛することのいと深く、上なく深きを信じ給へ。さらば。」

「いとも戀しき君よ、この形骸のあらん限り、おんみのものなる、ハムレットより。」

これを娘が吩咐をきいて私に渡しましたのみならず、いつ、いかにして、いづこで言ひ寄られたるかをも悉く私の耳に入りましてございます。

國王。 してオフィリアはどのやうにその戀をうけ入れたのだ。

ポロ。 陛下は私奴をどうお考へですかな。

國王。 誠忠名譽な男と。

ポロ。 その通りになりたうございます。がどうお思召されます……私がこの激しい戀の羽ばたきを見ました折……これはきつと申上げて置かなくちやなりませぬが、私は娘が打開ける前にそれと悟つて居りました……で陛下にも、又こゝにいらせらるゝ妃の宮にも、何と思召されますか……もし私が卓の抽斗か、帳簿のやうに、眼を瞑つて感ぜぬ振をし、啞のやうに默つたまゝ、この戀を看過しでも致しましたら、何と思召されます。いや〳〵私はちやんと手を廻して娘にはかう云ひました。「ハムレット殿下は畏こくも皇子さまだ。おまへとは身分が違ふ。そんなことがあつてはならぬ。」とそれから又戒めて、皇子がおいでなさる所から身を遠ざけ、お使ひを斥けて、お送り物を頂かぬよう申し附けました。それを守つて娘は忠告の旨に從ひ、而して皇子さまは撥ねつけられて……手つ取り早く申し上げますれば、……忽ち憂鬱に陷らせられ、それから斷食、それから不眠、それから衰弱、それから喪心、とだん〳〵この調子で只今の御狂亂におなりなされ、吾々一同の嘆の種となつたのでございます。

國王。 妃もさうとお思ひかな。

皇后。 ほんとにさうかとも思ひます。

ポロ。 私が進んで「かうだ」と申上げた事で、後々さうでなかつたやうな、さやうな時が一遍でもございましたら、承りたいものでございます。

國王。 私にも覺えはない。

ポロ。 (自分の頭と肩を指して)萬一にも間違ひましたら、これからこれをお取り下さい。手懸りさへございましたら、どこに眞理がかくされてあるか、たとへ地球の中央であらうとも、探し出してお目にかけます。

國王。 此上はどうして實否を試めしたものだらう。

ポロ。 御存じの通り、皇子には時々、此御廊下を幾時間となく御漫歩なされます。

皇后。 ほんとにそのとぼり歩いてゐるね。

ポロ。 そんな時に皇子の前へ娘を放ちませう。そして陛下と私とは垂帳の陰にかくれて、出會ひの様子を伺ひませう。もし娘を戀しておいでゞなく、又そのためお心が狂つてもゐないやうなら、私に補佐たる職をやめさせなすつても宜しうございます。畑一つに農車幾つといふ百姓にでもなつて了ひます。

國王。 ともかくもやつて見よう。

皇后。 したが御覽遊ばせ、あそこへ可哀さうな本人めが悄れて何か讀み乍ら來ます。

ポロ。 向うへ、どうぞおいで下さいませ。すぐさま物を問ひかけて見ませう。

（國王、皇后、從者等去る。）

（ハムレット本をよみ乍ら入り來る。）

お〻御免下さいまし。ハムレット殿下にはいかゞ渡らせられますか。

ハム。 おかげで健康だ。

ポロ。 殿下は私を御存じでいらせられますか。

ハム。 非常によく知つてゐる。魚屋だ。

ポロ。 いゝえ違ひます、殿下。

ハム。 ではあいつ位ゐ正直者であつて欲しいな。

ポロ。 正直ですつて、殿下。

ハム。 さうだよ、正直にするものは、この世の中では萬人中の一人きりだ。

ポロ。 これは眞理でございますな。

ハム。 何となれば天日とても、好んで腐肉に接吻すれば、死狗の屍に蛆をも湧かすべければなり……おまへは娘を持つてるかな。

ポロ。 持つて居ります、殿下。

ハム。 では天日にあてぬがよい。物を知るのはいゝ事だが、娘なぞといふものは餘計な事を覺えるからな。まア注意が肝腎だ。

ポロ。（傍を向いて）何を云つておいでなさるやら。まだ娘のことを思ひ込んでおいでなさる。だが初めには私が解らなくて、魚屋だと仰有つた。いやはや深く參り込んで了つたもんだな。さういへばほんとに私も若い中は戀でひどい苦勞をしたもんだ。恰度こんなもんだつたらう。もう一度言葉をかけて見よう。何を讀んでおいでゞす、殿下。

ハム。 言葉だ、言葉だ、言葉だ。

ポロ。 どんな事でございます。

ハム。 どんな事とは誰と誰が。

ポロ。 いえ、あなたのお讀みなされてゐるのはどんな事だと申すのでございます。

ハム。 誹謗だよ。口の悪い男が玆にかう云つてゐる。老人は灰白の髯を有ち、其顏は皺よりて、其眼は濃き琥珀色の梅の膩を流す。而して智慧は夥しく缺け、且つ又膝節最も弱しとある。これは悉く私も信じ切つてゐる事だが、かう眞正直に書き下すのはいけないと思ふな。何故と云ふにおまへだつて、蟹のやうに逆立をすれば、私と同じ位ゐの年頃にならうからな。

ポロ。 (傍を向いて)狂人の云ふ事だけれど、筋道が立つてゐる。殿下、ちと浮世を離れて散歩なすつては如何でございます。

ハム。 では墓の中へでも行かう。

ポロ。 ほんとうに、それこそ浮世を離れる譯ですな。(傍を向いて)時には何といふ手際のいい答をするのだらう。ともすると狂人はうまい事を云ひ當てるものだ。理窟や正氣があつてはあゝまで思ひ切つて演れやしない。では此處らでお別れをして、不意に娘と會はせる手段を講じよう。……殿下様、では畏れ乍らお暇を頂きたうございます。

ハム。 うむ、それほど遣りたくてならぬものはなかつた。……尤も私の命は別だが、命は、

命は。

ポロ。 では殿下、御機嫌よう。

ハム。 えゝ、うるさい老いぼれめ。

(ローゼンクランツ、ギルデンスタアン入り來る。)

ポロ。 ハムレット様をお尋ねかな。あすこにおいでなさる。

ロー。 (ポロニアスに)御機嫌よろしう。

(ポロニアス入る。)

ギル。 殿下さま。

ロー。 皇子さま。

ハム。 おゝ親友諸君。どうしたなギルデンスタアン、あゝローゼンクランツ。二人とも景氣はどうだ。

ロー。 世の月並な凡人並みでございます。

ギル。 幸福過ぎないといふ意味で幸福でございます。運命の女神の帽子では、吾々は頂きの釦ではございません。

ハム。 併し女神の靴の底でもなからう。

ロー。どちらでもございません。
ハム。とすると恰度女神の腰のあたりで、御恵みの中央にゐるといふ譯だな。何か面白い話はないか。
ロー。何もございません。たゞ世の中が正直になつた位ゐでございます。
ハム。では終りの日が近づいたな。併しその話は嘘だ。私にもつと微細に聞かして呉れ、一體どんな事をしたゝめに運命の神の手で、こんな牢屋へ送られたのだ。
ギル。牢屋ですつて、殿下。
ハム。デンマアクは牢屋だ。
ロー。では世界もさうでせう。
ハム。立派な牢屋だ。そこには多くの收監所もあれば、獄室もあり、穴牢もある。デンマアクはその最も悪いものゝ一つだ。
ロー。私共はさうは考へませぬ。
ハム。さうか。ではおまへ達にはさうでないのだ。一體物本來には善も悪もないのだが、思ひ做しでさうなるのだからな、私にとつても此處は牢屋だ。
ロー。それでは殿下の大望がさう思はせるのでございませう。此處はあなたのお心には狹ま

過ぎるのです。
ハム。おゝ神よ。あの悪夢さへなかつたなら、胡桃の殼に押し込められて、無限の空間を支配してゐると思ひも出來やうに。
ギル。そのお夢が即ち大望なのでございます。と云ふのは大望の實質なぞと云ふものは實に單なる夢の影でございますから。
ハム。夢其物さへ既に影ではないか。
ロー。眞實でございます。私は大望を、儚ない輕い、影の其又影のやうなものと考へます。
ハム。それならばあの乞食共が本體で、君主や遠くへ手をのばす英雄などは乞食の影なのだな。もう宮中へ歸らうぢやないか。私にはもう問答が出來なくなつて了つたから。
ロー。
ギル。
ハム。どうして〳〵。私は君たちを私の他の下僕と同じくしたくはない。正直に云ふと、私はもう怖ろしく奉侍され過ぎてゐるから。併し、友達づくで遠慮なく聞くが、エルシノオアで何をしようと云ふのだい。
ロー。殿下をお訪ねしたいため。外に仔細もございません。
ハム。私は乞食の身分だから、謝禮には乏しいけれど、それでも君たちに感謝はする。そし

てきつと私の感謝は少しは高すぎるだらうよ。君たちは迎ひを受けたのではなかつたか。好きでやつて來たのか。全く任意の訪問か。さア私を正しく扱つて呉れ。さア〳〵云つて呉れと云ふに。

ギル。どう申しあげたら宜しいでせう。

ハム。なアに何とでも……只要領をさ。君たちは呼び寄せられたのだね。君たちの顏つきにはその正直なたしなみから蔽し切れない白狀の色が見えてゐる。兩陛下から使が行つたものと見えるな。

ロー。何のためにでございます。

ハム。それを君が私に聞かして呉れるのだ。だがどうか賴む。吾々が友たるの信義により、幼ない時からの馴染甲斐や、永久變るまいと契つた友誼、又はもつと口達者な人が申し出しうるこれ以上に尊い情誼を思ふなら、包まず眞直ぐに云つて呉れ。迎ひを受けたのか、さうでないのか。

ロー。（傍のギルデンスタアンに）何と云はう。

ハム。（傍を向いて）うむ、そんなことをしても、此眼がちやんと承知しないぞ。……ほんとに私を愛するなら、隱して呉れるな。

ギル。殿下、實はお迎ひを受けました。

ハム。ではどうしてだか私は云つてやらう。さうすれば私が先廻りをした事になつておまへたちの發覺を妨げ、兩陛下へ誓つた祕密の羽が一枚も脫けぬことになる。私は此頃……どう云ふ處からか自分でも知らぬが……すべての歡樂を失ひ、あらゆる遊戲をも廢して了つた。そしてその憂愁が益々重く吾が胸を壓して來て、遂にこの地球といふ立派な組織も私には荒涼たる海角同樣に見え、この空といふ世にも美しい天蓋も、あれ、あの壯麗なる穹窿も、黃金の火を鏤めた宏壯雄大な碧落も、私には汚ない毒のある雲霧の集積する處としか見えなくなつて了つたのだ。人間は何といふ造化の傑作であらう。何といふ理智の優秀。何といふ能力の無限。姿體と云ひ動作といひ、何といふ美妙、何といふ崇高、行動はまるで天使のやう。理解は恰度神のやう。世界の粹美。動物の龜鑑。それでゐ乍ら私には、この塵埃の眞體が何であらう。人は私を歡ばしはせぬ。いや女とてもさうだ。君たちは笑ひ乍ら女ならばと云はうとしてるやうだが……。

ロー。そんな考へは微塵もございません。

ハム。ではなんで私が「人は私を歡ばしはせぬ」と云つた時笑つたのだ。

ロー。いえ、あなたが人を歡ばぬと仰有るなら、どんなみじめな接待をあの俳優共が受けよ

うかと思ひまして。吾々は道で彼等を追ひ越しました。あなたの御用に適はうと此方へ參る途中でございました。

ハム。 王の役をうまく演ずるなら歡迎してやる。その國王役者には私が貢ぎ物を取らしてやらう。冒險好きな騎士役者には劍と楯とを振るはせ、濡れ事師にも無報酬では泣かさぬ。荒事師は靜まるまで勤めさせ、道化方には指が觸つても吹き出す奴を存分笑はせ、而して女形たちは自由に心のたけを云はせる。でないと白がつかへるだらう。で、どんな役者だちだつたな。

ロー。 丁度以前に御贔屓なすつた、都の悲劇俳優でございます。

ハム。 どうした機會で旅興行をするのだらう。都に住んでゐた方が、人氣のためにも給金のためにも、どつち道よかつたらうになア。

ロー。 此頃の御改革で京の興行を禁止せられたものと見えます。

ハム。 彼等の評判は私が京に居た時分と變らぬか。相變らず人氣を持ちつゞけてゐるか。

ロー。 いゝえ、全く變りました。

ハム。 どうして變つた。もうやきが廻つたのか。

ロー。 いや、努力はいつもの調子に續けて居ります。けれども近頃は子供芝居の一座があつて、鷹の雛のやうに甲高な口跡を喚き出しそのため割れるやうな人氣をとつて居ります。それが只今の流行で、今迄のを普通芝居だなぞと惡口をいふものですから、細身の劍を佩いた方々なぞは、鵝ペンで叩かれるのを恐れて滅多に今迄の芝居へは足踏みしなくなりました。

ハム。 何に、子供役者だと。誰がその座を續けて行くのだ。給金はどの位ゐだ。そいつらは甲聲のでる間だけ商賣を續けようといふつもりか。もし別に佳い工夫がない分には、彼等だつて普通の役者にならなくちやならんだらうが……さうなつた曉に他人に云つた惡口が自分の後に廻つて來る處からして、作者どもが彼等を害なつたと苦情を云ひはしないだらうか。

ロー。 眞實、双方の爭ひが激しうございました。それを又世間が平氣で爭ひに油をかけるのでございます。だものですから一時は、詩人と俳優とが口論する處がなければ、其作の賣口がないといふ程でございました。

ハム。 そんなことがあるかしら。

ギル。 殿り合ひなんぞも隨分ございました。

ハム。 少年ども勝つたか。

ロー。えゝ勝ちました。ハアキュリイズも荷物からく〜でございます。

ハム。それも大した不思議ではない。と云ふ例には叔父上がデンマアク王になると父上の在世中は彼を侮蔑してゐた奴等まで、小さな叔父の肖像に二十、四十、五十乃至は百ダカットを投ずるやうなものだ。いやはや、これこそ哲學で探り知られるものなら、自然を超越した何かの理由があるのだらうよ。

（奥にて華やかなる喇叭の聲。）

ギル。俳優どもでございます。

ハム。いや兩君、よく此エルシノオアへおいでなすつた。さア握手を。この歡迎の附き物の流行でもあり禮式でもある。君たちとかういふ風にして置かぬと、俳優たちへの擧動が：：これは實に是非愛想よくしなくちやならないから……君たちの待遇よりもよく見えるといけないからな。いやよく來て呉れた。が叔父さんの父上叔母さんの母上も大變な誤解をされたものだ。

ルギ。何をでございます、殿下。

ハム。私の發狂は北西北だけなのだよ。南風が吹いて來れば鷹と鷺の見別けはつくのさ。

（ポロニアス入り來る。）

ポロ。これはお二方、お壯健で……。

ハム。これ〜ギルデンスタアン。おまへもローゼンクランツ。一寸耳を貸して呉れ。あのあそこにゐる大きな赤ん坊はまだ襁褓を離れないのだ。

ロー。では幸ひ二度目のに會つたのでございませう。老いては再び子に歸ると申しますから。

ハム。きつと役者の事を知らせに來たのだと思ふが、聽いてゐなよ……うむ。成程その通りだ。月曜日の朝。ほんとうにさうだつたな。

ポロ。殿下、申上げる事がございます。

ハム。殿下、申上げる事がございます。むかしロシアスが羅馬に俳優たりし頃……。

ポロ。俳優が參りました。

ハム。ぶづ、ぶづ、ぶづ。

ポロ。全くの處……。

ハム。俳優各々驢に騎して來れり……。

ポロ。世界の名優でございます。悲劇にも、喜劇にも、史劇にも、牧劇にも、牧的喜劇にも史的牧劇にも、悲史劇にも悲喜史牧劇にも、場面を變へぬ作にも、制限のない詩曲にも宜

しい。セネカ物でも重すぎないし。プラウタス物でも輕過ぎませぬ。型物でも新作でも、當分獨歩の一座でございます。

ハム。 おゝジェフタ、イスラエルの判官殿。何といふ珍寶をおまへは持つてゐるのだ。

ポロ。 どんな寶物を私が持つて居りますか。

ハム。 なアに……

「花の娘をたゞひとり。
こよなきものと愛でけるが」

ポロ。 (傍を向いて)まだ娘の事を云うてゐる。

ハム。 老ジェフタ、私のいふ通りだらうな。

ポロ。 私をジェフタと仰せらるゝならば、いかにもこよなきものと愛づる娘がございます。

ハム。 いや、さうはなるまい。

ポロ。 ではどうなります。

ハム。 なに

「天の運命か神ぞ知る。」さ。

それから、

「思はぬ事こそ起りけれ……」

あとはあの唄の初めの句を讀むがいゝ。見ろ、あそこへ私の氣をかへるものが來た。

(四五人の俳優入り來る。)

これはよく來て呉れた、師匠たち。皆よく來たな。壯健で會へたのが何より嬉しい。おゝ古馴染。おまへの顏には此前會つた時から見ると大變な髯の飾りができたな。それで私を卑下させようと思つてデンマアクに來たのか。やア娘形兼夫人役者か。女神に懸けていふが、おまへの女形振りは此前見た時よりも繼ぎ足の丈ほど天に近くなつたぞ。まア精々神に祈つて、おまへの聲が通用しない金貨のやうに輪の中に割れ目が入らぬようするがいゝぞ。師匠たち、全くみなよく來てくれた。佛蘭西の鷹匠ぢやないが、見つけた鳥なら何でも早速だ。すぐ一とせりふに致しませう。

座長。 何のせりふに致しませう。

ハム。 まだ一度も舞臺に懸けられなかつた奴で、前におまへから聽いたのがあつた。いや、舞臺に懸けたにしろ一度より上ではない。といふのは私もおぼえてゐるが、觀客受けが惡かつたからな。俗人には味のわからぬ醜鯔(カビアレ)であつた。併しそれは……私の聽いたところ、又斯道にかけては吾々が足許にも及ばぬ見巧者の評判では……よく場面も整

ひ、穩健でもあり、巧妙でもある立派な脚本だつた。まだ覺えてゐる、あの人が云うた事に、豪辭中には事件を大味にしようと思つて藥味を使つたといふやうな句もなけれア、氣取つた作者だと非難されるやうな文章もない。只正直な書き振りで、甘味もあれば藥にもなり、派手だと云ふのではなくてずつと美しい作だ、と云つた事があつた。その中でも一つ馬鹿に私の氣に入つた臺辭があつた。それはエニアスがダイドオへの物語で、とりわけプライアムの最期を語るあたりだ。まだ記憶してゐるならこの行から初めて呉れ。かうつと、かうつと……。

「荒れに荒れたるピルラスは、ヒルカニアなる獸をさながら……」

さうではない……はじめはピルラスだ。

「荒れに荒れたるピルラスは、意企も黑く手も黑く、忌々し馬腹に伏し居れば、げに烏婆玉の夜かとも、暗怖ろしきその肌に、血潮のしるし物凄し。げに頭より足までも、隈なく浴びし紅ゐは、己れが主の死にゆくを、無殘非道に照らし出す、街々の兵燹に、燒け凝りたる父や母、女の子男の子の血潮なり。怒りと火とに狂ひ立ち、かく凝血に身を塗りて、眼はさながら紅玉の、惡鬼と擬ふピルラスは、老いたる王のプライアム、何處にあると探ねたり。」

さア後を續けた。

ポロ。さて〳〵いゝ御口跡、抑揚といひ、お氣の入れ方といひ……。

座長。「やがての事に老王が、切り結べるに出會ひーが、あはれ手馴れし劍さへ、老いたる手には自由ならず、空しく打つて地に落し、あしらひ兼ねて立つたるを、兎を狙ふ荒鷲の、ピルラス颯と驅け寄りて、怒りに任せ打ち込めば　狙ひは外れて太刀風に、老いたる王は倒れ伏す。さすが非情の城砦も、此一擊にや感じけむ、焰々燃ゆる頂きは、臺下に揺と燃え落ちて、天地も碎く音響に、ピルラスしばらく耳聾ひたり。見よ　老王の白頭に、狙ひ定めて振りかざす、劍は空にとゞまりて、畫ける猛者のそれかとも、心と事を決し兼ね、何事もせで立すくむ。

「さもあらばあれ荒るゝ日に、一天しばし聲を呑み、雲は据りて風語なく、下界も死せる折ふしに、雷霆空をさつと裂く。それにさも似てピルラスは、やがて敵意を振り起し、神世のサイクロップスが、マルスのために不滅てふ、しるしの鎧鍛へたる、鐵槌にさへ劣らざる、無仁の血刀凄じく、老王めがけて打下ろす。

「にくさもにくき多淫神、運の神こそいとにくし。あはれ萬づの神々よ。集ひはかりて共共に、彼女が力を奪りたまへ。かれが持ちたる小車の、輞も輻をも打碎き、殘る轂を久方

の、天の丘より鬼住める、奈落の底へ擲ち給へ。」

ポロ。 これは少し長過ぎる。

ハム。 刈込ませるさ。おまへの髯と一緒に理髪屋へやつて。……さア〳〵續けた。これは道化節か口説き場でもなければ寢て了ふ男だ。さア〳〵つゞきはヘキュバのところだ。

座長。「さはさり乍ら人誰か。包める后を見し誰か……」

ハム。 なに「包める后。」

ポロ。 よろしい。「包める后」は宜しい。

座長。「足も露にあちこちと、驅け回りつゝ燃ゆる火も、消えよとそゝぐ涙雨に、眼も昏らむばかりにて、昨は瓔珞かゝりたる、額にあるは古襤褸。多くの御子を生みませし、その弱腰にまとへるは、恐れ驚きふためきて、只一布の毛織のみ。あゝこのさまを見し誰か、……毒に浸せる舌をもて、運命神の不法をば、罵らぬものあらさらむ。もし天上の神々も、この有様を見そなはし、かのピルラスが不仁にも、彼女の夫の手足をば、劍をふるひ切りし時、后があげし一と時の、非難に裂くる聲音には……人間界の哀傷が、いかなる神の御心も、動かさずてふ例なくば……天つ眼の火も濕り、神の御胸も痛みなん。」

ポロ。 御覽なさい。あの俳優は色をかへ、眼中には涙を湛へて居ります。……おい、もう止めて呉れぬか。

ハム。 よろしい。殘りは又やつて貰ふとしよう。ポロニアスよ。どうか俳優共をよく接待しては呉れまいか。な、彼等をよく取扱つてやるがいゝぞ。俳優は時代の粹をあらはす、短かい年代記のやうなものだ。死後の碑文は惡くかゝれようとも、生きてる中に彼等から惡く寫されぬ方がいゝぞ。

ポロ。 それ相應に扱つてやりませう。

ハム。 どうして〳〵。そんな事で足りるものか。もし人間が相應に取扱はれるなら、笞を免れうる者が一人もなからうぞ。だから彼等をおまへの身分相應に待遇して呉れ。待遇が對手の分に過ぎれば過ぎるだけ、おまへの仁慈に値が增すといふものだ。さア奥へつれて行け。

ポロ。 さアこちらへ、皆の衆。

ハム。 ついて行くがいゝ、友人。明日は一と芝居見せて貰ふぞ。（ポロニアスについて座長の外皆入る）……おい〳〵師匠。「ゴンザゴ殺し」を演つて呉れられるかな。

座長。 はい。出來ます。

ハム。 では明日の晩演じて十二行乃至十六行程の臺辭を私が書き下ろし

て入れようと思ふが、覺えて呉れるだらうか。どうだな。

座長。はい。畏りました。

ハム。よし〳〵。ではあれに從ひて行くがいゝ。しかし弄り物にしちゃ不可んぞ。（座長去る）……さて諸君、晩になつたら又會はう。よくエルシノオアへ來て呉れた。

ロー。殿下、さやうならば……。

ハム。うむ、さやうなら。

（ローゼンクランツとギルデンスタアン入る。）

今こそは私一人だ。おゝ何といふ無頼な農奴だらう私は。さても〳〵奇怪ではないか。今のあの俳優が、只假りそめの造り事だのに、情熱の夢に浮かされ、吾れとわが心の底まで感動させ、そのため顏は蒼ざめて、眼には涙、面持には狂態、聲は途斷れて、一擧手一投足の末まで、悉く其の人の心を的確に表はすとは。しかもそれは何のためでもないのだ。ヘキュバのためだと。かくまで歎き狂ふ彼にとつてヘキュバは何者だ、又ヘキュバにとつて彼れは何者だ。彼れに吾が有つ大悲憤の動機と緣由があつたら、どうしたであらう。涙を以て舞臺を溺らせ、怖ろしい臺辭を以て觀客の耳をつんざき、身に暗き處ある者を狂せしめ、晴天白日の者をも怖れしめ、無智な者をば迷はせ、實にありとある眼と耳の動作をくら

ますに違ひない。然るに私はどうだ。魯鈍愚昧の横道者で、悄然と、夢介ジョンのやうに、十分の理由を持ち乍ら、何一つ云ひ得ないのだ、その王權も何より貴重な生命も悉く奸賊のために失つた父、故王のためにすら何も出來ないのだ。私は卑怯者か。私を惡漢と呼ぶのは誰だ。私の頭蓋を叩き割り、我が髯をむしり取つて面上に打ちつけ、鼻柱を引ねぢつて、喉ばかりか肺臟まで虚構で滿したのは誰だ。一體どこの誰だ。や、畜生殘念。が全くその通りだ。成程私は鳩のやうに、壓制を受けても怒るだけの意地がない。でなくばとうにあの奴隷奴が腐肉で、國中の鳶の腸を肥やして居るべき筈だ。おのれ非道邪淫の惡漢、殘虐無道不倫背理の大惡漢め。おゝ復讐。いやはや私は又何たる大呆子。ほんとに御立派なこつた。現在殺された父の子として、天上からも地下からも復讐を促され乍ら、娼婦のやうに口先きばかりで鬱憤をのべたて、只はしたなく罵り呪つて、恰度夢女と同じ事だ。この賤婦め。馬鹿。阿呆。働かぬかこの腦め。聞けば罪ある輩が、曾て演劇を見物したが餘りに巧みな筋立に心を打たれて、卽座に罪狀を自白したさうぢやないか。まこと人殺しに舌はなくつても、不思議な方法でいつかはわかる。俳優どもに云ひつけて、叔父の前で何か吾が父の死に似た物を演ぜしめ、彼の顏色に目をつけて、窮所に探りを入れて見よう。もしびくとでもする事なら、私のとる道はわかつてゐる。私の見たあの亡靈は、惡魔

でないとも限らない。惡魔は好ましい姿をかりて出ると云ふ。或ひは恐らく心身の衰弱か、又は此頃の憂愁から、そんな心持には惡魔が乘じ易いさうだから、私を謀つて亡すのかも知れない。もつと確かな證據が欲しい。この演劇こそは王の本心をさぐる唯一の手段だ。

（去る。）

第三幕

第一場　城内の一室

（國王、皇后、ポロニアス、オフィリア、ローゼンクランツ、及びギルデンスタアン入り來る。）

國王。 ではどんなに遠廻しに尋ねても、何故かく精神錯亂し、安靜に暮らさるべき日を騷々しく、危ふげに狂ひ激するか、仔細を聞き出す事ができないのだな。

ローゼ。 御自身でも異狀を感じて居ると仰有いますが、どういふ譯でか決してお話しなさいませぬ。

ギル。 それにお探り申し上げるのを好まぬらしく、いろ〳〵本心をお吐かせ申さうとすると、お巧みな狂ひ言葉で、高飛車にお外しなさいます。

皇后。 あなた方への應接はようございましたか。

ローゼ。 極めて紳士らしうございました。

ギル。 併し大變氣の進まないのを強ひてなさるやうでございました。

ロー。お話はお嫌ひなさいましたが、私どもの間には明快な御答を下さいました。

皇后。何か遊樂でも勧めて下さいましたか。

ロー。皇后陛下、さやうでございます。偶然途中である俳優共を追ひ越しましたので、それを申上げましたところ、それを聞いて何となくお喜びなされた樣子でした。彼等は既に來着いたし、もう今夜は御前で何か演ずるよう御仰せを受けたやうでございます。

ポロ。その通りでございます。して皇子には兩陛下の御台覽を願ひ度れよと、私にお頼みでございました。

國王。喜んで見よう。あれがそんな氣に向いたと聞いて非常に滿足した。兩人には尙ほ此上彼が氣をはき〳〵させ、心をひき立てゝ慰樂に向はして貰ひたい。

ロー。畏りましてございます。

（ローゼンクランツ、ギルデンスタアン去る。）

國王。ガートルードよ。おまへも暫らく座をはづしておくれ。偶然のやうにしてオフィリアと會はせるため、今内々ハムレットを呼び寄せにやつたのだから。ポロオニアスと此私とが、法律上正當な諜者となり、隱れてゐて樣子を伺ひ、彼等の出會ひをよく判斷し、此頃彼が煩へるは、戀の病かさうでないか、擧動で見きはめをつけようといふのだ。

皇后。御仰せに從ひませう。それでねえオフィリア。妾はおまへのその艶美がハムレットの悶えの種であるように祈つてゐるのだよ。さうならおまへの優しい氣立で正氣に復らせてお呉れだらうし、お終ひには二人の譽れともなるのだからね。

オフ。お妃さま。ほんとにさうであればよろしうございます。

（皇后去る。）

ポロ。オフィリアよ。おまへはこゝらを歩いてゐるのだよ。……憚り乍ら陛下。物蔭に隱れませう……（オフィリアに）此本を讀んでゐなさうしてゐれば一人でゐても怪しくは見えまい。吾々人間はよくかうした不埒をするものだなア。……これがその十二分の證據になり過ぎるわい……信心深い面付と敬虔らしい行ひとで、心の惡魔にうまくころもをかけるとは。

國王。（傍を向いて）おゝ全くその通りだ。何といふ鋭い笞で今の言葉が私の良心を打つことだらう。塗り立てゝ美しい娼婦の頰が、塗り飾る紅白粉に比べて汚ないより、私の行爲が飾り立てた言葉に比べての穢なさが猶まさつてゐる。おゝ罪の重荷……。

ポロ。おいでなすつたやうでございます。さア入りませう。

（國王とポロニアス去る。）

（ハムレット入り来る。）

ハム。 生か死か……それが問題だ。無情な運命の矢彈をうけても、心にぢつと堪らへるのが男子か。或は海の如き艱難を迎へ撃つて、戰つて根を斷つが男子か。だとは……眠ること。只それに過ぎぬ。眠つて心の痛みが去り、此肉に附き纏ふ幾千の苦みがなくなるならば、それこそ此上なく願はしい終焉だがなあ。死とは、眠ること。眠るとは、恐らく夢を見ることだらう。……さうだそこに障碍がある。その醒めぬ死の眠りの中に、この形骸の煩累を盡く脱した時、どんな夢が起るだらう。それが吾々に躊躇を與へる。現世の禍厄をわれから永びかすのもこの點からばかり。でなければ、短刀の只一突でこの世を易々去られるものを、誰がおめ〳〵世の凌辱を忍んでゐよう。誰が壓制者の非道、驕る奴等の横柄、成らぬ戀の悲痛、法律の緩漫、官吏の尊大、忍べばつけ上つて優者に與ふる小人の無禮なんぞを忍んでゐよう。死後の危惧さへなくば、この厭な世の下に呻き且つ汗を流して、誰が重荷を負うて行かう。そこからは曾て一人の旅人も歸つて來なかつた未知の國、それが吾吾の心をまどはせ、吾々をして、知らぬ他國に遁げゆくより、現在の苦を忍ばしめるのだ。かく先づこの良心は吾々を皆怯懦にし、かくて決心の本來の色は思慮の蒼白い投影に白らちやけ、如何なる大事の企圖もこの考慮に流れを換へて、實行の名を失ふに至る。……

……いやもう默れよ、あれは美しきオフィリアだな。……妖女神よ。わが罪の御許しも祈り添へて呉れ。

オフ。 皇子さま、この頃はいかゞでございます。

ハム。 いや有難う。健康だ、健康だ、健康だ。

オフ。 あのお記念の品を、いつかお返し申さうと思つてゐました。どうかお受取り下さいませ。

ハム。 いや受けとらぬ。私は何もおまへにやつた覺えがない。

オフ。 皇子さま、でも私は賜はつたのをよく覺えて居ります。さうして一緒に、お品がもつと美しくなるやうな嬉しいお言葉が添うてありましたが、その香も失せましたから、お取り遊ばして下さいまし。いかに貴い賜物でも贈つて下さる方の眞心が添はねば操ある者には價なく思はれます。さアどうぞ……。

ハム。 はゝゝゝ。おまへは貞女か。

オフ。 え。

ハム。 美人かよ。

オフ。 何んでそんなことを仰有ります。

ハム。 なに、おまへが貞女でそして美人なら、その貞女と美人とは親しい交りを結ばせぬがよいと云ふのさ。

オフ。 でも美人と貞女とは此上ない佳い朋友ではございませぬか。

ハム。 いやはやとんでもない。何故つて、操を淫らに墮す美の力は強いけれど、美を引き立てる操の力はそれに比べると極めて弱いからな。これは昔しは奇警語だつたが、今はちやんと例證があるのだ。私も昔はおまへを愛してゐた。

オフ。 ほんに私もさう信じて居りました。

ハム。 さう信じたのはおまへの間違ひ。德はいくらこの朽木に接いでも、わるい臺木の匂ひはぬけないからな。私はおまへを戀してはゐなかつた。

オフ。 では大變な思ひ違ひをしてゐました。

ハム。 おまへは尼寺へ行け。どうして罪作りを育てようとするのだ。私は可成りの正直者だが、それでも母上が生んで吳れなかつたらと怨む程の罪多い身だ。傲慢で、復仇心强く、野心滿々としてゐて自分で許しさへすれば、どんな事もし兼ねない。只それに筋道を立てる思案と、形を與へる想像と、實行する時期がないばかりなのだ。天地の間を徇匂する俺のやうな奴に何ができるものか。吾々は皆怖ろしい惡漢だ。誰をも信じてはならない。だから尼寺へ行くがいゝ。父上はどこにゐるな。

オフ。 邸に居りますわ。

ハム。 では閉ぢ込めて置くがいゝ、吾家でもない所で莫迦な眞似をやらぬやうにな。さよなら。

オフ。 おゝ神様、皇子さまをお救ひ下さいませ。

ハム。 もしおまへが結婚でもするといふなら、祝儀物の代りにこの呪詛を遺はすぞ。汝氷の如く清淨たりとも、雪の如く純潔たりとも、世の誹謗を免れざるべし……だ。さア尼寺へ行け。さよなら。又はどうしても嫁入りがしたいなら、莫迦と結婚するがいゝ。何故といつて賢い男は、おまへたちが彼等をどんな角の生えた化物にするかよく御存知だらうからな。尼寺へ行けよ。一時も早く。ではさらばだ。

オフ。 おゝ神々、皇子を元に復らせて下さいませ。

ハム。 私はおまへたちの粉粧をすつかり聞いて知つてゐる。神はおまへに一つ顏を下すつた、それをおまへは別なものにしてゐる。跳る。しなをする。甘える。神の作物に渾名をつける。淫逸を無知にかづける。もうやめだ、我慢ができない。それが私を狂氣にして了つた。きつと云つて置くが、もう結婚は誰にもさせぬぞ。もう結婚したものは、たつた一

組のだけ許して置く。あとは今の獨りのまゝで世を送らせる。尼寺へ行けよ。

（ハムレット去る。）

オフ。 おゝ、たぐひもなく氣高いお心の何といふ變りやう。おゝ貴紳の眼、武士の劍、博士の辯を持つて、御國の希望、花とうたはれ、風流の鑑、容儀の型、萬人の範と崇めさせられたのに、もう、すつかりだめ。それになまじひ彼の君から音樂のやうな誓ひの蜜を吸ひとつたゝめ、私こそ女子の中で一番の不幸者。あの氣高い秀れたお心が、玲瓏と鳴る鈴の俄かに荒い音を出したやう、調子を外して鳴り噪ぐのを見參らせ、たぐひもない花の盛りのお姿が、狂亂の嵐に散りゆくのをまのあたり。おゝ何といふ因果だらう。ありし昔を見た眼で、今のすがたを見ようとは。

（國王とポロニアス入り來る。）

國王。 戀だと。いや〳〵あれの心はそんな方へは向いてゐもしなければ、又彼の云つた事も、少しは形ちが缺けてはゐるが、狂氣のやうでもない。何ごとか心中に蟠つて、その上に彼の憂鬱が抱卵れてゐるのだ。やがてそれが孵化り、あらはるゝやうになつたら、危險なものになるかもしれぬ。それを沮めるために私は早速の決心で定めた。急いで彼を英國へ送り、怠つた貢を促さしめることにしよう。恐らく異國の山川風物は、そのためあゝま

で心を亂す、胸に蟠つた悶を追ひやつてしまふだらう。おまへの意見はどうだ。

ポロ。 それは宜しうございませう。併しまだ私は御煩悶の根本起源を、やはり叶はなかつた戀より發したものと信じて居ります。どうだなオフィリア。皇子の仰せられた事は改めて云はなくともよい。すつかり聞いた。……陛下、御意の通りになさいませ。併し御異論がなくば、演劇の果てました後で、御母后お一人にてお會ひなされ、惱みの仔細をお尋ねになつたら如何でございます。お妃立入つて御尋ねあらば、御意に從ひ、私もひそかに御懇談を立聽き致しませう。お妃に打開けなさらずば、英國へお遣しなさるなり、御賢慮のまに〳〵、いづこへなりと御幽閉なさるが宜しうございます。

國王。 ではさうするとしよう。位高き者の亂心は打棄てゝ置けぬわい。

（皆々去る。）

第二場　城内の廣間

（ハムレットと俳優等入り來る。）

ハム。 臺辭はどうか私の今やつたやうな調子にすら〳〵と言ひ廻して貰ひたい。おまへ方俳優たちによくある、あのわざとらしい白廻しを聽く位ゐなら、寧ろ廣告屋に喋らした方が

まいだ。それに又手でかう徒らに空を切つてはいけない。すべて所作はしつとりとやるのだ。たとへ情の激した急潭、暴風、或ひはいはゞ旋風といふやうな場合でも、必ず程を失はないように心掛けて、ふくらみをつけなければならぬ。おゝ、私はあの荒事師どもが、埒もない默劇や騒ぎ場の外は大抵何もわからぬ大向を喜ばせたいばかりに、荒れ廻り喚き立てるのを聞くと、迚も辛抱がし切れない。暴風神を過ごしたり、暴君を演じ過ごしたりする役者を見ると、鞭で叩いてやりたくなる。だからどうか、あれだけはよしてくれ。

座長。長りましてございます。

ハム。と云うて柔か過ぎても困る。がそこは銘々に自分の思慮を師とし、とりわけ注意して、自然の程合を過さぬよう、科介に臺辭を、臺辭に科介を合せるがいゝ。總じて演過すといふのは演劇の本旨に外れるものだ。演劇の目的は昔も今も變りなく、いはゞ自然に對して鏡をさゝげるのにあるのだからな。即ち人徳それ〴〵の相を示し、その假りの像を嗤ひ、時代世相の眞の形象を寫すのが本旨だ。だからこの演過ごしも、演足らずも、初心の見物を興じさせるかもしらんが、見巧者を泣かすことはできない。その見巧者たつた一人の評こそ、他の棧敷中の客よりも重く思はなくちやならないのだ。然るにともすると私の見た芝居の中には、他人の評判は相應にありながら、ある人物に扮しても、基督教を信ずる人の聲とも、擧動とも思はれぬ程に、異教徒か夷狄めいた奔舞叫喚を極めて、恐らくはこれ造化翁の雇人が作つた出來損なひの人間ぢやあるまいかと思はるゝ位ゐひどい俳優もあつた。

座長。私共はその邊を大に改めたい心掛けでございます。

ハム。おゝすつかり改めるがいゝ。それから道化を演じる者には定めの臺辭の外云はしてはならぬぞ。やゝもすると必要な本筋を毀すのを考へないで、無知な見物を笑はすため、自分で莫迦笑ひをする奴があるものだからな。わるい癖だ。そんな事をしたがるのは、阿呆の果敢ない野心を出すといふものだ。さア行つて準備をしろ。

（俳優等去る。）

（ポロニアス、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン入り來る。）

どうだつたな。王は芝居を御台覽なさるだらうな。

ポロ。お妃も御覽なされます。直ぐさまおいでゞございます。

ハム。俳優どもを急がせて呉れ。

（ポロニアス入る。）

君たちも手傳つて俳優をせき立てゝ呉れまいか。

ロオ。
ギル。　畏りました。

（ロオゼンクランツ、ギルデンスタアン去る。）

ハム。おいおい。ホレエシオ。

（ホレエシオ入り來る。）

ホレ。殿下、何でございます。

ハム。ホレエシオ。おまへこそは私が交際つた人の中で眞正の人間だ。

ホレ。これはしたり。

ハム。いや、諛らひをいふと思ふな。高潔な精神の外には、食ふにも衣るにも收入のないおまへから、何の推擧を望むものか。貧者が諛はれる譯がないぢやないか。砂糖をからんだ甘舌には富貴に驕る愚人を舐めさせ、蝶番の自在な膝は諛つて酬いのある所へ曲げるがいい。解つたらうな。私の貴い精神が物を選り別ける主人となり、人を見分ける能力を得てからと云ふもの、彼の選擇は自らおまへの上に極印をつけたのだ。といふのはおまへはどんな苦みを受けても受けた樣子がなく、運命の賞罰を等しく甘んじて受けてゐるからだ。あゝあの運命の神の指に弄ばれて、心にもない音を出す笛とは違ひ血氣と分別とを程よく兼ね備へた人は幸福だ。情の奴隷とならぬ男を私に呉れ。さうしたら私はそれを心臓の中央に、いや胸の胸の奥底に、おまへと同じく安置しておかう。これは餘計な事を云つて了つた。今宵は王の前で演劇があるが、その一場はかねて私が話した父上の最後のさまによく似てゐるのだ。で幕が開いたら、魂を凝らして、叔父上の樣子を窺つて呉れ。もし彼の隱匿した惡事が、一と白の中にも現はれなかつたら、此間見た亡靈は惡魔で、私の想像はヴアルカンの鍛砧ほどに穢苦るしいのだ。氣を附けて見てゐて呉れ。私も彼の顏から眼を離さずにゐて、後に二人が所見を照らし合せ王の樣子を裁斷しよう。

ホレ。宜しうございます。演劇の最中王が何等か吾々の眼を盗ませられ、注意をのがるゝやうな事でも御座いましたら、私がきつとその償を致します。

ハム。もう皆が見物に此方に來る樣子だ。私はそらとぼけてゐなくちやならぬ。おまへはい い席をとつて置けよ。

（丁抹行進曲。華やかなる喇叭。國王、皇后、ポロニアス、オフイリア、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン其外の人々入り來る。）

國王。ハムレット、どうして暮らしてゐるな。

ハム。頗る結構に、まつたくです。カメレオンの食事と同樣空氣ばかり食つてゐます。空約束とも云ひます。鷄だつてかうしては飼はれますまい。

國王。 さて〳〵解らぬ事を云ふな。それは私への返事ではないぞ。

ハム。 いや、私のでもございません。（ポロニアスに）ポロニアス殿。おまへさんは昔大學で演劇をした事があると云うたな。

ポロ。 致しました。しかも名優の一人に數へられました。

ハム。 どんな役を演つたのだ。

ポロ。 ジュリアス・シイザアに扮しまして、議事室で殺されました。ブルタスが殺したのでございます。

ハム。 なに嚙み取る。嚙み取つて殺すとはぶるぶるとする程怖ろしい役だな。俳優どもの用意はいゝか。

ロー。 はい殿下、お指圖を待つばかりでございます。

皇后。 ハムレットや。こゝへ來て私の傍に坐らぬかえ。

ハム。 いゝえ母上、こゝにもつと引力の強い金屬がございます。

（オフィリアの傍へよる。）

ポロ。 （王に）おやおや、あれを御覽下さいまし。

ハム。 オフィリア、どうかおまへの裳裾を一寸かしてお呉れ。

（オフィリアの足許に身を横たへる。）

オフ。 あらまア、皇子さま。

ハム。 なに一寸裳裾へ頭をのせるだけだよ。

オフ。 さう。

ハム。 下卑た事でもすると思つたのかい。

オフ。 いゝえ、何とも思ひませんわ。

ハム。 少女の足の間に坐るなぞはほんとにいゝ思ひつきだな。

オフ。 何を仰有いますの。

ハム。 何でもないのさ。

オフ。 大變御愉快さうですわ。

ハム。 誰が。私がかい。

オフ。 えゝ、さうですわ。

ハム。 さうとも。ほんにおまへの戯れ歌作者だもの。愉快でなくてどうしよう。だがまア御覽、母上が何んて嬉しさうな御樣子をしてゐるだらう。父上が死んでまだ二た時だのに。

オフ。 いゝえもう二た月を二つもたつて居りますわ。

ハム。 そんなになるかな。いやそんなら黒服は惡魔にやつて了へ、私は貂の皮衣でも着ると
しよう。おゝ天よ。二た月も前に死んで、まだ忘れぬとは。では偉らい人の記憶は、死ん
で半年は保つと見える。併しきつと寺でも建てなかつたら、ぼく〳〵馬のやうにすてられ
る事だらうよ。その馬の碑文はかうだ。「あはれ見よ〳〵、ぼく〳〵馬は、遂に忘られ果
てにけり」だ。

（木笛を吹く。默劇役者入り來る。）

演劇の國王と王妃と睦まじげに抱擁し合ひて出で來る。妃は跪いて何か王に物云ふ介を
する。王は妃を扶け起し、その頭に己が頭をもたせかける。それから草花の咲き亂れた
堤に身を横へる。妃は王の眠れるを見て出でゆく。そこに一人の男來り、王の金冠をと
りて之に接吻し、王の耳に毒藥を注いで去る。妃再び入り來り、王の死せるを見て悲し
む科介をする。毒殺人は二三の默優をつれて入り來り、妃と共に悲しむふりをなす。死
骸は運び去らる。毒殺人は贈り物を以て妃を口説く。妃はしばらく嫌つてゐる樣子だつ
たが、遂に彼の戀を承知する。退場。

オフ。 あれは何ういふ意味でございますの。殿下。

ハム。 なアに、あれは祕密の惡計……わるだくみと云ふ事さ。

オフ。 あの身振りが芝居の筋でございますか。

（序詞役入り來る。）

ハム。 此奴が知らして呉れるだらう。俳優共は隱してる事が出來ないものだ。みんな喋つ
て了ふ。

オフ。 今の身振りの說明をするのでございますか。

ハム。 うむ。どんな身振でもおまへがして見せさへすれば說明するよ。見せるのを恥づか
しがらなければ、どんな說明も恥ぢない奴だ。

オフ。 又そんな無理ばかり仰有います。わたしもう芝居ばかり見て居りますわ。

序詞役。吾々のため、また吾々が悲劇のため、玆に寬仁なる方々のお前にひれ伏し、しば
しの御靜聽を願ひ上げ奉る。（退場）

ハム。 これが序詞か、指輪の銘か。

オム。 ほんとに短かうございますこと。

ハム。 まるで女の戀のやうにな。

（王と妃に扮したる二人の俳優入り來る。）

劇中王。愛は吾等が心と心を、ハメメン神は吾等が手と手とを、いとも淨き緣の糸もてつ

なぎ合せてより、日の神フエエバスの車は、ネプチユウン神の海路と、テラス神の圃なす陸路を三十度まで廻り、又三十たびを十二まで重ねたる月は借りたる光もあさやかに、十二たびを三十まで重ねて此世界をば照らしたり。

劇中妃。吾等が戀の果てん迄は、日も月も又さばかりに長き旅路を數へしめなむ。されど悲しや君がこの頃の病ひ、昔にかはる悲愁のありさまに、吾はひたすら君をきづかふ。されどきづかふとて心を惱まし給ふな、女の愛と憂ひとは同じ量あるが常にして、或時は共に無く、ある時は際限もなし。吾が君を戀ふ眞情は、君も證しを知らるゝ筈。その眞情の深ければ、吾がきづかひも深うなる。愛大いなる處には、僅かの疑ひも憂ひとなり、僅かの憂增すところに、大いなる愛もあらうもの。

劇中王。いな吾が戀しの妃、吾はおん身を殘して、遠からずこの世を去り、わが活力の毒へてそのはたらきはやがてやまむ。おんみは美はしきこの世に永へて、尊まれ慈しまれ給へ。また賴もしき人あらば、後の夫とも……。

劇中妃。餘れる言の葉のたまふな。さるこゝろわが胸にあらば、それこそ不貞の二た心、二度の夫には呪ひあれ。先の夫を殺す程の女ならでは二夫にまみえじ。

ハム。（傍を向いて）耳に痛いぞ、耳に痛いぞ。

劇中妃。又の婚姻を思ふ心は、戀にはあらで、利慾の下念。後の夫に帳中にて仇し口づけ許すときは、先の夫を改めて殺すに同じふるまひなるを。

劇中王。おん身が言葉と心とは、變りあらじと信ずれども、決心を破るは人の常。志望は記憶の奴隷にして、生るゝ時は勢猛く、生ひ立つことは覺束なし。恰も熟れぬ木の實のごと、初めはしかと木につけど、熟せば振らずも地に落つる。己が心に負へる債務を、己れになすを忘るゝは必然。情の激して思ひ立たする事は、情終ると共に思ひ立ちも消え、喜びにまかせ悲しみにまかせ、情に驅られて定めし事は、皆それ〳〵に自ら亡ぶ。喜び極まる所に悲み極まり、悲喜立どころに地を變ふる。人生は無常、吾々の戀も利運と共に轉々するに何の不思議かこれあらん。愛と利と、いづれを先にし後にすべきかは未だ解き得ぬ疑問なれば。偉人死すれば寵兒も逃げ去り、貧者も時めけば敵も友となる。利は先にして愛は後なり。富むときは友に事缺かねど、事缺きて友を求めなば、友もたちまちに敵とならん。さもあれ今は立ち戻つて、順序正しく申さんに、志と運命とは背きやすく、人の計畫は常に破る。吾々が思念は吾が物なれど、その成行は吾が物ならず。今こそ二夫に見えずとも思へ、おんみが初めの夫死なば、自づと思ひも移り行かむ。

劇中妃。さることあらば地も食を、天も光を賜はるな。日も又夜も慰樂と、休息を吾れに

禁じ給へ。頼みも望みも盡き果てよ。獄屋に於ける隱者の暮らしがせめて吾が身の希望となれよ。喜びの色を奪ふてふ、不幸よ來りてありとある吾がよき事を滅ぼせよ。この世にも又あの世にも、身に禍災のまとへかし。もし吾れ君を失うて、二度人妻となりもせば。

ハム。 もしあれを破つたならなア。

劇中王。さては深くも誓はれしな。いとしのものよ、しばしの程はこの儘に吾を殘して去りたまへ。心氣倦るくなりぬれば、假寢に永き日を消さむ。

（王眠る。）

劇中妃。眠に心休ませられよ、ゆめ災禍よ心なく吾等が上には來らされ。

（妃去る。）

ハム。 母上。お氣に入りましたか。

皇后。 劇があまり誓ひ過ぎたとわたしや思ふよ。

ハム。 いや、云つた事は守りませう。

國王。 この筋立を知つておいでか。何も差支へはあるまいな。

ハム。 いえいえ。ほんの戯れです。戯れに毒殺するだけの事です。毛頭差障りはありません。

國王。 何といふ外題だな。

ハム。 鼠崑。いやはやどうして。比喩ですよ。この芝居はウインナであつた殺害を脚色したのです。ゴンザゴといふのが太公の名で、妻がバプチスタ。すぐお解りになりますが、怖ろしい悪事の話、しかしそれが何です。陛下にせよ吾々にせよ、明るい心を持つてゐる者には、さし障りのない事です。脛に傷もつ馬こそ跳ぬれ、こちの脊骨は痛みやせぬ……

（ルシアナスに扮したる俳優入り來る。）

あれがルシアナスといふ奴で、王の甥です。

オフ。 あなたさまは筋語役のやうに、よく御存知でございますこと。

ハム。 さうさ、ぢやらつく操人形を見たゞけでも、おまへとおまへの戀人との仲を見事に說き明かして見せるぞ。

オフ。 まア善かつたり悪るかつたり。

ハム。 さう云つて夫を取らなくちやなるまい。まア人殺し、初めろ。痘瘡面、そのみともない面をやめて、取りかゝれ。さア、「凶事知らす烏めも、怨みを晴らせと啼き立つる……」

ルシアナス。心も黑く、手も凄く、藥も强く、時も好し。折よくかたへに人もなし、汝眞夜中の闇に摘み、三たび魔王の呪咀に萎れ、三度毒氣に染みし臭汁。その恐ろしき天

然の、魔力を以て健かなる命も即刻奪ひ去れ。

（眠れる王の耳に毒藥をそゝぐ。）

ハム。 彼奴は王位が欲しさに園中で王を毒殺するのだ。王の名はゴンザゴ、話は實錄で、巧妙なイタリー語で書かれてある。殺した彼奴が妃をどうして騙らし込むかはもうすぐわかるだらう。

オフ。 あれ王樣がお起ちなさいます。

ハム。 なに、嘘の火に驚いてか。

皇后。 どう遊ばされました、吾が君。

ポロ。 芝居をやめろ。

國王。 燭火を持つて來い。あつちへ。

皆々。 燭火だ、燭火だ、燭火だ。

（ハムレットとホレエシオの外皆入る。）

ハム。 「手負ひの鹿は泣きゆけど、
脛に傷なき鹿は舞ふ。
眠るもあれば眠らぬも

あるがこの世の態ならめ。」

どうだホレエシオ。これで一束の羽飾と、プロヴァンスの薔薇の二つもつけたなら……私の運命がどう變らうと……俳優仲間の株が持てよう。

ホレ。 半株位ぬのところは。

ハム。 いや全一株さ。

「知らずやおん身デエモンよ。
ジョオヴの神の御位も
奪はれて今の玉座には、
まことやまこと……孔雀のみ。」

ホレ。 では、韻をお踏みなさいまし。

ハム。 おゝホレエシオ。私は亡靈の言葉を千磅にも買ふぞ。見屆けたか。

ホレ。 よく見屆けました。

ハム。 毒殺の話になつた時。

ホレ。 正しく見屆けました。

ハム。 あゝ、さう。さア〳〵音樂だ。笛を持つて來い。

「陛下狂言をお嫌ひならば、
いやさ嫌ふも御道理。」
さア〳〵音樂だ。
（ローセンクランツ、ギルデンスタアン再び入り來る。）
ギル。殿下、一言申し上げたい儀がございます。
ハム。なアに全卷を云ふがいゝ。
ギル。陛下が……
ハム。うむ、陛下がどうなすつた。
ギル。お奥に入らせられて大變御不快な樣子でございます。
ハム。御酒のせゐでか。
ギル。いや、御怒氣のせゐでございます。
ハム。では侍醫にお知らせなすつた方が御怜悧ではなかつたらうか。なまじひ吾々の配劑では、もつと御怒氣を增すばかりだらうから。
ギル。殿下、どうぞさやうな埒もない事を仰有つて、私の申上げる用向をお外らし下さいますな。

ハム。ではおとなしくしよう。言ひ給へ。
ギル。御妃、御母上樣には、いたく御心痛遊ばされて、私をお遣しになりました。
ハム。それは〳〵よく御いでなされた。
ギル。いやとんでもない御冗談。御正氣で御返事下さいますならば、母上樣のお仰せを申述べませう、がさなくばもうお暇を願ひたうございます。
ハム。と云つたつて私には出來ない。
ギル。何がでございます。
ハム。おまへに正氣な答をする事がさ。私の智慧が狂つてるんだもの。しかし彼ができる返事なら、おまへの云ふまゝ、いや母上のお仰せのまゝだ。だからもう肝腎の用事を言ひたまへ。私の母が……と云つたね。
ロー。では母君のお仰せとは、かうでございます。あなたの今晩の御振舞はいたく母君を驚嘆させなさいまして。
ハム。おゝ何といふ驚いた息子だ。母をそれほどまでに驚嘆させるとは。併し、その驚嘆のあとの文句はないのか。え。
ロー。お眠みになる前に、御部屋であなたと御懇談いたしたいとの仰せでございます。

ハム。 宜しい。母上が十倍の母上であつた程にも命に從ふと云うて呉れ給へ。この上もう取引はないかね。

ロー。 殿下、あなたは曾て私に友愛を下すつた事がございます。

ハム。 今でも變りはない。この兩手にかけて云ふ。

ロー。 では伺ひますが、この御惱みの因は何でございますか。友人とお思召し乍ら私共にお包みなさるのは、御自身でお身の自由に門戸を構へるものと存ぜられます。

ハム。 實は出世の道がないからさ。

ロー。 どうしてそんな事がございませう。現に陛下のお聲がゝりでデンマアクの皇位を御繼承遊ばす御身でありながら。

ハム。 それはさうだが、「草が伸びる間に」……いやこの諺ももう陳腐だ。

（俳優ら笛を携へて入り來る。）

おゝ笛だな。一つ呉れ。（ギルデンスタアンに）まア此方へ來て呉れ。何だつて一體君たちは僕の風上へ廻つて、艮へでも追ひ込まうとしてゐるのだい。

ギル。 おゝ殿下。萬一私の御奉公が厚顏すぎましたら、私のあなたを思ふ赤誠の餘りに出づる無作法でございます。

ハム。 何の事だか私にはよく解らない。が、この笛を一つ吹いて呉れないかな。

ギル。 私には吹けませぬ。

ハム。 賴むから吹いて呉れ。

ギル。 全く以て吹けませぬ。

ハム。 手を合はして願ふと云ふに。

ギル。 でも手の附けやうさへ知りませんから。

ハム。 なに嘘をつくやうに容易しい。指と親指とでこの孔を塞ぎ、口から息を吹き込みさへすれば、嘲哢たる音色が流れ出るよ。見たまへ、こゝが歌口だ。

ギル。 ですが私には佳い調子を出すように扱ふことができませぬ。手心を心得てゐませんから。

ハム。 おや〳〵。ぢや君らは私を笛にも劣る代物にして呉れるのだな。君たちは私に音を出させようとした。私は歌口を知らうとした。心の奥祕をさぐらうとした。最も低い音色から私の音區の頂上まであらゆる音を聞かうとした。この笛一管は小さくとも豐富な音樂もあれば美妙な聲音もある。それだのに君たちは鳴らし得ぬといふ。そんなら私を笛より鳴らし易いと見たのか。私をどんな樂器にしようと勝手だが、それでは私を吹き鳴らすこと

もできないぞ。……

（ポロニアス入り來る。）

やア機嫌が好くて結構だな。

ポロ。 殿下、お妃さまがあなたにお話し申したいから、すぐにとの仰せでございます。

ハム。 あの雲が見えるかい。恰度駱駝の形をしてゐるぢやないか。

ポロ。 いかにも、仰有るとほり、全く駱駝のやうでございますな。

ハム。 と云つて鼬のやうにも見えるぢやないか。

ポロ。 なるほど鼬のやうな脊つきをして居りますな。

ハム。 いや鯨によく似てるぢやないか。

ポロ。 ほんとうによく鯨に似て居ります。

ハム。 それならやがて母上の處へ參ると云つて呉れ。……堪忍ができぬ程私を愚弄してゐる……後からすぐ行くと云つて呉れ。

ポロ。 左樣申しませう。

ハム。 口ですぐ行くと云ふだけはやさしい。

（ポロニアス去る。）

諸君ももう行つて呉れたまへ。

（ハムレットを殘して、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン等も去る。）

今こそ夜の魔やかし時、墳墓はすべて口を開き、地獄は毒氣を地上に息吹く。今から俺も熱血を呑み畫が見たら戰くやうな慘事をもやる事ができる。が待てよ。先づ母上の處へ。おゝ心よ。汝の本性を失ふな。ネロが魂を決してこの胸に入り込ますな。殘忍であれ、併し決して道に背くな。言葉に劍を含むとも、決して手には劍をもたすな。舌と心とは裏表と云はゞ云へ、言葉で如何に罵つても、それに手形を押しちやならぬぞ。いゝか……。

（ハムレット去る。）

第三場　城内の一室

（國王、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン入り來る。）

國王。 私はあれを好まぬばかりでなく、あれの狂暴を縱にして置くのは私達の身の上にも安心がならぬと思ふ。それで私はおまへたちに早速國書を認め、彼をつれて英國へ遣はさうと云ふのだ。だから準備にかゝるがいゝ。我が國今日の狀況は、刻々に募り行く狂態の危險さを忍ぶ事ができないのだ。

ギル。 準備致すでございませう。御稜威の下に生息いたし居りまする數知れぬ國民の安危をお氣づかひ下さるのは、有難くも尊い大御心でございます。

ロー。 他人に差障りのない獨身人さへ災禍を避ける爲めには智力心謀の限りを盡します。ましてその御心の安危の上に萬民の生死が依つて懸つて居る御身の上でございます。上御一人の死はそれのみにてはとゞまりません。例へば大海の渦卷のやうに、あたりの物一切を引入れて諸共に亡びると申します。王者はたとへば高山の頂に据ゑた大風車の様に、その巨輪のまはりには幾萬の小物が欲入附着してゐるので、一旦崩れ落ちる時には、如何に些小な附屬物でも、轟然たる破壞を免れませぬ。尊上御一人の嘆息には必ず億兆の呻きが伴ふものでございます。

國王。 ではどうか急いで出帆の準備をして呉れ。餘り自由に横行させて置いたこの危險物を早く鎖につなぎたいから。

ローゼンクランツ、ギルデンスタアン。 〕

ギル。 〕では急いで致しませう。

（ローゼンクランツ、ギルデンスタアン去る。）

（ポロニアス入り來る。）

ポロ。 陛下、皇子には只今母上の御部屋へおいでなさるところでございます。私は帳の陰に身をかくし始終を立聽き致しませう。お妃は屹度嚴しく御戒めなさる事と存じます。それから陛下のお仰せ通りいかにも賢いお仰せでござりまするが、御さしむかひにては自然骨肉の間柄故、御最屓耳もございませうから、もう一人誰か立聽き致すが便宜と存じます。では御機嫌ようお過しなさいまし。いづれ又御寢なさる前に伺候して、委細を言上いたしませう。

國王。 それは忝じけない。

（ポロニアス入る。）

おゝ何と云ふ俺の罪の汚なさ、その匂ひは天までとゞいてゐる。その上にはこの世開けて眞つ先きの呪ひが宿つてゐる。兄殺しの呪ひだ。祈らうと思ふ心は深く湧いても、祈るに祈られない。私のより深い祈念をも消して了ひ、恰も二事を追ふものゝやうに、どつちを初めたらいゝかと迷つて、兩方とも閑却にしてゐるのだ。たとへこの呪はしい私の手が、兄の血で二倍の大きさになつて居つても、雪より白く洗ひ淨めるに、天上の雨が足りないだらうか。罪人の顏に對はないなら、大慈悲の役はどこに立つのだ。祈れば墮落を未然に救ひ、墮落せしものも救ひを得る。この二つの力がなくば、祈禱に何の効があるのだ。さうだ神に縋るしかない。私の罪は過去だ。併しあゝ何と云つて祈つたものだらう。「吾が

非道の毒害を許させ給へ」か。……これではいけない。それが欲しくて殺害した、この王冠や私の野心、私の妃がこの儘私の手にある中は、どうして罪だけ許されよう。この世の腐爛つた流れの中では、罪人の手も黄金で鍍金をすれば正義公道を以て推され、邪に得た財寶で國法を買ふ事さへある。けれども天上の法廷ではさうは行かぬ。何一つ詐りもなく、行ひはそのありのまゝの姿で横はり、而も吾々の罪狀に、まざ〳〵面をつき合せて、無理にも證據を見せられると云ふ。ではどうしよう。この上殘つてゐる事は、懺悔の力を頼まうか。懺悔なら何でもゆるせるだらう。が併し眞の懺悔のできぬ者には何ができよう。おみじめなざまだなあ。おゝ死のやうに眞暗なこの胸。おゝもがけばもがく程、鞠にからまるこの心、救ひ給へ天使たち。試み給へ。跪け、頑なる膝よ。鋼鐵の筋を持つた心よ、生れたばかりのみどり兒が筋より柔かくなつて呉れ。すべての願ひが叶ひますやう……。

（王退いて跪拜す。）

（ハムレット入り來る。）

ハム。 今こそ丁度仕遂ぐるにいゝ時だぞ。彼は祈禱の最中だし、私は怨を晴らしてやる。さうすれば彼は天へ行き、私はさうして復讐する。がそれは考へものだ。一人の惡漢が私の父を殺す、そしてそのためにたつた一人の子たる俺が、その惡漢を天へ送る。おゝこれは

傭はれの給料仕事だ。復讐ぢやない。彼の兇手にかゝつた時は、父の胸には物欲満ち、すべての罪業咲き亂れて、五月の花より鮮かだつたに違ひない。その御咎めの輕重は天より外に誰が知らう。併し吾々の狀況に鑑み、推測の糸を辿つて見るに、父の咎めはさぞ重からう。それだのに今私は彼奴が後世を祈る最中、天にも昇る用意ある時、彼を殺して復讐ができるか。いや〳〵。劍よ、鳴りを靜めて、もつと好機の來るのを待て。醉ひ伏すか、激怒してゐるか、邪淫に耽るか、勝負を賭するか、僞誓をするか、救ひの道のないやうな汚れた所爲をしてゐる時に、彼を倒したならば、彼の踵は天を蹴つて、彼の心は墮ちて行く地獄のやうに眞暗闇だ。母上が待ち兼ねてゐる。しばらく命を預けて置くのは、おまへの病んでる日月を永びかすためばかりにするのだ。

（ハムレット去る。）

國王。 （立ち上つて）言葉は天へ昇つても、私の心は地にとゞまつてゐる。眞心のない言葉は決して天に屆きはすまい。

（去る。）

第四場　皇后の部屋

（王妃とポロニアスと入り來る。）

ポロ。 すぐおいでゞございませう。手嚴しくお戒めなさいまし。餘りといへば方途もないお惡戲に、お怒りなされた王樣との中に立つて、御妃さまが種々御調停なすつた事を篤とお話しなさいまし。いやもう默りませう。ではどうぞ十分におやんなさいますよう。

ハム。 （奥にて）母上、母上、母上。

皇后。 請け合ひました。決して心配しないでお呉れ。さアお隱れ。あれが來た樣子だから。

（ポロニアス垂れ幔の後にかくれる。）

（ハムレット入り來る。）

ハム。 さア母上、どんな御用ですか。

皇后。 ハムレットや、おまへはお父さまに飛んだ不都合をおしだね。

ハム。 母上、あなたはお父さまに飛んだ不都合をなさいましたな。

皇后。 これ〳〵、おまへは取りとめもない答をするね。

ハム。 それ〳〵、あなたは正しくない問ひをなさいます。

皇后。 これはまアどうしたのだえハムレット。

ハム。 何うした事でございます。

皇后。 おまへは私を見忘れたかえ。

ハム。 いゝえ十字架にかけて忘れませぬ。あなたは御妃です。あなたの夫の弟の御妃です。さうして……さうでなかつたらいゝと思ひますが……私の母上です。

皇后。 そんな事を云ふならおまへと問答ができる人を呼んで來て、わたしの代りにこゝへ置くよ。

ハム。 まア〳〵坐つておいでなさいまし。動いてはなりませぬ。私があなたの心の奥まで鏡にかけて見せますまで、こゝを去つてはなりませぬ。

皇后。 何をするのだえ。私を殺さうとするのぢやないか。あれ誰か、助けて、助けて。……

ポロ。 （陰にて）やア〳〵誰か、助けて、助けて、助けて呉れ。

ハム。 （劍をぬいて）どうしたと。鼠だな。參つたか、きつと參つたか。

ポロ。 （陰にて）おゝ殺られた。（倒れて死す）

皇后。 おゝまア、何をしたんだえ。

ハム。 いゝえ、何だか解りませぬ。あれは王ですか。

皇后。 おゝ何といふ手荒い血腥い振舞。

ハム。 血腥い振舞。全くですよお母さん。王を殺害して、その弟と結婚するのと同じ位の惡

事で

皇后。 王を殺して。

ハム。 えゝ母上、さう申しました。

（垂幔をかゝげてポロニアスの死骸を發見する。）

汝、憐れむべき噪急の出過ぎた莫迦者、さやうならだ。私はおまへをもつと尊い人と間違へた。これが自業自得の運とあきらめろ。餘り出しやばりすぎると危險だと云ふことを悟つたか。（皇后に）そんなに手を振絞るのはおやめなさいまし。そして靜かにお坐りなさつて、私にあなたの心を振り絞らして下さい。もしもそれが透出る物質でできてゐて、そのうへ呪はしい習慣で性根に感じが無くなつて居ぬなら、私はきつと絞り出します。

皇后。 私が一體どうしたといふので、そんな暴々しい聲で私に云ひがゝりをするのだえ。

ハム。 どうしたどころですかお母さん。溫雅と廉恥に泥を塗り、德行を僞善と呼ばせ、淨い戀愛の美しい額から、薔薇をとつて水腫を代らせ、堅い夫婦の約束をも、博徒の僞善と同じくするやうな御所爲なのです。おゝ、神に誓つた約束からその魂をぬきとつて、微妙い宗教を言葉のみの狂文とする所爲なのです。天の顏も赤らみ、この固い冷たい大地も、物悲しげな顏をして、恰も終りの日が來たやうに愁ひ悲しむ御所行なのです。

皇后。 言つてお呉れ。そんなに高く喚めき立てるのはどんな行爲だか。頭から雷のやうにちかゝるのだもの。

ハム。 さア御覽なさい。この繪とそれからこれを。之は兄弟二人の肖像です。見なさい、何といふ氣高さがこの額に宿つてゐるでせう。太陽神ハイペリオンの捲き髮、ジョウヴさながらの額。軍神マアズのやうな眼は三軍を叱咤崇服せしめ、立てば使神のマアキュリイズが天をも摩する高峰にすつくとお立ちなされたやう。まことに風貌の美を集めて、世界の人の鑑であると神々が極印をおつけなされたかとも見えます。これがあなたの先の良人です。さア次を御覽なさい。これは此度の良人です。麥の黑穗と同じやうに、健かな兄穗をも枯らして了ふ人非人です。あなたには眼が無いのですか。このやうな美しい山に放ち飼ひをされ乍ら、よくもこんな泥沼にお移りになる事ができましたな。これでもあなたに眼がございますか。あなたはこれを戀と呼ぶことができませぬ。あなたのお年頃では狂ふ血潮も鎭まつて、おとなしく智慮の分別を待つ筈ですから。それだのにどういふ分別でこれからこれへお移りなされたのですか。情慾のあつたからには、きつと感覺もあつたでせうに、さてはその感覺が痺れたのですな。でなくば狂人だつてかうは間違へもしないし、有頂天になつた感覺でもかうまで選擇をあやまつて、こんなに違つたものを見わけ得ぬ事が

どさいませんからな。いかなる惡魔が魅入つたので、あなたをこんな盲目にしたのだ。感じがなくも眼があるなら、目がなくとも感じがあるなら、手と目がなくとも耳があるなら、すべてがなくも鼻があるなら、又は狂つた感覺のいづれか一つがあつたなら、こんなに嗜けはしまいものを。おゝ羞恥心よ、おまへは赤面をやめたのか。呪はしき邪淫よ、おまへが老女の心を狂はすならば、血潮燃え立つ青春の男女が、愼みも蠟と熔かし、おのが情火に消えゆくは尤もな話だ。恥ぢしめるには及ばない。湧き立つ衝動に驅らるゝ時は、霜そのものさへ燃え上り、分別も意志を淫らにするのだから。

皇后。 おゝハムレットや、もう云つてお呉れでない。おまへの言葉で初めて私の眼を魂の中に向けて見た。さうしてそこにはいくら洗つても落ちない黑い汚點のあるのがやうやく解りましたよ。

ハム。 いや、膏ぎつた汗臭い寢床の中に、むさくるしく寢浸りながら、あの忌まはしい豚といちやつくのは……。

皇后。 おゝもう言つてお呉れでない。おまへの言葉は劍のやうに、私の耳をつき刺すのだよ。あゝもうどうか言はないでお呉れ。

ハム。 人殺しで大惡黨。前の良人に比べれば百分一にもあたらぬ奴隷。王の中の下司役者。國を盜む巾着切。人目を掠めて王冠を自分の懷ろにくすね込んだ……。

皇后。 もう言はないで……。

ハム。 襤褸つぎはぎの乞食の王。……

（亡靈あらはる。）

天にまします守りの神々、願はくはその御翼をひろげて、何卒我が身を護らせ給へ。……何の御用でお姿をこゝへ現はしなさつたのだ。

皇后。 おゝ、心が狂つた。

ハム。 徒らに月日を過ごし氣を鈍らせて、あなたの嚴しいお命令の重い仕事を遷延させる、無精の子をば懲らさんためか。おゝ言つて下さい。

亡靈。 忘るゝなよ。今宵姿を現はしたは、汝が鈍づた決意の刃に鋭い磨ぎを與へるためだ。併しながらあれを見よ。怖れ惑つてゐる母がさまを。おゝ彼女と悶えてゐる魂との中に入つてやれ、弱い者ほど強い悶えに苦しむものだ。言葉をかけて慰めてやれ、ハムレットよ。

ハム。 どうなさいました、母上。

皇后。 まア、おまへこそどうしたのだね。何もない虛空を見つめて、形もない空氣と何を語つてゐるのだえ。眼からはおまへの靈が猛々しく覗き出して、恰度眠つてゐた兵隊が不意

に襲はれたやう、伏てゐた髪の毛が生き〳〵と、すつかり逆立つて了つたよ。おゝいとしいわが子よ。亂れた心の熱と焔を冷やして心をおちつけておくれ。どこを見てゐるのだえ。

ハム。 あれを、あれを。御覽なさい。何といふ蒼ざめたお顏の光り。あのお姿でこのお恨み。石に語つて聞かせたら、石さへ心を動かすだらう。……あゝ私を見ないで下さい。そのやうな痛ましい擧動をなさいますと、私の强い意志をかへ、しなくちやならぬ決心の眞の色もなくなつて、血を流すよりは涙に暮るゝばかりになつて了ひませう。

皇后。 誰に話をしてるのだね。

ハム。 あなたには何も見えませぬか。

皇后。 ちつとも、いつも見える外には何も見えないよ。

ハム。 ではどんな聲もお聞きなさいませぬか。

皇后。 聞かないよ。わたしたちの外には。

ハム。 さアあれを御覽なさい。そうツと出て行くのが見えませんか。父上が……御在世の時の衣服のまゝで……あそこへ行きます。今丁度、扉の外へ出ました。

（亡靈去る。）

皇后。 それこそおまへの心の迷ひだよ。亂心をしてゐる時には、ありもせぬ物の形を上手に心で作るものだよ。

ハム。 亂心ですつて。私の脈搏はあなたのと同じやうに、ちやんと間拍子を置いて、健かな音樂を奏でてゐます。さツきから私の云つてる事は一つも亂心ぢやありません。證據に試めして御覽なさい。すつかり繰り返してお目にかけます。狂人ならば言ひ外しませう。母上、來世の慈悲を願ふならば、諂ふ邪念を心に置いて、これがあなたの過失でなく、私の狂氣が云はせるだけだなぞとお考へなさいますな。それこそ惡性の腫物が內攻して膿み爛れ、既に一命にかゝはるのを、表面をつゝむ皮膚や薄膜に瞞されて、目に見えぬのと同じことです。この上は只天に罪を懺悔して、過去を悔い改め、未來をお愼みなさい。雜草に肥料をかけて臭い匂ひをひろめなさるな。……恕せ、わが淑德よ。今の澆季の世の中では、淑德自身が不德の前に、語を低くし頭を下げて、許容を乞はなくちやならないのだ。

皇后。 おゝハムレットや　おまへはわたしのこの胸を眞ツ二つに裂きちぎつて了ふのだね。

ハム。 おゝその片割れの惡るい方を投げ棄てゝ、殘つた方で淨い一生をお送りなさい。ではお寢みなさいまし。が叔父上の寢所へはおいでなさるな。操はなくとも、せめてあるやうな振りをなさいまし。習慣といふ怪物は、惡いといふ感じを喰つて了ふ惡魔だが、時には天使となつて、善い行ひにも矢張り四季施を着せ、身に相應ふやうにして了ふものです。

今夜だけも辛抱なさい。さうすれば次の晩はやゝ容易く、其次の晩は猶ほ容易くなります。習ひは性の印をかへるものですから、きつと惡魔を抑へつけるか、不思議な力でそれを拋り出します。では改めてお寢みなさいまし。お身の祝福をばお祈りなさる時には、私も御祝福を祈り添へませう。此老人については、

（とポローニアスを指して。）

不慾な事を致しました。併しこれとても天意の致すところ、天はこれを以て私を懲らし、私を笞とも代理ともして、此れを罰したのでせう。とにかく死骸を片づけて、殺人の罰を身に果たさう。そんなら改めて又お寢みなさいを申上げます。（傍を向いて）かう殘酷にしなくちやならぬのも、親切心からばかりなのだ。まづ小惡は片づけたが、大惡がまだ殘つてゐるぞ。……母上、もう一言。

皇后。 どうしろと云ふのだえ。

ハム。 なアに、私の申したことなどはみんな棄てゝ、何なりとなさいまし。あの靑脹れの王様から寢床へ誘はるゝまゝまかせ、淫らにその頰を抓つて貰つたり、可愛い者と呼ばれたり、いやらしい接吻を交はしたり、汚らはしい手で首を抱きしめられたりして、何もかも皆打あけて了ひ、私の亂心はまことでなく、實は計略の狂氣だとすつかり云つてお了ひなさい。すつかり知らして了つた方がよろしうございます。何故と云ふなら、ほんとうの淑女、貞女、賢女でなくば、誰がこんな一大事を、蟾蜍に、蝙蝠に、猫又に隱し了せることができませう。誰ができるものか。いゝや、智慧も祕密も要りませぬ。寓話で名高い猿のやうに、屋上で籠をあけて鳥を逃がし、己れもそれを眞似て見ようと、籠の中へ這ひ込んで、首をへし折つたがよう御座いませう。

皇后。 安心してお呉れ。もしも言葉が息から出來て、息が命から出來るものなら、わたしはおまへの云つた事を、打ちあける息も命もないよ。

ハム。 私は英國へ行かなくちやなりませぬ。それを御存じですか。

皇后。 おゝさうだつけね。忘れてゐた。さう定まつてゐたね。

ハム。 既に書面に御璽も捺されて、學友ながら蝮とも思ふ兩人の者が使節の役目を仰せつかり、私の行く手の露を拂つて、まんまと横道へ連れ込まうとしてゐます。いやはや勝手にするがいゝ。自分が懸けた地雷火で自分が打上げられるのを見るのも慰みだ。向ふで穿つ穴よりも三尺下を此方で掘り、月を目がけてあいつ等を飛ばさなかつたらそれこそ不思議。もし此方の謀計が一筋道で出會したら、頗つてもない上出來だ。（ポローニアスを見て）きつとこの男めが私の出立を急がせます。次の室へこの臓腑を引いて行きませう。母上、で

は左様なら、ほんとうにこの顧問官も、生きてる中は馬鹿喋りをする奴だつたが、死んで了へば靜かで默つて生眞面目だな。……さア來い。おまへの始末をつけてやる……さやうなら、母上。

（ハムレットはポロニアスを引ずつて、二人別々に退場する。）

第四幕

第一場　城内の一室

（國王、皇后、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン等入り來る。）

國王。 その息づかひは只事でない。深い吐息の仔細は何だ。早く聞かせて呉れ。皇子はどこにゐる。

皇后。 どうかしばらくこの場を……。

（ローゼンクランツ、ギルデンスタアン去る。）

あゝ、吾が君さま。何といふ目を見たのでせう。

國王。 何だと。ハムレットがどうかしたのか。

皇后。 浪と風とが鬪ふやうな狂ひやう。狂氣のあまり垂帳の陰で何か動くのを聞きつけると、劍をぬき放つて「鼠々」と叫び乍ら、亂れた心の見界もなく、隱れて居つた老人を突殺して了ひました。

國王。おゝ何たる暴行。そこにゐたのが私だつたら、私も同じ目に會ふ處だつた。彼を手放して置くのは皆々の身に危險千萬だ。おまへばかりか、私にも、誰にもさうだ。あゝ、この血腥い亂行を何と云つて辯疏かう。罪は私どもにかゝるのだらう。こんな年若い狂人は前から十分監督して、抑へて人前へ出さないようにするのが吾々の責務だつたのだからな。然るに吾々は只愛に溺れて適當の處置を講じなかつた爲め、惡るい病を持つ人のやうに、人に知られるのを嫌つて、一命にかゝはる迄募らして了つたのだ。して彼は何處へ行つた。

臣后。殺した死骸を片附けに行きました。それを見てはさすがの狂氣も、つまらぬ鑛石の間に黄金の脈があるやうに、正氣を見せて、吾が過失を泣いて居ります。

國王。おゝガアトルウド、さア奥へおいで、朝日が山の頂に觸れるか觸れぬ中に彼を此處から出帆させよう。而してこれらの亂行は私の威光と辯舌とで、うまく繕ひ云ひ譯せねばならぬ。……おい、ギルデンスタアン。

（ローゼンクランツ、ギルデンスタアン再び入り來る。）

兩人とも尙手助けの人々を呼び集めるがいゝ、ハムレットは狂氣の餘りポロニアスを殺害して、母の居間からどこへか運び去つて了つた。彼を探し出して、言葉たくみに言ひくるめ、死骸を禮拜堂へ收めて呉れ。どうか賴む、至急にこれを。……

（ローゼンクランツ、ギルデンスタアン去る。）

おいでガアトルウド。吾々は智慮ある人々を呼び集めて、この椿事と共に吾々のなさんとする事を云ひ聞かさう。世の誹謗の囁きは、世界の果から果まで、的に向ふ砲彈のやうな同じ高さで、毒矢を發するものではあるが、かう先だつて手配りをすれば、狙ひは私の名を外れ、益なき空を射るであらう。さアおいで。私の心は今不安と驚愕に滿ちてゐるのだ。

（去る。）

第二場　城内の他の一室

（ハムレット入り來る。）

ハム。安全に置し終へた。

ロー。
ギル。（奥にて）ハムレットさま。ハムレット殿下。

ハム。何の聲だ。呼ぶのは誰だらう。おゝ、そこへやつて來たな。

ロー。死骸をどうなさいました。

ハム。 親類の土芥と一緒にして了つた。

ロー。 場所を教へて下さいまし。そこから禮拜堂へ運ぶのですから。

ハム。 と思つたら間違ひだぞ。

ロー。 と思つたらとは。

ハム。 なアに、おまへたちの祕密ばかり守つて、私の自分のが守れぬと思つたらさ。それに海綿の云ふ事をきいて、王子ともあらう者がどんな答へができると思ふ。

ロー。 では私を海綿だと仰有るのですか。

ハム。 さうとも。國王の寵愛やら、禮物やら、權威やらを吸ひとるぢやないか。しかしさうしたお役人が王には結局大役立ちさ。王は猿が食物を頰の角にしまつて置くやうにさういふ奴等を飼つて置いて初めは口に入れとくが、終ひには丸呑みにして了ふ。まあ其通り、おまへたちの吸ひ溜めた物が入用となれば、一と締めきうと搾るが最後、海綿の君たちはもとの干乾びだ。

ロー。 私には何だか少しも解りませぬ。

ハム。 それで結構だ。毒言も愚人の耳は刺さない。

ロー。 殿下、死骸の在處を云つて下さい。さうして一緒に陛下の處へ參りませう。

ハム。 死骸は王と一緒だが、王は死骸と一緒にはゐない。王といふ物は……。

ギル。 「物」ですつて、殿下。

ハム。 うむ、何でもない物さ。さあ王の處へ連れて行き給へ。狐はかくれた、皆んな探せ……だ。

（皆々去る。）

第三場　城内の他の一室

（國王、侍臣を從へて入り來る。）

國王。 私は彼を訪ねて死骸を見出すように命じて置いた。かやうな人物を手放して置くとは如何にも危險だ。と云つて嚴刑に處する譯にもゆかない。彼は愚昧な民衆に愛せられて居るからな。愚衆と云ふものは自己の心に判斷を求めずして單に眼にたよるものだ。さうしてこんな場合には罪人を憫れむ方が盛んで、罪を忘れて了ふ。萬事を圓滑平坦に運ぶには、この急な海外派遣も多年躊躇の上と見せねばならない。危篤になつた病氣には、危險な療治が必要なのだ。でなくば到底望みがない。……

（ローゼンクランツ入り來る。）

どうした。どうなつた。

ロー。 死骸をどこにお隠しなすつたか、どうしても聞き出す事ができませんでした。

國王。 それで彼はどこにゐる。

ロー。 室外に居ります。御意を伺ふまでと附添ひを添へまして。

國王。 此處へ連れて來い。

ロー。 おいギルデンスタアン。皇子をこちらへ。

（ハムレットとギルデンスタアン入り來る。）

國王。 さてハムレット、ポロニアスはどこに居る。

ハム。 夕食中です。

國王。 夕食中だと。どこで。

ハム。 どこかで食つて居るのでなくて、喰はれて居るのです。ある蛆蟲の會合が今恰度彼の處で宴席を初めたのです。あの蛆蟲（ウオルムス）といへばほんとに會議の王ですよ。吾々は喰うて肥るためにすべての動物を肥らします、そして蛆蟲のために吾々を肥らすのです。肥つた王も痩せた乞食も只種の變つた獻立で皿は二つだが食ふ口は一つなのです。それがお終ひですよ。

國王。 おや〳〵これは。

ハム。 だから王を喰うた蛆蟲で、魚を釣ることもあらうし、その蛆蟲で育つた魚を食ふ事もあります。

國王。 どういふつもりでそんな事を云ふのだ。

ハム。 なあに只王様でも乞食の腸を巡幸することがあるといふ事をお知らせしたいばかりなのですよ。

國王。 ポロニアスはどこにゐる。

ハム。 天に居ります。見におやんなさい。使ひの者が見つけ得なかつたら、他（ほか）處を御自分で探しなさい。併しほんとに此月中に探せなかつたら、表廣間への階段を登る時、彼れの匂を嗅ぐでせう。

國王。（侍者に）そこを探して來い。

ハム。 おまへがゆく迄逃げやしないよ。

（侍臣二三人去る。）

國王。 ハムレット、おまへが此度の所業は吾々の非常に歎はしく思ふ處だが、一層心を勞するおまへの安全を圖るため、火急に海外へ派遣しなくてはならない。だから準備をするが

いゝ。船は整ひ、風は順で、隨行員も揃つたし、凡べてのものが英國に向はんばかりだ。

ハム。 英國へですな。

國王。 さうだ。

ハム。 よろしい。

國王。 吾々の志を知つて居るなら、さう云はなくちゃならぬ處だ。

ハム。 それを見透す天使が見える。併し、行かう、英吉利へ。さやうなら、母上様。

國王。 父上様と云ふつもりでか。

ハム。 母上様です。父上と母上とは夫婦、夫婦は一身です、だから母上様、さやうなら、さあ行かう英國へ。

（ハムレット去る。）

國王。 おまへたちは跡を追うて、すぐ船へ乘せろ。遷延するな。今夜のうちに出してやるのだ。行け。之にかゝはるすべての事は手筈がすつかり整つてゐる。どうか急いでやつて呉れ。

（ローセンクランツ、ギルデンスタアン去る。）

さて英吉利王。汝が面上に殘るデンマアクの劍痕はまだ生々と赤く、心からの畏敬に服從

してゐるから、吾が大いなる權威は汝を命のまゝにせしむる力があらうと思ふが、苟も吾が愛を重んずるならば、私の命令をよも冷かに扱ひはすまい。その委細はこと〴〵く書中に認めてある通り、すぐさまハムレットの死を願ふのだ。やつて呉れイギリス王。彼は恰も惡黨のやうに吾が血の中を荒れ廻つてゐる。それを癒すが汝のつとめだ。事の成就を聞くまでは、どんな事が起らうとも、私は喜ぶことができない。

（皆々去る。）

第四場　デンマアクの平野

（フォーチンブラス、隊長、兵士等進軍中。）

フォー。 隊長、行つてデンマアク王に御挨拶申上げろ。而して豫ての御許可により、フォーチンブラスが契約通り領内を進軍致したき旨奏上するのだ。會合地は知つてゐるだらうな。もし陛下が御用でもあるならば、早速謁見して務めを果たすから、さう申上げて呉れ。

隊長。 畏りました。

フォー。 靜かに進め。

ハムレット

（フォーチンブラスと兵卒去る。）
（ハムレット、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン其他入り來る。）

ハム。 もし〳〵、これはどこの軍勢だね。

隊長。 ノルウェイのであります。

ハム。 どういふ目的なのだね、聞かして呉れ給へ。

隊長。 ポーランド征討のためであります。

ハム。 誰が指揮をしてゐるのだね。

隊長。 ノルウェイ老王の甥、フォーチンブラス閣下であります。

ハム。 ポーランド本土へ向ふのかね、それともその邊境へかね。

隊長。 實を申せば、懸値のない所、名ばかりで何の役にも立たぬ小さな地面を得るために行くのであります。金貨五つを拂つてゞも、たつた五つでも借りたくはない處で、たとへ賣却をしたところが、ノルウェイの手にも、ポーランドの手にもそれ以上の額は入りますまい。

ハム。 ふゝむ、そんならポーランド人も防戰はしないだらうね。

隊長。 いえ、既に守備兵を置きました。

ハム。 二千人の精靈と二萬兩の金貨とでは、この始末はつくまい。これこそ富國泰平の過ぎた膿瘍だ。それが內部に口を發いて、外からではどうして死んだかわからぬやうなものだ。……いやどうも有難う。

隊長。 では御免下さいまし。

（隊長去る。）

ロー。 さア行かうではございませんか。

ハム。 すぐ一緒にならう。一足先きへ行つて呉れ。

（ハムレットを殘して皆々去る。）

見るもの聞くもの悉く私を責めて、鈍つた復讐心に拍車をかけてゐるな。人間が何だ。もし食つたり寢たりの外に一生の大事がなかつたなら、獸以上には出ない。吾々人間に前を見、後ろを顧みる大智見力を賦與した造物者は、きつとこの能力と神の如き理性とを使はずに錆びさせよとて與へたのではないのだ。本來私は獸のやうに忘れ易いのか。それとも事を餘り細かく考へ過ぎて、それで決斷がつかないのか。……吾が心を四分すれば、たつた一分が智慧だけで、あとの三分はいつも臆病なのかな。……私には解らない、なすべき理由もあり意志もあり力もあり手段もあり乍ら、どうして「これはしなくちやならぬ」と

口で云つてるばかりで日を消してゐるのだらう。地球ほど大きな實例が私を勵ましてゐる。この軍勢を見ろ。あんなに多くの人數と費用をかけ、之を率ゐるのはまだ纖弱な皇太子が心を神々しい野心に皷吹され、眼に見えぬ成行を物ともせず、有爲無常の一身をすべての運や死や危險に曝して、卵の殼ほどの地を得んとしてゐるのだ。正しく偉人たるものは偉大なる理由なくしては動かぬ。併し名譽が危機に瀕してる場合には一本の藁のためにも大に爭はねばならない。ところで私の立場はどうだ。父を殺され、母を辱しめられ、理にも血にも勵まされ乍ら、すべてを眠らして居るとは。しかも今眼の前を二萬の將卒が、吾に恥ぢよとばかり差迫れる死に赴くではないか。彼等は幻影同様の名譽のために墓に赴くこと恰も床に往くが如く、その軍勢を容るゝにも足らねば、死者を埋むべき墓所にも足らぬ土地のために戰うてゐるではないか。あゝ、今日より後は私の心は鬼ともなれ。でなくば少しの値もないぞ。

（ハムレット去る。）

第五場　エルシノオア。城内の一室

（皇后、ホレエシオ、及び一人の貴紳入り來る。）

皇后。わたしは彼の女に會ひたくないよ。

貴紳。頻りに拜謁を願つて居ります、全く心が亂れた様子で、心の程不憫と存ぜられます。

皇后。どうしたいと云ふのだらうね。

貴紳。云ふ事の多くは亡父の事でございます。この世には種々な陰謀があるとやら云ひ立て、咳拂をしたり、胸を打つたり、忌々しさうに藁を蹴散らかしたり、半分位ゐしか意味の解らぬ妙な事を申します。云ふ事はとりとめのない事ですが、正體の知れぬその言葉は聞く人の心を動かして意味を取聚めさせます。人々はそれを當て推量したり、自分の考へに當嵌るやう言葉を補足したりしてゐます。併し、其時目瞬きや、點頭きや、手振りをし乍ら云ふのを聞くと、何も確かではないが、大した不幸があるぞといふやうな事を考へさせられます。

ホレ。お逢ひなされた方が宜しうございませう。でないと事を好む人たちの心に危險な臆說を撒くかも知れませぬ。

皇后。ではつれておいで……。

（ホレエシオ去る。）

罪ある者の習ひとして、わたしの傷もつ心には、どんなつまらぬ事でも大凶事の前觸れか

と驚かれる。身に覺えある者は徒らに疑心のみ深く、現はるゝを恐れて却つて現はれる。

（ホレエシオ、オフィリアを伴ひて入り來る。）

オフ。 うるはしきデンマアクのお妃さまはどこに入らせられますか。

皇后。 どうしたのだえ、オフィリア。

オフ。（歌ふ。）

「汝がまことの戀人と、
何をしるしに見分くべき。
貝を飾れる詣で笠、
杖を片手に草鞋穿き。」

皇后。 おゝ、可愛いゝオフィリア、その歌の意味は。

オフ。 何でございます。まあ、どうぞお聽きあそばせ。（歌ふ）

「今はあの世に旅衣、
あの世に今は旅衣。
頭に茂る八重葎、
足に冷たき墓の石。」

皇后。 いや、お待ち、オフィリア。

オフ。 まあお聽きなさいませ。（歌ふ）

「白き墓衣は雪のごと、……

（國王入り來る。）

皇后。 おゝ御覽なさいませ。吾が君。

オフ。（歌ふ）

「うるはし花に包まれて、
涙の雨に濡れそぼち、
墳墓さして歩みゆく。」

國王。 どうしたのだ、可愛いゝ娘よ。

オフ。 無事ですわ、お蔭さまで。人の話では梟はもと麵麭屋の娘だつたさうです。私どもゝ只今は何であるか解つてゐますが、この先き何になるかわかりません。御機嫌よろしう。

國王。 父のことを考へてるのだな。

オフ。 どうぞもう何も云はないで下さいまし。併しどう云ふ譯かと訊かれたら、かう仰有いまし。（歌ふ）

「明日はヴレンチン聖者の祭り、」
朝のまだきにいち早く、
君が戸ぼそに私忍ぶ女の
君が情人とならばやな。……」

國王。 可愛いゝオフィリア。

オフ。 ほんとうにね、誓ひなんぞなしにして、すつかり片をつけませうね。（歌ふ）

國王。 いつ頃からこんな風になつたのだ。

オフ。 私なんでもよく行くように望んでゐますの。辛抱しなくちやなりませんわ。でもあの人が冷たい地の中に寢かされてると思ふと泣かずには居られないんですもの。兄さんも今に解つてよ。ほんとにあなたの御意見は有難うございますわ。さア馬車を持つておいで。さやうなら、貴女。さやうなら。皆々さま、さやうなら、さやうなら。

（オフィリア去る。）

國王。 彼女の跡を追うて、どうか萬事に氣を附けて呉れ。

（ポレエシオ去る。）

おゝこれこそ深い嘆きの中毒だ。すべては彼が父の死に源を發してゐる。おゝガアトルウド、ガアトルウド。悲しみの來やうは、たつた一人間諜のやうに來るのではなくて、大擧して來るものだな。第一に彼女の父が殺害。次にはおまへの息子が遠流。尤もこの流謫は自分自らがその制作者なのだから仕方がない。それからポロニアスが死に對する愚民等が惡推量と騒擾。これも吾々の思慮が足りないで極く内密に葬つた爲め。殊に可哀さうなオフィリアが愁嘆に分別を失つて、吾々も只繪畫か禽獸としか見えぬまでの狂亂。最後に、とりわけて重大な事は、彼女が兄なるレエアチイズがひそかに佛蘭西よりの歸還だ。彼は疑惑の念に育てられ、悲愁の雲に包まれて、父の死に對する有象無象等の流語蜚語に耳を毒されてゐる。確固たる事實の證據がないものだから、やむなく私の罪だとして耳から耳へ訴へてゐる噂を信じてゐるらしい。おゝわが愛するガアトルウドよ。これこそ矢彈の前に立つて、胸を撃たれて死ぬ思ひだ。

（奥で騒がしい物音がする。）

皇后。 あら、何の騒ぎでせう。

國王。 スウィツル人はどこにゐる。彼等に戸口を固めさせろ。

（一人の廷臣入り來る。）

何事だ。

廷臣。 陛下、この場を御遁れなさいまし。逆捲く洋が津浪となつて、岸をうつより勢猛く、血氣盛んなレエアチイズが、暴徒を率ゐて、廷臣どもを打退け、只今これへ參ります。一揆は彼を王と呼び、世界がこれから初まつて、古典は忘れられ、慣例はすてられ、彼等の言葉のみが杖とも柱ともなつたやうに、「我々の推擧だ。レエアチイズを王とする」と叫んで、帽をふり、手をあげ、舌をふるつて雲に響けとばかり、「レエアチイズを王とする。レエアチイズが王だ。」と唱へて居ります。

皇后。 違つた道を嗅ぎ出して、これは又何といふ誇らしい吠えやうをするだらう。おゝ、それは間違ひだよ、愚かなデンマアクの狩犬ども。

（奥で凄まじい物音。）

國王。 戸が破れたな。

（レエアチイズ武裝して入り來る。デンマアク人等あとから續く。）

レエ。 王はどこにゐる。……あなた方は皆んな外に居て呉れないか。

丁抹人。 いや、吾々も入れて下さい。

レエ。 どうか賴む。私に任せて下さい。

丁抹人。 ではさうします。承知しました。

（彼等は戸の外へ退く。）

レエ。 言ふ事を聞いて呉れて有難う。では戸を守つてゐて下さい。おゝ汝、暴君。私の父を復せ。

皇后。 まア靜まりなさいよ、レエアチイズ。

レエ。 此場に及んで靜まる血が、只の一滴でもあるならば、吾れは眞は私生兒であつて、眞の父を姦夫と呼び、淸淨潔白の母の額に、淫婦と燒印を捺すに同じだ。

國王。 レエアチイズ、一體どういふ譯があつて、さう巨人が荒れるやうに謀叛を企てるのだ、すてゝ置きなさい、ガアトルウド。私の身を心配する事はない。國王の身邊には自ら神々しい墻壁があつて、逆賊どもは只なさうと窺ふだけの事で、志を遂げる事はなか〳〵出來ない。……さあ語れレエアチイズ、何故おまへはそんなに哮るのだ。……すてゝ置きなさい、ガアトルウド。……さあ語れ。なぜだ。

レエ。 私の父はどこに居る。

國王。 死んだ。

皇后。 けれど、陛下のせゐぢやないんだよ。

國王。 まア存分に云はせるがいゝ。

レエ。 どうして死んだのだ。私は欺されはしないぞ。君臣の義務も地獄へ棄てた。主從の誓ひも眞つ黑な惡魔に與れた。良心も慈悲も奈落の底へ投げたぞ。呪ひも罰も恐れるものか、あの世もなければこの世もない。將來はどうともなるがいゝ。只俺は存分に父の恨みを晴らすのだ。

國王。 どうしたらおまへを止められるだらう。

レエ。 私の意志でなくちや止まらぬ。世界中かゝつても駄目だ。さうして私は微力ながら、うまく力を統べ頒つて、見事に威力を盡して見せるぞ。

國王。 レエアチイズよ、おまへはそんなに親父の死因を確かと知らうとしてゐるが、いざ復讐の段になつたら、誰彼の辨別なく、敵味方を一とからげにして、善惡ともに打つゝもりか。

レエ。 いゝや目ざすは敵ばかりだ。

國王。 ではその敵が知りたくないか。

レエ。 父の良友に對してはこのやうに腕を打ちひろげて、子のため命を惜しまないあの親切はペリカン鳥のやうに、吾が血で以て饗應しよう。

國王。 うむ。さう云うてこそ孝子らしくもあり、紳士らしくもある振舞だ。汝が父の死に就ては私はもとより更に罪なく、かへつていたく嘆き悲しんだ事は、おまへの心に判斷力があつたら、日を睹るよりも明かにわかる。

丁抹人。（奥にて）入らせろ、入らせろ。

レエ。 何だ。何の騒ぎだらう。

（オフィリア再び草花をつけて入り來る。）

おゝ熱よ。わが腦漿を乾らして盡くせ。七度汐せる苦き涙よ。わが眼の感じと力とを燒き亡ぼせ。汝の狂氣は天に誓つて、秤の皿の轉覆へる迄、十二分の重さで報いてやるぞ。お五月の薔薇。なつかしき處女、いとしき妹、美しきオフィリアよ。おゝ神々。うら若い少女の心も老人の命同樣かうまで脆く亡びると云ふ事があるものですか。性は愛慕によつて美妙になる。さては美妙な魂が、愛するものゝ影を慕うて、歸らぬ處へあこがれ去つたか。

オフ。（歌ふ）

「顏も掩はず柩車で送る。
へいのんのんにい、のんにい、へいのんにい。
墓にや降るふる涙雨……。」

さやうならよ、小鳩さん。

レエ。 正氣で居つて、讐をとつて呉れと云つたとて、これほど私の心を動かしはすまい。

オフ。 あなたはかう歌はなくちやいけませんわ。（歌ふ）だうんなだうん、彼をだうなと呼ぶならば……おゝ紡車を引いて唱つたらどんなに似合ふでせう。この歌にある主人の娘を盗んだ不義者はその家の手代なのですよ。

レエ。 とりとめのないのが心あるに幾倍だか知れやしない。

オフ。 （レエアティズに）さあこれが迷迭香、覺え草ともいひます。あなたにこれを上げますから、どうか覺えて居て下さい。それからが胡蝶草。物を思への思ひ草よ。

レエ。 狂氣の中にも訓言がある。吻を思へ、覺えて居よとはふさはしい。

オフ。 （國王に）あなたにはこの茴香といふ諂ひ草と、恩を忘れる小田卷草。（皇后に）あなたには昔を悔やむこの芸香よ。私にもそれを少しとつて置かう。これは又安息日には惠み草とも云ひますわ。おゝお前は自分でその草の着け方をかへなくちやいけないよ。それからこれが雛菊の裝ひ草。お前には誠を盡くす菫草をあげたいのだけれど、それはお父さんが死んだ時、すつかり萎れて了つた。人の話ではいゝ御最後をお遂げなすつたとか……

（歌ふ）「いとしの君ゆゑ我が世はたのし。

レエ。 憂ひ、苦み、惱みはおろか、焦熱地獄のその儘をも、慕しく美しきものと變へて居る。

オフ。 （歌ふ）

「ふたゝび君は來まさぬや、
君はふたゝび歸らぬや。
歸らじ、君は死にたれば。
おのが命のつくるまで、
待てども君は歸り來じ。

み髯は雪と見紛ひて、
頭は蔽ふ麻の髪。
君はこの世に今はなく、
吾はなげけど詮もなし。
神よめぐみを彼の靈に。」

序に皆さまの魂にも、どうぞ神様。ではさやうなら。

レエ。 おゝ神よ、あれを御覽になりましたか。

（オフィリア去る。）

國王。 レエアチイズ。私におまへのその嘆きを頒けて與れぬか、でないとおまへが私の好意を無にする譯だ。併しまあ此場を去つて、好きな賢明な友人を選び集め、おまへと私の間の是非曲直を聽いて判斷せしめるがいゝ。直接間接の論なく、此手が一指たりとも觸れたと知れたなら、此王國も、此王冠も、此生命も、あらゆる所有物も償ひとしておまへに與へる。併し罪なしと解つたなら、心を鎭めて吾がいふ事をよく聞けよ。さうすればおまへと力を協せて、きつと望みを遂げさせてやる。

レエ。 ではさうすると致しませう。父が突然の死狀、曖昧な葬式、記念物もなければ劍もなく、遺骨を飾る物は一つもない上、貴族の身分にふさはしい表立つた儀式もせぬのが……天から地上に轟くやうに、怨みの聲を揚げてるからには、私は罪を糺さなくちやなりませぬ。

國王。 さうするがいゝ。そして罪のある所に大なる斧を下してやるのだ。さアどうか一緒に來て與れ。

（王と共にレエアチイズ去る。）

第六場　城内の他の一室

（ホレエシオ一侍者と入り來る。）

ホレ。 私と話がしたいといふのは一體何者だ。

侍者。 水夫でございます。あなたに宛てた手紙を持參したと申して居ります。

ホレ。 では通すがいゝ。

（侍者去る。）

世界の何處からも消息のありさうな當はない。もしハムレット樣からでないとすると。

（水夫等入り來る。）

一水夫。 旦那、御機嫌ようございます。

ホレ。 おまへたちも壯健でゐるように。

一水夫。 有難うございます。茲にあなた樣への手紙がございます。英國へおいでなさる筈の使節から參つたものでございます。……あなたの名がホレエシオと仰有るやうに聞きましたが、さうでしたら……。

ホレ。（讀む）『ホレエシオ足下。此書狀披見せられし上は、此輩をして王に謁するの機を得

せしめよ。彼等は王に獻る書を携へたり。海に出でゝ未だ三日を閲さゞるに、極めて慓悍なる海賊の一隊は吾等を襲ひたり、帆走餘りに遲きを發見したる吾々は、勇を鼓して敵對するの止むなきに至り、接戰して吾は賊船に乘り移りぬ。此時恰も彼の吾が船を去る遠かりしかば、吾は只一人賊の捕虜となれり。賊の吾を遇するや恰も義盜の如く、蓋し彼等も思ふ所ありて、後に吾によりて利せんとするものに似たり。王に吾が書を獻じ置きて足下は死を賭するの全速力を以て吾が許に來れ。足下の耳に入れなば呆然啞ならしむる底の奇聞あれど、語は意を盡すべく餘りに輕きを如何せん。この善良なる徒輩は汝を吾が在處に案内すべし、ローゼンクランツ、ギルデンスタアンの兩名は英國へ赴けり彼等に就ても語るべき數多を有す。草々。

足下が莫逆の友たるハムレット。」

さあ來い、持參した此書狀を陛下に獻ずる道を講じよう。出來るだけ早くそれを濟まして、それを寄越した人の處へ案内して呉れ。

（共に去る。）

第七場　城内の他の一室

（國王とレエアチイズと入り來る。）

國王。 此上はもう私を疑ふ心も解けて、心から吾を良友と思はなくてはならない。事の次第をよく聞いて、おまへの父を殺した奴は吾が命をも狙つた者だといふ事に得心したら、必ずさうあるべきだ。

レエ。 成程さうかとも思はれます。併し何故かやうな行爲に對し、罪惡に滿ち、生命にかゝはる惡事に對して相應な處分をしなかつたのです。あなた自分の安危にかけ、智慧をふるひ、すべて其他の物によつて、第一に打棄てゝ置けぬ程の暴行ですのに。

國王。 おゝ、それは二つの理由からだ。それはおまへには恐らく重大とは見えまいけれど、私にはなかなか有力なのだ。先づ彼が母たる妃は、殆んど彼が顔を見ずには生きて居られない。その上この私にとつても……德不德のいづれかは知らぬが妃こそ吾が心身をつなぐ綱で、星の星座を離れ得ぬやうに私も妃を離れては在る事が出來ない。次に、公けに罪を課する事のできぬ第二の動機は、一般男女が彼に對する愛着だ。愚民の愛情に彼が過失を浸すときは、恰も靈泉が木を石と變ずる如く、重罪を化して美德として了ふ。それで生中私の矢は、吠え哮る風に逆うては竹が輕る過ぎ、却つて私の額に撥ね返されて狙つた處へ屆かぬのだ。

レエ。 そんならそれで私はむさ〳〵と父を失ひ、妹を絶望の狂氣に追ひやつて了つたのか。
潮つて賞めるならば、彼女の完全の事には古今を貫いて誰一人匹儔を見なかつた女だつたが……。併しきつと復讐してやるぞ。

國王。 それに就ては枕を高うしてゐるがいゝ。口髭に火のつくやうな危急を見のがして、それを興がる程の凡庸愚鈍の木や金から、吾々が出來てゐると思つてはならぬぞ。追々もつと話して聞かさう。私はおまへの父を愛し、又自分をも愛してゐる。で自らそれを以ても推察はつくだらうが……。

（一人の使者入り來る。）

どうした。何の知らせだ。

使者。 ハムレットさまからの御書狀でございます。これは陛下へ、これはお妃さまへのでございます。

國王。 ハムレットから。誰が持つて來た。

使者。 水夫だと申す事でございます。私は會ひません。それはクラウディオの手から受取りましたが、彼は持つて來た當人から落手したと申します。

國王。 レエアチイズ、まあ聞くがいゝ。さあおまへは退がれ。

（使者去る。）

（讀む）『至高にして至尊なる陛下、一書を呈して吾赤裸々にして御邦土に歸着せる旨を奏上せんとす。明朝乞ふらくは龍顏に咫尺し奉らむ。若し卑願に御許しを賜はらば、先づ寛大なる大御心に縋りて、吾が唐突にして、更に奇怪なる歸國の顚末を物語り申すべし。

ハムレット』

これは又どうした譯だ。他の者も皆歸つて來たのか。或ひは何かの僞りで、根も葉もない作り事か。

レエ。 手蹟に覺えはございませんか。

國王。 確かにハムレットの字だ。「赤裸々にして。」……返し書にも「只一人」と書いてある。何かおまへの意見はないかな。

レエ。 少しも合點が行きませぬ。併し歸つたのは却つて宜しい。それを聞いたら病みついた心も熱して來ました。それでは皇子の目のあたり「覺えがあらう」と糺してやります。

國王。 レエアチイズよ。若し果して歸國したのなら……どうして歸國したものか兎に角じたに違ひないからしいから……私の言ふ事に從ふか。

レエ。 えゝ從ひます。が穩にせよなどゝお言附け過ごしはないでせうな。

國王。 おまへの胸を穏かにさせようと思へばこそだ。もし彼が航海半ばに歸國し、再び後航を企てぬつもりでゐるならば、彼にすゝめて兼ねて吾が腹中に熟したる一事を試みさせ、それによつて倒るゝより外に道無からしめようと思ふ。さうすれば彼の死に對して如何なる非難の風も起らず、現在の母さへ謀計とは心づかずに不意の變事と思ふであらう。

レエ。 陛下、お仰せに從ひます。私をその企ての道具にお使ひ下さるなら、尙結構でございます。

國王。 それこそ願ふ處だ。おまへは外遊以來屢々噂の種となつて、しかもハムレットが面前で、おまへが堪能だと云ふその一藝については殊に噂が高かつた。おまへの才藝すべてを取り集めても、その一藝ほどハムレットが羨ましく思つたものはないのだ。私の眼から見ればそれはおまへの他の藝に比べると數ならぬものに思はれるが……。

レエ。 その藝と云ふのは何でせう。

國王。 若者の帽子につける飾紐に過ぎないのだが、又無くちやならぬものなのだ。老後になれば健全と品位とを旨とした黑ずんだ衣類が似合ふやうに、若者には輕快濶達な衣裝が似合ふ。二月ばかり前、此處にノルマンディの騎士だちが來た。私は親しく見もし、闘ひもして、佛蘭西人の馬術に巧みなのを知つてゐるがこの武士どもに至つては裡に魔力を持つてゐるのだ。鞍壺に生え着き、神變不思議に乘り廻して、さながら駿馬と合體し、同じく性を頒つたものゝやう。いくら想像の翼を驅つても、其實際には及ばぬ程、私の思ひと懸絶してゐた。

レエ。 ノルマン人でございましたか。

國王。 ノルマン人であつた。

レエ。 ではきつと、ラモンドでございませう。

國王。 その通りだ。

レエ。 彼ならば私も知つて居ります。彼は彼の國民すべての衿針でもあり、寶石でもあります。

國王。 その男が兜をぬいでおまへの妙技を噂して行つた。おまへが護身術の鍛錬の中にも、殊に細身の劍術にかけては、おまへに敵し得るものがあらばそれこそ觀物だと呼んだし、佛蘭西の劍客などはおまへが向ふに廻つたら、進退も、守衛も、着眼もあつたものでないと誓つた位ゐだ。この話がハムレットの美望心を刺戟して、何でも彼でもおまへが急に歸國して、一試合する機の來るのを只管望んでゐたらしい。で今、これをかゝりとして……。

レエ。 これをかゝりとしてどうするのですか。

國王。 レエアチイズ、父上がほんとになつかしいか。それとも哀傷は描いたも同樣で、顏と心は別々なのか。

レエ。 どうしてそんな事をお聞きなさいます。

國王。 父を愛する孝心がおまへにないとは思はぬけれど、吾が知る處では、愛は時によつて初められ、事實證據を見て知つてゐるが、時は又愛の火勢を增減するものだ。愛の焰の其中に、やがては燃ゆるを止める燈心のやうな黑い點が出來て來る。物として永しなへに善なるはない。何となれば善も多きに過ぐる時は、過ぎたるがために亡びる。爲さうと思つた事は、なさうと思つた時になすべきだ。何故といふに此「なさう」がいろ〳〵に變化し、舌の數　手の數、事の數の世にある限り、限りなく遷り變る。それに又この「なすべきだ」も放蕩者の嘆息と同じく、一時の氣安めで却つて害をなすものだ。それは兎も角、重要な事に移つて、ハムレット歸國の件だが、おまへはどういふ企てをして、父の子たる實を行ひに現はさうとするのか。單に言葉ばかりでなく。……

レエ。 教會堂の眞ん中で皇子の喉を打切ります。

國王。 ほんとにどんな靈場でも殺人の大罪を庇ひはすまい。復讐には何の界もないのだ。併し乍らレエアチイズよ。この復讐を遂げたいなら、しばらく室內に籠つて居なさい。ハム

レットが歸つたなら、おまへが歸朝の由を知らせ、わざと人にお前の優秀を賞めたてさせて、フランス人が云つた名聲に、二重塗りをして、結局雙方に賭けて試合をさせるとしよう。計略なんぞは鵝の毛も悟らぬ馬鹿正直の彼だから、双を改めるやうな事はすまい。それ故やす〳〵と、少しばかりの誤魔化しでおまへは双を引かぬ劍を選べる。そしたら計略の一突きで、父の怨みを酬いてしまへ。

レエ。 お仰せ通りに致しませう。そして其企てのためには私の劍に塗るものがございます。私がある香具師から買ひとつて置いた油藥で、一たびその中に尖鋒を浸せば、其血を流すところ僅かなかすり傷でも、月の中にありとあらゆる靈草より採り集めたる稀代の名膏も、命を落すのを救ふ事が出來ない。私はこの毒藥を尖に塗ります。すれば輕い擦傷を負はしたゞけで、命をとる事ができませう。

國王。 尙此上とも熟慮を凝らして、吾等が目的に適ふやうに、時機や手段の便宜を調べよう。もしも萬一此事破れて、そのため惡事露顯に及ぶやうな事があるなら、初めよりしない方が宜しい。だからこの企てには、初めの手段が露はれても、とつて代る後のもの、第二のものがなくてはならない。待てよ。かうつと。まづ奸計に美々しい賭をしてと、……うむ思ひついた。激しく爭ふ其中にきつと熱し渴くだらうから……又さうなるように試合を激

しくするがいゝ……さうすれば彼は飲むものを求めよう。その時私は毒盃を用意して、それを只一嘗めすれば、よしや毒刄は免れても、こつちの狙ひが外れはすまい。

（皇后入り來る。）

どうしたのだ。可愛い妃。

皇后。 悲哀が踵を接して參りました。おまへの妹は溺れて死んだよ。レエアチイズ。

レエ。 溺れ死んだ。おゝ、どこで。

皇后。 斜に生えた楊柳が、白い葉裏を玻璃のやうな流れに映す小川の岸へ、雛菊、蕁麻、毛茛、……淫らな牧人どもは汚らはしい名で呼ぶが、淨い處女は死人の指と呼んでゐる、芝蘭の花でこしらへた、心も幻の花輪を携へ、垂れたる枝に其一つを掛けようとして攀ぢ登れば、妬み深くも小枝が折れて、片身の花輪もろともに、其身も流れに落ちました。ひろがる裳裾に支へられて、人魚のやうに浮び上がり、自が不幸を知らないのか、もとより水に棲むものゝやゞ、古い小唄の幾節かを唄ひつづけて居りましたが、併しそれも僅かの間で、遂には衣服が水をふくみ、重みに引かれて歌聲やみ、水底深く沈んださうだよ。

レエ。 おゝそれでは妹は溺れ死んだか。

皇后。 溺れ死んだよ、溺れ死んだのだよ。

レエ。 可哀さうな妹よ。おまへは水を澤山呑み過ぎたらうから、私は涙を手向けはしないぞ。とは云ふものゝこれが癖だ。涙が出ずにゐられない。笑はゞ笑へ。習ひは人力でどうにも出來ない。これが盡きて了つたら、女々しい根性もなくならう。さやうなら、陛下。烈火と燃え立つ文句はあつても、この愚なものに消されて了ふ。

國王。 さあ追いてゆかう、ガアトルウド。彼の怒りを鎭めるため、いくら骨を折つたか知れぬ。今又これが因となつて再發しないかと心配してゐる。だから從いて行かう。

（國王と皇后と去る。）

第五幕

第一場　墓地

（二人の道化役『墓掘男』鶴嘴などを携へて入り來る。）

道化役一。 自分で氣儘に大往生をした女子を本式に葬らなくちやならねえのか。

道化役二。 うむさうとも。だから早く墓を掘れ。檢死の御役人が檢分して、本式にしても可いと云つたんだ。

道一。 どうして本式になんぞ出來るんだ。吾身を庇うて身を投げたんでもねえのに。

道二。 なアに、さうとわかつたのだよ。

道一。 どうしてもさうあるには「庇ひ投げ」でなくちやならねえ。でなくちや駄目な筈だ。何故と云ふにかう云ふ要領だ。まづ俺がわざと身を投げるとするな。それが所行と云ふもんだ。で所行には三つの小分けがある。行ふこと、爲ること、成すことの三つだ。かるが故にだ、彼の女はわざと身を投げたとしなくちやならねえ。

道二。 だがなア、まア聞けよ、墓掘り爺さん。

道一。 まア云はして呉れ。いゝか、此處に水がある。いゝか、此處には人が立つてゐる。もし人が水の中へ入つて行つて、溺れ死んだら、それア好かうと好くまいと、自分で行つたんだ。……いゝか覺えて置け。併し、もし水の方からやつて來て溺れ死んだとしたら、それや身投げぢやねえ。かるが故にだ。吾れと吾が命を縮めるんでねえ分にや、自殺の罪にやならねえんだ。

道二。 だが、それがお上の法律かね。

道一。 うむ、だからさ。それが檢死の御定法といふもんだ。

道二。 眞實の所を云つて了はうか。これが身分の高い貴婦人でねえなら、本式に葬られはしねえんだよ。

道一。 さうよ、おめえの云ふ通りだ。身分の高い人達ほど平の信者より身投をしたり、首をくゝる便宜が多いのは笑止だなあ。さあ一と掘り掘るか。一體世の中に庭師と溝掘りと、墓掘り位古い家柄の御方はありやしねえ。アダムの職業を受け繼いでゐるんだからな。

道二。 アダムは身分のある御方だつたのかな。

道一。 初めて御定紋をつけた人で、道具を持つてる方ぢやないか。

道二。なあに、持つてるもんかい。
道一。おや、こいつあ異教徒か。ちや聖書をどう解釋するんだ。聖書にも「アダム掘れり」と書いてあるぢやないか。道具がなくてどうして掘れる。それからも一つおまへに問ひをかけるが、そいつに答へができなければ、眞直ぐに白狀して……。
道二。さあきけ。
道一。石工よりも、大工よりも、船大工よりももつと堅固なものを作るのは誰だ。
道二。絞首臺を作る人だ。主が千人變つても壞れやしない。
道一。おめえの頓智も隅には置けないな、全く。絞首臺とはいゝ。併しいゝには違ひないが何のためにいゝんだ。惡い奴のためにはいゝんぢやないか。それをおまへがお寺よりも丈夫に作つてあるなんぞいふのはどく惡いから、つまり絞首臺はそんな惡いことを云ふおまへのやうな奴にいゝんだ。さあ、やりなほしやりなほし。
道二。「石工よりも、大工よりも、船大工よりも堅固なものを作るのは誰だ」つて云ふのか。
道一。さうよ。早く答へて荷を下ろせ。
道二。うむ、解つたぞ。
道一。ちや云へ。

道二。なに、解りやしねえ。
（ハムレットとホレエショと遠方に入り來る。）
道一。もうさう鈍頭を叩くなよ。ぼんやりした驢馬は鞭でうつたつて歩き出しやしねえや。だから此度さう聞かれたら、「それあ墓掘りだ」と云ひねえ。墓掘りがつくる家は審判日まで續くんだ。さあヨオアンの處へ行つて、酒を一ぺえ取つて來いよ。
（道化役二は去る。一は掘りながら唄ふ。）
「おらも若い時や色戀ひやつて、
樂しうれしと思ひもしたが、
先きが短かくなりや、此身のためか、
今ぢや何もかも阿呆らしい。」
ハム。此奴め墓を掘り乍ら歌を唄ふとは、自分の仕事に何の感じも持たないのかな。
ホレ。馴れて平氣になつたんでございませう。
ハム。全くさうだ。少ししか使はぬ手は細かい事にも感じるのだ。
道一。（歌ふ）
「忍び足して寄る年波に、

いつか吾が身もうちさらはれて、
果ては島根にうち上げられて、
變り果てたよ、これこんな物に。」
（と一つの頭の髑骨を投げ上げる。）

ハム。あの髑髏にも舌があつて、嘗つては歌も歌つたらうに。人殺しの元祖カインの顱骨でもあるやうに彼奴は地面に叩きつけてゐるとは。今こそこんな匹夫に翻弄されてゐるが、もとは神の目も眩ますやうな政治家の頭だつたかも知れぬ。さうぢやないか、ホレエシオ。

ホレ。さうかも知れませぬ。

ハム。でなくば、廷臣の頭で、「お早うございまする、殿様。御機嫌はいかゞでございまする。」なぞと云つたかも知れぬ。それともあとで所望する必要上、だれ〳〵それの馬を讃めたてただれかれだつたかも知れぬ。さうぢやないかな。

ホレ。さうですな。

ハム。なに、正にさうだ。しかるに今は蛆蟲夫人の持ちもの、願もなくなつて、寺男の鍬で腦天を打叩かれる。こゝにも微妙な轉變があつて、吾々の目にこそ映らないばかりなのだ。

あゝ此等の骨どもはあんな抛棒戯に使はれるしか、もう資格がないのだらうか。考へると胸が痛くなる。

道化役一。（歌ふ）

「鍬に鶴嘴、鶴嘴に鍬に、
つけて添へたる蠟帷子よ。
掘つて作つた土室こそは、
そんなお客にやふさはしい。」
（又一つの頭蓋骨を抛り出す。）

ハム。又一つ。あれが代言人の頭蓋であるまいものでもない。あゝ彼が得意の言ひ脫けや、詭辯や、判例や、所有權や、奇計は今いづこにある。何故このやうな田夫野人に汚ない鋤鍬で腦天を叩くまゝにまかして置くのか。何故毆打の訴訟を起すと云はぬのだ。ふむ。此男は生きてる中に澤山土地を買ひ取り、律令だとか、承認だとか、或ひは終結讓與、二重證人、返納讓與など〻持ち廻つた奴でもあらうに。かう泥にまみれた頭蓋骨を持ち廻られるのが、所謂終結讓與の終結で、返納讓與の返報なのか。その證人も最早彼の買收權に有利の證書を與へて呉れぬか。二重證人とても亦、取り交した契約書の面積よりすこしか

役立たぬか。此函の中には土地讓渡しの證書さへあるまい。おまけに讓り受けた當人さへもう此有様とならなくちやならぬか。えゝ。

ホレ。 全くそれに違ひございません。

ハム。 證書の用紙は羊の皮で作るのか。

ホレ。 えゝ、犢の皮でもこしらへます。

ハム。 そいつを當にする奴等は羊か犢だ。一つこの男と話しをして見よう。……おい。その墓は誰のだな。

道化役一。 私のでございますよ。（歌ふ）

「掘つて作つた土室こそは、
そんなお客に似合ふゆゑ。」

ハム。 成程、おまへのに違ひない。おまへはそこに入つてるからなあ。

道一。 あなたはこれの外に立つて居りますから、あなたのではありません。私にしますれば、中に入つてはゐませんが、それでも私のものでございますよ。

ハム。 おまへが現在入つてゐ乍ら、おまへの墓だといふのは、それこそ嘘に入つてゐるのだ。墓は死者のためで、生きてる者のためではない。だからおまへ嘘をついてる。

道一。 早速ながらそれこそ生きてる嘘でございますよ。これで洒落の御返報が濟みました。

ハム。 では如何なる男のために墓を掘るのだ。

道一。 どんな男のためでもございません。

ハム。 では如何なる女のためだ。

道一。 女のためでもございません。

ハム。 誰がそんなら葬られるのだ。

道一。 生きてる中は女でございましたが、可哀さうに、死んで了ひました。

ハム。 何といふ小理窟をいふ奴だらう。言葉遣ひの表でも見て云はぬと、すぐ揚足を取られて了ふ。眞實だよホレエシオ。此三年と云ふもの私の目について居るが、ほんとに時勢が鋭くなつて、農夫の爪先が廷臣の踵に接屆き、その凍瘡を擦るほどだ。……おまへはいつ頃から墓掘りをしてゐる。

道一。 一年三百六十五日のうちで、先のハムレット王様がフォオチンブラスを打敗かした日からでございます。

ハム。 それからもう何年になる。

道一。 それを御存知ないのですか。どんな莫迦者だつて知つてゐまさあ。若いハムレットさ

まがお生れなすつた丁度その日でございますよ。そら、その氣狂ひになつて英國へやられた……。

ハム。うむ、さうだ。どうして又英國へなんぞやられたのだらうな。

道一。なあに、氣狂ひだからでさあ。あそこへ行つたら正氣におなんなさるだらう。ならなくたつて、かまひやしない。

ハム。どうして。

道一。あそこに居れば目立ちますまい。皆んなが同じく氣狂ひですからな。

ハム。どうして又ハムレットは氣が狂つたのだらう。

道一。それが大變不思議だと申します。

ハム。どんなに不思議なのだな。

道一。ほんとうに、正氣をなくして了つたのださうで。

ハム。どういふところからだらう。

道一。なあに、どういふ處つて、此デンマアクでさすよ。私はこゝに棲みついて居ります、子供の時から、三十年も。

ハム。人が地に入つて腐る迄に何年かゝるかな。

道一。さやうですな。死ぬ前から腐つてさへ居なければ……此頃は痘瘡にかゝつた死骸が澤山來ましてそいつらは迚も耐ちませんが……まあ八九年はかゝりませうな。尤も鞣皮工は九年位ゐ耐ちます。

ハム。どうしてさう永くもつのかな。

道一。なあに、あなた、商賣柄皮が鞣してあるもんで、久しい間水を彈くからでさあ。この水つて奴が第一に死骸を腐らせるものなんでございますよ。こゝに髑髏がありますが、これなんぞは二十三年から地中に入つて居たんです。

ハム。それは誰のだ。

道一。手のつけられないきちがひ野郎のでございます。一體誰のだと思ひますかな。

ハム。いゝや、俺は知らない。

道一。氣狂野郎、疫病にでも取りつかれやがれ。こいつは私の頭にラインの葡萄酒を一罐浴びせやがつた事があります。この髑髏めは王様の幇間だつたヨリックの骸骨でございます。

ハム。これがか。

道一。えゝさやうで。

ハム。見せて呉れ。（髑髏を手にとつて）おゝ、哀れなるヨリック。私はこれを知つてゐるぞ。

ホレエシオ。諧謔百出奇想天外の男だつた……。私を千度も背に負うて歩いたものだつた。それだのに今は思ひ出すのも忌はしい此有様。えゝ胸が悪くなる。こゝに懸つてた脣に幾度接吻したか知れぬ。……おゝおまへの悪まれ口は今どこにあるのだ。おまへの踊りは。おまへの歌は。滿座を笑倒せしめたあの滑稽諧謔は。齒をむき出した此態をからかふ者は一人もないのか。うんとも云はぬか。さあこれから婦人たちの部屋へ行つて、一寸厚みに塗り立てゝも、遂にはこんな顏にならなくちやならぬと云つて笑はせて來るがいゝ。……なあ、ホレエシオ、きゝたい事が一つある。

ホレ。 何ですか。

ハム。 アレキサンダアも地中に在つてはこんな風に見えたゞらうかな。

ホレ。 さうでございませうな。

ハム。 そしてこんな臭ひがしたらうかな。ペッ。（髑髏を落す。）

ホレ。 さうでございませうな。

ハム。 死んだ後はどんなあさましい用に使はれるか解らぬなあ。ホレエシオ。想像で辿つて見ると貴いアレキサンダアの土でも、結局酒樽の冗塞になつて居るかも知れない。

ホレ。 さうお考へになるのは餘り奇想の末に走つたものでございませう。

ハム。 いや全くだ。違ひないよ。もつと穩當に考へて行つたところで、やつぱりそこに歸着する。まあかうだ。アレキサンダアが死ぬ。葬られる。塵芥に歸する。塵芥と云ふものは土だ。土から粘土ができる。卽ちアレキサンダアの化して成つた粘土で、麥酒樽の塞ぎを作らぬ譯もないぢやないか。

萬乘のシイザアも死しては粘土と化し、
徒らに風前の罅隙をや塞がん。
あなあはれ、嘗て世を震駭せし土、
今は只嚴冬に破壁をつゞる。

しッ。靜かに。傍へ行かう。あすこへ王がやつてくる。

（僧侶等其他行列をなして入り來る。つゞいてオフィリアの死骸、レエアチイズ、及び哀悼者。次に國王、皇后、その儀仗などつゞく。）

皇后も來れば廷臣等も。何者の葬送だらう、あんな片輪の儀式は。あれこそ葬る死者が必死の手で吾れと吾が命をとつた徵だ。身分の高い者だな。しばらく匿れて樣子を見よう。

（ハムレット、ホレエシオと共に退く。）

レエ。 外に儀式はないんですか。

ハム。 あれはレエアチイズだ。立派な若者だなあ。

レエ。 外に儀式はないんですか。

僧侶一。 お妹さまの葬式は吾々宗法の許す限り鄭重に致したのです。御最期が疑はしかつたので、大命の恒例を枉ぐることなくば、何の淨めも行はずに審判の喇叭の響くまで此儘にして置く筈。而して大慈悲を願ふ祈禱の代りには、瓦、石、礫のたぐひを骸の上に投げかくべき所、處女相當の花冠り、式の如き撒き花、鐘を鳴らしての埋葬まで、皆特別に許されたのです。

レエ。 ではもう此上の儀式は出來ぬといふのですか。

僧侶一。 もうなりませぬ。正しく此世を去つた靈と同じく、彼等のために讃歌を唱へて休らひを願ふは、葬儀の神聖を瀆すといふもの。

レエ。 土の中に彼女を横へろ。そして淨く美しいその肉體から、菫の花が咲き出て呉れ。やい、情を知らぬ僧侶共、おまへたちが虚僞の經文を吠えてる間に、妹は天使になるだらうぞ。

ハム。 なに、あの美しいオフィリアが。

皇后。 可愛い人に可愛い花を。さやうなら。（花を撒く）わがハムレットの妻となる日を待つてゐたのにねえ。可愛い子よ、おまへの新床を飾らうとこそ思つてゐたが、墳墓に花を撒かうなどとは夢にも私は思はなかつたよ。

レエ。 おゝ三重の禍ひよ。十倍を三度重ねて、彼奴が呪はしい頭に下れ。彼奴こそ殘忍な行を以て汝の正氣を奪ひ去つたのだぞ。しばらく土をかけるのをやめろ。もう一度俺の腕で妹を抱かなくちやならないんだ。

（墓の中に跳り入る。）

さあ積め、おまへの土を積め。生者と死者の用捨は要らぬ。積んで遂には此平地に、かの古へのペリオンも、青藍烟るオリムパスの空にもまがふ高峯も、眼下に見下す山を作れ。

ハム。（進み出でゝ）おう何者なればかゝる誇大な悲嘆を發する。汝が哀悼の言葉には、天循る星も眩惑され、驚き傷む聞き手の如く、しばしは空にとゞまるだらう。かくいふ俺はデンマアク王嗣ハムレットだぞ。

（同じく墓中に跳り入る。）

レエ。 惡魔が汝の魂を奪へ。

（と二人掴み合ふ。）

ハム。 そのお願ひはよくあるまい。これ、まあ喉の手を離して呉れ。俺は怒り易くもなく、

又粗暴でもないけれど、何か危險なものを心に持つてゐるのだから、用心するのが怜悧だらうぞ。手を放せ。

國王。 兩人を引き分けろ。

皇后。 ハムレット。ハムレット。

皆々。 お二人とも……。

ホレ。 まあ殿下、靜かになさいまし。

（侍臣ら二人を引分ける、二人は墓から出て來る。）

ハム。 なに、此事だけは、俺の眼瞼の動く間は、彼と爭はずには居られない。

皇后。 おゝハムレット。此事とは何をいふのだえ。

ハム。 私はオフィリアを愛する。四萬人の實兄が、すべての愛を重ねても、俺の量には及びもしない。おまへは彼女の爲めにどんな事をする。

國王。 おゝ、あれは氣狂ひだよ、レエアチイズ。

皇后。 どうか賴むから堪へておくれ。

ハム。 さあどうだ、しようと思ふ事をして見せろ。泣かうと云ふのか。鬪はうと云ふのか、斷食しようといふのか。身を裂かうと云ふのか。酢を飲まうと云ふのか。鰐を食ふか。俺だつてやつて見せるぞ。おまへは吠えに此處に來たのか。墓穴に跳び込んで私の顏を潰さうとするのか。彼女と一緒に生埋めになる。そんなら私もならう。山の高言を並べるなら、吾々二人の此上に、幾萬坪の土をも積ませ、積んで遂には其山が、燃ゆる日輪に巔を焦がし、オッサの山を抗ともなせ……だ。いやなに高言を吐くのなら、俺もおまへに敗はとらない。

皇后。 あれはほんとに亂心のためばかりだよ。しばらくはあゝ狂ひ廻つてゐるけれど、やがては母鳩が黃金の雛を孵した時と同じやうに、默つて面伏せくなるだらうよ。

ハム。 聞いたかおまへ。何だつておまへは俺をこんなに扱ふんだ。俺はおまへを愛してゐたのに。が併しかまふまい。ハアキリイズが有りたけの力を盡した所で、矢つ張り猫はにやんと啼き、犬は犬で日を暮らす。

（ハムレット去る。）

國王。 どうか賴むホレエシオ。彼に侍してゐて呉れ。

（ホレエシオ去る。）

（レエアチイズに）昨夜の言葉を賴として、もう少しの忍耐をしてゐて呉れ。すぐさまあの事を試みよう。ガアトルウドどの、おまへの子に氣をつけてゐて呉れよ。この墓には不朽

の記念碑を立てさせよう。そしたらやがて安穏な時が來る。それまでは先づ、萬事堪忍だ。

（皆々去る。）

第二場　城内の大廣間

（ハムレットとホレエシオ入り來る。）

ハム。 その事はそれだけだ。さて今度は別な話だが、君はすつかり事情を覺えてゐるだらうね。

ホレ。 覺えてゐるだらうとは。

ハム。 なに、私の心に一種の苦闘があつて、そいつが私を眠らせなかつたのさ。つく〴〵自分で鐵枷に絏がれてゐる叛徒にも劣る境涯と嘆じてゐる中、ふと向不見に思ひ立つて……これが向不見の功德といふもの……深い計畫の破れた時には、吾々の無分別も時としては大功を立てる事があるものだよ。而してこれで教へられたは、荒削りはどんなに人間がした所で、仕上げをするのは神業だといふ事だ。

ホレ。 それは全くさうに違ひありません。

ハム。 そつと船室から起き出て、海員外套を肩に引掛け、暗中を手探りして見つけ出さうとした處が、望み通りその包みに指が觸れ、とう〳〵吾が室へ持ち歸つて、身を思ふ餘り作法も何も打忘れて、大膽にも彼等の大命を開封したのだ。所がどうだらうホレエシオ。それに書かれた王の奸計は。……デンマアクのためにも、亦英吉利のためにも、ほう！　私を生かし置くは妖怪幽鬼の如く怖ろしき故、此書一覽次第、寸時の猶豫もなく、且つは斧を磨ぐ間もなく、頭を打落せと、種々様々な口實を繕ひ立てた嚴命なのだ。

ホレ。 そんな事が有り得ませうか。

ハム。 其書面は茲にある。後でゆつくり讀むがいゝ。併しそれはそれとして、其先き私がどうしたか話さうか。

ホレ。 どうぞお聞かせ下さいまし。

ハム。 まあそんな工合に私は四面惡黨に取りかこまれてゐたので、……まだ腦中に序曲も書き下ろさぬ中に、もう活劇が初まつたのだ。……卽ち私は腰を据ゑて、新らしい國書を案文し、手蹟見事に認めたものだ。私も嘗ては此國の政治家同樣、字を能く書くのを卑しとなし、一旦覺えた習字をば、忘れやうとばかりして居つたが、そいつが今度忠僕の役をつとめた譯だ。ところで私が何を書いたか知りたいかな。

ホレ。 えゝ、知りたうございます。

ハム。 王よりの懇なる依頼狀さ。そも〳〵英吉利は忠誠無二の屬國なればとか、兩國の友誼は楡の如く榮ゆべき筈なればとか、平和の神は常に小麥の花冠を頂きて、兩國親交の仲介たるべければとか、そんなやうな重荷を負うた駑馬を並べ立て、此書の內容御一覽御知悉の上は、少しの思考をも廻らさず懺悔の餘裕をだに與へずして、立どころに此書持參の兩人を死刑に處せらるべしと書いた。

ホレ。 その御璽印はどうなさいました。

ハム。 なに、そいつが又天の配劑さ。私は平生財囊中に父の印璽を持つてゐたが、それが丁抹國璽の模型なのだ。そこで先づ認めた命令書を式の如くに疊み、署名もし、捺印もして、安全に元の處へ置いた、取り換へ子とは誰一人知るものもない。さて次の日があの海賊戰さ。それから後の出來事はもう既に知つてゐる筈だね。

ホレ。 ではローゼンクランツ、ギルデンスタアンはそんな身の果になるのですな。

ハム。 なアに、此度の役廻りを自ら求めた奴共ぢやないか。少しも憫然だとは思はないよ。彼等の破滅は自業自得だ。勇士が互に奮激して火花を散らして切り結ぶ中へ、卑しい奴等が入るのは、兎角危ぶないものなのだ。

ホレ。 いやはや何といふ王の振舞でせう。

ハム。 でかうなつたらもう當然だと思はないか。……彼は吾が父王を弑し、母を弄び、吾が登極の希望を遮り、かゝる奸計を以てして、吾が一命を釣らうとした奴、……かゝる奴を此手に誅するのは、それこそ良心の命ずる所ではないか。この人間の毒蟲を生かして置いて、此上害毒を流さしむるは、正に永刑の大罪ではないか。

ホレ。 程なく英吉利から事件のいきさつを王の處へ知らせやしませんか。

ハム。 うむ、程なくわかるだらう。それ迄の間は私のものだ。人の命は「一」と云ふ程の間さへもない。それはさうして、ホレエシオ。私はレエアチイズに對して吾が身を忘れたのを後悔してゐる。吾が身の上に映し比べて、彼が心の俤を見るやうだ。仲直りをして呉れと云はう。併し餘り大仰な悲嘆のさまに、思はず憤激が高まつたのだ。

ホレ。 靜かに。誰か來たやうです。

（廷臣オスリック入り來る。）

オス。 殿下にはよくこそ御歸朝遊ばされました。

ハム。 いや誠に有難う。（ホレエシオだけに向ひ）この水蠅を知つてるかい。

ホレ。 （ハムレットだけに向ひ）いゝえ、知りませぬ。

ハム。（ホレエシオだけに向ひ）そんならおまへは幸せだ。これを知つてるのは悪徳だからな。彼奴はいゝ土地をしかも澤山持つてゐる。牛馬でも牛馬の王となれば、その飼料槽を國王の食卓へ据ゑる事が出來るのだらうよ。あれは莫迦烏だけれど、さつき云つた通り、泥土を持つてる事は澤山だ。

オス。殿下、もし只今御閑暇でいらせられますなら、國王陛下よりの御言葉をお傳へ致したうございますが。

ハム。愼み畏んで承りませうよ。が、まあ其帽子を正當にお使ひなさい。それは頭へ載せるものでせう。

オス。お言葉は有難うございますが。大變お暑うございますので。

ハム。いや、どうして。大變寒いよ。北風だからね。

オス。成程隨分お寒うございますな。

ハム。併し、それでも私には蒸熱くて、こんな體質には熱いね。

オス。全くでございますよ。大變蒸熱うございます。……何と云つたものか解らぬ程で……。ところで殿下、陛下よりのお吩咐と申しまするは、皇子のために莫大な賭けをなさいました由を申上げて來いとの事でございました。その事件と申しまするは……。

ハム。どうかまあ忘れぬ中に……。（ハムレット、帽子をかぶれと手で指圖する。）

オス。いや殿下、この方が全く私の勝手でございます。ところで殿下、此度歸朝されましたレエアチイズ殿は、全く完全な紳士でございまして、秀れた長所も多く、應待も淑かなら、風采も立派でございますな。全く適切に申しませうなら、彼の人こそは禮讓の早見表乃至は目錄とでも云ひませうか、凡そ紳士として備ふる限りの美德は悉く兼ね備へておゐでになります。

ハム。評し盡して殘す處がない。けれどもねえ、餘り目錄式に彼の長所を數へ擧げると、記憶の算數が混亂して、先方の早い船足を、追ひ掛け切れぬ事にならうぜ。が、ほんとの事、讃める段になれア私も彼を大器量人だと思つてゐるのだ。そして彼の天分は得難くも貴いので、物に喩へて云はうと思つても、似たものとては彼自分の鏡ばかり。況んや彼の眞似をするものなぞは、單にもうその影法師たるに過ぎない。

オス。殿下の御評言は誠に正確でございます。

ハム。と云ふ譯は。いやなに、何故かやうな紳士をば吾々の粗雜な口の端に載せるのだね。

オス。へえ。

ホレ。他の口で云ふと解りませんかな。解りさうなもんですのに。

ハム。 あの人の噂をされたのは何の爲めかね。
オス。 あのレエアチイズの噂をですか。
ホレ。（ハムレットだけに向ひ）財布がもう空になつたのです。金言を使ひ果たして了ひました
ので。
ハム。 うむ。彼の噂をだ。
オス。 豫ねて御承知の事とは存じますが……。
ハム。 うむ、私もさうありたい。が全くの所、さうあつたところで、大して名譽にもなるま
い。それで。
オス。 豫ねて御承知の通り、レエアチイズ殿の秀れたる長所につきまして……。
ハム。 いや知つてゐると敢て云ひはしない。知つて心中彼と優劣を爭つてゐるなどゝ思はれ
るのが厭だからな。併し、善く人を知るは自らを知るの謂なりだ。
オス。 私の申しまするは、彼の武器についてゞございますが、衆人の評價によりますと、こ
の術にかけては無雙ださうでございます。
ハム。 武器は何だね。
オス。 細刄と短劍で。

ハム。 それは彼が武器中の二つだ。が、それで。
オス。 國王陛下には彼に對してバアバリイの駿馬六頭をお賭けなさいました所、それに對
して彼が質としましたのは、承れば、佛蘭西の細身と短劍と、飾帶、劍吊りなんぞとい
ふ附屬品を添へて都合六振り。中にも釣劍機三個は高雅な意匠で、柄との調和もよく、纖
美を極めて、大さう優美な細工でございます。
ハム。 釣劍機と云ふのは。
ホレ。 いづれ御合點なさる迄には、註釋書の手引がなくちやならぬと思ひました。
オス。 釣劍機といふのは劍吊りでございます。
ハム。 腰に大砲でも吊つて歩くことになつたら、そんな言葉も似合ふだらうが、まづそれ迄
は劍吊りであつて欲しいな。併し、それから。六頭のバアバリイ馬に對する六振りのフラ
ンス劍、その附屬品、三個の優美を凝らした釣劍機か。それこそ卽ち丁抹對佛蘭西賭けだ
な。なんでこんなものを、おまへが云ふ通り「質とせられたのだ」
オス。 國王陛下には殿下と彼の人と十二合御試合なさる中、彼は三本より多くは勝てまい。と
お考へになつて、卽ち九に對する十二の賭をなすつたのでございます。もし殿下がその申
合せをお許し下さいますれば、早速にも御試合を催すようにとの事でございます。

ハム。 厭だと申合せたらどうする。

オス。 私の申上げましたは、其申合せでなく、武藝の試合の事でございます。

ハム。 ではこの廣間をぶらついてゐるとしよう。陛下の御意に適ふと云ふなら、恰度私の遊びの時間だ。試合劍を此處へ持つてくるがいゝ。あの人も異存がなく、王も御意が變らぬなら、出來るだけ勝つてもやらう。やりそくなつたら、恥ぢと滅多打ちを食ふだけの事だ。

オス。 その通り復命いたしませうか。

ハム。 この趣旨だけはね。あとの修飾は好きなやうにするがいゝ。

オス。 では永へに私の赤誠を殿下に薦め奉ります。

ハム。 わかつた、わかつた。

（オスリック去る。）

自分で自分を薦めるのも當然だ。外に誰も彼奴のために口を利く奴もあるまいから。

ホレ。 あの鳧はまだ殻がとれぬ癖によく走りますな。

ハム。 彼奴は乳を吸ふ前に、乳房にお辭儀をしたらうよ。あゝいふ風に彼奴をはじめ、多くの澆季の世にちやほやされる小鳥どもは、僅かに時代の調子を呑み込み、禮儀の外部に現はれた習しを覺えてるに過ぎないのだ。泡沫の集り見たやうな愚問で、扇や簸でふるひ別

けられた世評をまんまとくゞりぬける。しかし只一吹き試めしに吹いて見給へ、石鹸玉は忽ち消えるよ。

（一人の貴紳入り來る。）

貴紳。 殿下、陛下が先刻オスリックを以てお薦め申しました所、同人立歸つて、殿下がこの廣間にお待受の由復命いたしました 就ては右レエアチイズとの試合の儀御異存はございますまいか、それとも御延期あそばさるゝか、承つて參れとの事でございます。

ハム。 私の希望は變らない。王の思召次第だ。御都合さへ宜しくば、私の方はいつでも用意が整つてゐる。今でも、いつでもいゝ。今の境遇さへ變りがなければ。

貴紳。 國王陛下、皇后陛下を初め、皆々此處へおいでゞございます。

ハム。 ちやうどよい。

貴紳。 お妃より皇子さまに望ませられますのは、御試合を初める前に、レエアチイズと御和睦の御挨拶をなさるようにとの事でございます。

ハム。 よくこそ御教訓下すつた。

（貴紳去る。）

ホレ。 此賭けはお敗けなさるかも知れませんな。

ハム。 いやさうは思はない。彼が佛蘭西へ行つてから、私も絶えず練習した。數達ひなら勝つだらうよ。とは云ふものゝ胸のあたりがひどく惱ましいやうな氣がする。おまへはさうは思はないか。併しそんな事はかまやしない。

ホレ。 何ですつて。

ハム。 なあに莫迦氣た事さ。恐らく婦人なぞなら氣にかけるかも知れぬ疑惑だ。

ホレ。 お心が進まないなら、おやめなさいまし。兩陛下の御出御をおとゞめして、お障りがあると申しませう。

ハム。 いやちつとも、前兆なんぞ氣にかけやしないよ。雀一匹落ちるのにも特別な天の攝理がある。今來れば後には來ないし、後に來なければ今來よう。よし今は來なくともいつかは必ず來る。覺悟が萬全だ。殘してゆく世に價値がなくば、早く死んでも何の悔があらう。まア此儘にして置けよ。

（國王、皇后、レエアチイズ、貴紳、オスリック、及び從者ら試合劍を持ちて入り來る。）

國王。 さあハムレット。此處へ來てこの手をとつてお呉れ。

（王はハムレットとレエアチイズを握手させる。）

ハム。 許して呉れ給へ。私は君に惡い事をした。併し君が紳士なら許して呉れたまへ。此處に居る方々も知つてゐる通り、又君も聞いたに違ひないが、私は全く亂心のために苦んでゐるのだ。君の感情を傷け、名譽心を害し、奮激を買うたりしたすべての私の行ひは、みんな狂氣のためだ。ハムレットはレエアチイズに無禮を加へたか。いゝや決して加へぬ。もしハムレットが本心を奪はれ、彼にして彼ならざる時に、レエアチイズに無禮を加へたりとも、それは決してハムレットの行ひではない。ハムレットはそれを拒むぞ。それなら誰がしたのだ。彼の狂氣がしたのだ。さうなら、ハムレット自らも害を受けた一人だ。彼の狂氣は哀れなるハムレットの自らの仇敵だ。かう皆々の面前で、底意なく誓つた上は、君が寛大なる心に訴へて、先きの罪は屋根越しに矢を放つて、圖らず同胞を傷けたものと赦して呉れ給へ。

レエ。 その御言葉で、唯今まで復仇の念を燃え立たしてゐた感情だけは釋けました。併し、私の名譽にかゝはる事に於ては、然るべき長老の和解によつて、私の名の立つやうな立派な前例をお見せ下さらぬ中は、一歩も引きませぬ。まづそれまでは、あなたの御申出の友愛を、お言葉の儘に頂いて置くと致しませう。

ハム。 私もそれを疑ひはしない。ではお互に胸襟を開いて、兄弟づくの試合をしよう。試合劍を持つて來い。さアこゝへ。

レエ。さア、私にも一つ。

ハム。レエアチイズ。私はお前に試合劍どころか箔をつけてやるやうなものだ。私のまづさと比べたらお前の手際が引立つて、暗夜の星のやうに輝き出すだらう。

レエ。御冗談を仰有います。

ハム。いや、此手にかけてほんとうだ。

國王。オスリック、兩人に試合劍を渡せ。ハムレットよ。おまへは賭を知つてゐるかな。

ハム。よく存じて居ります。陛下は弱い方へ重い賭をなすつたさうで。

國王。私はそれを氣づかひはしない。兩人の手際はよく知つてゐる。併しレエアチイズが上達を思つて、數違ひにはして置いた。

レエ。これは重すぎる。他の奴を見せて呉れ。

ハム。これが氣に入つた。劍の長さに變りはないか。

オス。はい、變りはございません。

（二人試合の用意をする。）

國王。その卓上に酒瓶を据ゑろ。もしハムレットが第一擊か第二擊か、第三番目の手合せで對手方に報いたならば、すべての壘壁から祝砲を放たしめ、王はハムレットの未來を祝して酒盃を擧げるぞ。而して其盃中には四代のデンマアク王が寶冠に着けた品よりも貴い眞珠を投げ入れよう。さあ盃を呉れ。さうして、「唯今國王がハムレットのために祝盃を擧げる」と、鐘鼓を鳴らして喇叭手に傳へ、喇叭を以て戸外の砲手に知らせ、大砲を放つて天に響かせ、天から地上に傳へさせろ。さあ初めた。おい審判官ども、うつかり眼を放すなよ。

ハム。さあ來い。

レエ。さあ來た。

（兩人闘ひ合ふ。）

ハム。一本。

レエ。なあに。

ハム。審判。

オス。當り、正さしく當り。

レエ。よろしい。も一度。

國王。待て。酒を注げ。ハムレット、此眞珠はおまへのだぞ。かう祝盃を擧げるぞ。

（喇叭の吹奏。奥で祝砲を放つ。）

ハムレットに此盃をやれ。

ハム。 この一番を果たしませう。暫らくそちらへ。さア來い。

（激しく闘ふ。）

もう一本。どうだ。

レエ。 かすつた、かすつたのだ。

國王。 皇子の勝ちだらう。

皇后。 肥つてゐるから、息が切れるだらう。さアハムレットや、この手帛で額の汗をお拭き。

おまへの祝盃は妃が呑み乾しますよ。

ハム。 母上、有難うございます。

國王。 ガアトルウド、飲んではならぬ。

皇后。 いゝえ呑みます。どうぞお許し下さいまし。

國王。 （傍を向いて）それは毒盃だ。もう遅い。

ハム。 まだ飲めさうもありません、母上。やがて飲みます。

皇后。 おいで。おまへの顔を拭かしてお呉れ。

レエ。 陛下、今度こそは打ち込んでお目にかけます。

國王。 打てさうにもないわい。

レエ。 （傍を向いて）とは云へ何んだか良心が咎める。

ハム。 さあ來い、三本目だ。おまへは本氣でやらないのだな。あらん限りの力で突いて來て呉れ。私をなぶつてるんぢゃないか。

レエ。 さう仰有るなら。さあ來い。

（兩人闘ひ合ふ。）

オス。 まだ〳〵、どつちも。

レエ。 〆めたぞ。

（レエアチイズ一突きハムレットを刺す。それより激しき接戰となり、互ひに劍をとりかへて、ハムレット、レエアチイズを刺す。）

國王。 引分けろ。兩人とも逆上したぞ。

ハム。 いや、さあもう一度だ。

（皇后、倒れる。）

オス。 お妃がどうかなすつた。ほう。

ホレ。 雙方とも怪我をしてゐる。どうなさいました、殿下。